

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第40集

市道遺跡(Ⅱ)

牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—市道地区—

1997年11月

豊橋市教育委員会
牟呂地区遺跡調査会

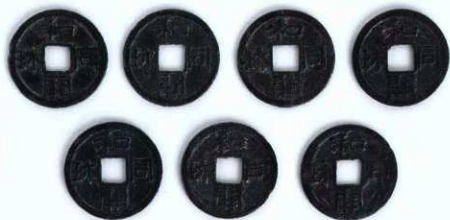
豊橋市埋蔵文化財調査報告書第40集

いち みち
市道遺跡(Ⅱ)

牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—市道地区—

1997年11月

豊橋市教育委員会
牟呂地区遺跡調査会



1. 和同開珎



2. 三彩合子・二彩小壺蓋



1. 伯牙弹琴鏡・提子の環座・螺髻・「寺」墨書土器 (323)



2. 火舎 (134)・鉄鉢 (802)



1. 瓦塔軸部 (29) ・軒丸瓦 (9) ・軒平瓦



2. 34次 講堂 (SB-168) 南から



1. 1次 市道1号窯 (西から)



2. 42次 市道3号窯 (西から)

例 言

1. 本書は愛知県豊橋市牟呂町字市道160他において、牟呂土地区画整理事業に伴って事前に行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書である。市道遺跡は昭和59年度から平成9年度まで47次に及ぶ発掘調査が行われた。報告書は以下のように3冊に分割して刊行する予定であり、第1分冊は『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集 市道遺跡（Ⅰ）』1996年として刊行した。本報告書は第2分冊の『市道遺跡（Ⅱ）』である。

市道遺跡（Ⅰ）：正倉・居館編—北側に広がる掘立柱建物群（刊行済）

市道遺跡（Ⅱ）：寺院編—南側の方1町の寺院跡（本報告書）

市道遺跡（Ⅲ）：補遺・分析編—平成9年度発掘予定の地点及びまとめ

（平成9年度刊行予定）

各年度の発掘調査区担当者等については、第2章調査の経過で詳しく報告する。

2. 発掘調査は豊橋市から委託を受けた牟呂地区遺跡調査会が行い、豊橋市教育委員会が調査の指導に当たった。
3. 発掘作業及び整理作業については、地元の多くの方々のご協力を得た。また、報告書作成に当たり、遺構・遺物の実測・トレース等については、伊藤雅子、井上佳子、稲熊博美、氏原久枝、鈴木泰子、桑原将人、鈴木めぐみ、山本祐了の援助を受けた。遺構写真は各地区の調査担当者が撮影し、遺物写真は賛元洋が撮影した。
4. 発掘調査から報告書作成において、以下の諸機関・諸氏からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

赤塚次郎（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、五十川伸夫（京都大学）、伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、上原真人（京都大学）、尾野善裕（京都国立博物館）、北野博司（石川県立埋蔵文化財センター）、久野正博（浜北市教育委員会）、後藤建一（湖西市教育委員会）、斎藤孝正（文化庁）、柴垣勇夫（愛知県陶磁資料館）、城ヶ谷和弘（愛知県史編纂室）、鈴木隆司（新城市教育委員会）、鈴木徹（小坂井町役場）、鈴木敏則（浜松市博物館）、立松彰（東海市教育委員会）、中川真文（愛知県立知立東高等学校）、中嶋郁夫（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）、橋崎彰一（名古屋学院大学）、野末浩之（清川市教育委員会）、林博道（滋賀県立大学）、林弘之（豊川市教育委員会）、原田幹（愛知県教育委員会）、広岡公夫（富山大学）、藤澤良祐（瀬戸市教育委員会）、前田清彦（豊川市教育委員会）、三辻利一（奈良教育大学）、宮腰健司（愛知県埋蔵文化財センター）、宮本長二郎（東京国立文化財研究所）、山中敏史（奈良国立文化財研究所）、吉田秀則（滋賀県文化財保護協会）、和田晴吾（立命館大学）、和田実（二川宿本陣資料館）、浜松市博物館

5. 本書の執筆と編集は贅 元洋（豊橋市教育委員会）が行った。
6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。また、遺構・遺物の縮尺はそれぞれについて明示した。写真の縮尺は明示したもの以外は任意である。実測図版と写真図版の遺物番号は対応している。
7. 本調査にあたって製作した写真・カラスライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地…………… 1
- 2. 歴史的環境…………… 4

第2章 調査の経過

- 1. 調査の経過…………… 8
- 2. 調査の方法…………… 8

第3章 遺構

- 1. 掘立柱建物 (SB) …… 15
 - A. 総柱建物…………… 16
 - B. 間仕切り建物…………… 17
 - C. 庇付建物…………… 17
 - D. 側柱建物…………… 18
 - E. 竪穴状遺構を伴う建物…………… 18
- 2. 礎石建物 (SB) …… 18
- 3. 竪穴住居 (SB) …… 19
- 4. 塀 (SA) …… 20
- 5. 門 (SM) …… 22
- 6. 幡竿支柱 (SI) …… 23
- 7. 土塋 (SK) …… 23
- 8. 土塋墓 (SK) …… 24
- 9. 不明遺構 (SX) …… 25
- 10. 井戸 (SE) …… 26
- 11. 溝 (SD) …… 27

第4章 遺物

- 1. 土器
 - A. 須恵器…………… 31
 - B. 灰釉陶器…………… 35
 - C. 鉛釉陶器…………… 38
 - D. 中世陶器…………… 38
 - E. 陶磁器…………… 39

F. 土師器	42
G. 土製品	43
2. 瓦	
A. 軒丸瓦	48
B. 軒平瓦	50
C. 丸瓦	51
D. 平瓦	52
E. 道具瓦	54
F. 文字・文様瓦	54
G. 瓦塔	54
H. 螺髪	55
3. 金属器	
A. 銅製品	55
B. 鉄製品	56
4. 石器	57

第5章 まとめ

1. 時期区分の方法	
A. 遺構全体の構成	59
B. 時期区分の決定	62
2. 各時期の遺構	
A. 1期	63
B. 2期	63
C. 3期	66
D. 4期	68
E. 5期	70
F. 6期	72
G. 7期	74
H. 8期	76
I. 9期	76
J. 10期	80
K. 11期	80
3. まとめ	80

挿図目次

挿図 1	牟呂地区周辺地形復元図 (1/10,000)	2
挿図 2	牟呂地区周辺地形図 (1/20,000・明治23年測量)	3
挿図 3	牟呂地区周辺遺跡分布図 (1/15,000)	5
挿図 4	市道地区調査区配置図 (1/2,000)	9
挿図 5	牟呂地区剖図 (1/7,000)	12
挿図 6	市道地区位置図 (1/2,500)	13
挿図 7	市道地区調査区位置図 (1/2,500)	14
挿図 8	S A - 1 位置図 (1/1,000)	20
挿図 9	S A - 2 位置図 (1/1,000)	21
挿図 10	S K - 249 遺物出土状況図 (1/40)	24
挿図 11	S K - 348 遺物出土状況図 (1/20)	25
挿図 12	土器型式分類図 - 1	33
挿図 13	土器型式分類図 - 2	37
挿図 14	土器型式分類図 - 3	41
挿図 15	土器型式分類図 - 4	45
挿図 16	土器型式分類図 - 5	47
挿図 17	1 期遺構配置図 (1/1,000)	64
挿図 18	2 ♪ (1/1,000)	65
挿図 19	3 ♪ (1/1,000)	67
挿図 20	4 ♪ (1/1,000)	69
挿図 21	5 ♪ (1/1,000)	71
挿図 22	6 ♪ (1/1,000)	73
挿図 23	7 ♪ (1/1,000)	75
挿図 24	8 ♪ (1/1,000)	77
挿図 25	9 ♪ (1/1,000)	78
挿図 26	10 ♪ (1/1,000)	80
挿図 27	11 ♪ (1/1,000)	81

挿表目次

挿表1	市道遺跡発掘調査区一覧表	10
挿表2	須恵器型式変更一覧表	34
挿表3	土器型式分類表-1	32
挿表4	灰釉陶器型式変更一覧表	35
挿表5	土器型式分類表-2	36
挿表6	鉛釉陶器型式変更一覧表	38
挿表7	中世陶器型式変更一覧表	39
挿表8	陶磁器型式変更一覧表	39
挿表9	土器型式分類表-3	40
挿表10	土師器型式変更一覧表	43
挿表11	土器型式分類表-4	44
挿表12	土製品型式変更一覧表	48
挿表13	土器型式分類表-5	46
挿表14	時期別建物数一覧表	60
挿表15	種類別・規模別建物数一覧表	60
挿表16	建物時期別棟数一覧表	84
挿表17	建物時期別割合一覧表	84

图版目次

- 第1图 发掘区平面图—1 (1/200)
- 第2图 发掘区平面图—2 (1/200)
- 第3图 发掘区平面图—3 (1/200)
- 第4图 发掘区平面图—4 (1/200)
- 第5图 发掘区平面图—5 (1/200)
- 第6图 发掘区平面图—6 (1/200)
- 第7图 发掘区平面图—7 (1/200)
- 第8图 发掘区平面图—8 (1/200)
- 第9图 发掘区平面图—9 (1/200)
- 第10图 发掘区平面图—10 (1/200)
- 第11图 发掘区平面图—11 (1/200)
- 第12图 发掘区平面图—12 (1/200)
- 第13图 发掘区平面图—13 (1/200)
- 第14图 发掘区平面图—14 (1/200)
- 第15图 发掘区平面图—15 (1/200)
- 第16图 发掘区平面图—16 (1/200)
- 第17图 发掘区平面图—17 (1/200)
- 第18图 竖穴住居—1 (1/50)
- 第19图 竖穴住居—2 (1/50)
- 第20图 掘立柱建物—1 (1/100)
- 第21图 掘立柱建物—2 (1/100)
- 第22图 掘立柱建物—3 (1/100)
- 第23图 掘立柱建物—4 (1/100)
- 第24图 掘立柱建物—5 (1/100)
- 第25图 掘立柱建物—6 (1/100)
- 第26图 掘立柱建物—7 (1/100)
- 第27图 掘立柱建物—8 (1/100)
- 第28图 掘立柱建物—9 (1/100)
- 第29图 掘立柱建物—10 (1/100)
- 第30图 掘立柱建物—11 (1/100)
- 第31图 掘立柱建物—12 (1/100)
- 第32图 掘立柱建物—13 (1/100)
- 第33图 掘立柱建物—14 (1/100)

- 第34图 掘立柱建物—15 (1/100)
- 第35图 掘立柱建物—16 (1/100)
- 第36图 掘立柱建物—17 (1/100)
- 第37图 掘立柱建物—18 (1/100)
- 第38图 掘立柱建物—19 (1/100)
- 第39图 掘立柱建物—20 (1/100)
- 第40图 掘立柱建物—21 (1/100)
- 第41图 掘立柱建物—22 (1/100)
- 第42图 掘立柱建物—23 (1/100)
- 第43图 掘立柱建物—24 (1/100)
- 第44图 掘立柱建物—25 (1/100)
- 第45图 掘立柱建物—26 (1/100)
- 第46图 掘立柱建物—27 (1/100)
- 第47图 掘立柱建物—28 (1/100)
- 第48图 掘立柱建物—29 (1/100)
- 第49图 掘立柱建物—30 (1/100)
- 第50图 掘立柱建物—31 (1/100)
- 第51图 掘立柱建物—32 (1/100)
- 第52图 掘立柱建物—33 (1/100)
- 第53图 塀・門・轆竿支柱 (1/100)
- 第54图 塀・門・井戸 (1/100)
- 第55图 出土土器実測図—1 (1/3)
- 第56图 出土土器実測図—2 (1/3)
- 第57图 出土土器実測図—3 (1/3)
- 第58图 出土土器実測図—4 (1/3)
- 第59图 出土土器実測図—5 (1/3)
- 第60图 出土土器実測図—6 (1/3)
- 第61图 出土土器実測図—7 (1/3)
- 第62图 出土土器実測図—8 (1/3)
- 第63图 出土土器実測図—9 (1/3)
- 第64图 出土土器実測図—10 (1/3)
- 第65图 出土土器実測図—11 (1/3)
- 第66图 出土土器実測図—12 (1/3)
- 第67图 出土土器実測図—13 (1/3)
- 第68图 出土土器実測図—14 (1/3・1/6)
- 第69图 出土土器実測図—15 (1/3)

- 第70图 出土石器实测图-16 (1/3)
- 第71图 出土石器实测图-17 (1/3)
- 第72图 出土石器实测图-18 (1/3·1/6)
- 第73图 出土石器实测图-19 (1/3)
- 第74图 出土石器实测图-20 (1/3)
- 第75图 出土石器实测图-21 (1/3)
- 第76图 出土石器实测图-22 (1/3)
- 第77图 出土石器实测图-23 (1/3)
- 第78图 出土石器实测图-24 (1/3)
- 第79图 出土石器实测图-25 (1/3)
- 第80图 出土石器实测图-26 (1/3)
- 第81图 出土石器实测图-27 (1/3)
- 第82图 出土石器实测图-28 (1/3)
- 第83图 出土石器实测图-29 (1/3)
- 第84图 出土石器实测图-30 (1/3·1/6)
- 第85图 出土石器实测图-31 (1/3·1/6)
- 第86图 出土石器实测图-32 (1/3·1/6)
- 第87图 出土石器实测图-33 (1/3)
- 第88图 出土石器实测图-34 (1/3)
- 第89图 出土石器实测图-35 (1/3)
- 第90图 出土石器实测图-36 (1/3)
- 第91图 出土石器实测图-37 (1/3)
- 第92图 出土石器实测图-38 (1/3)
- 第93图 出土石器实测图-39 (1/3)
- 第94图 出土石器实测图-40 (1/3)
- 第95图 出土石器实测图-41 (1/3·1/6)
- 第96图 出土石器实测图-42 (1/3)
- 第97图 出土石器实测图-43 (1/3)
- 第98图 出土石器实测图-44 (1/3)
- 第99图 出土石器实测图-45 (1/3)
- 第100图 出土石器实测图-46 (1/3)
- 第101图 出土石器实测图-47 (1/3)
- 第102图 出土石器实测图-48 (1/3)
- 第103图 出土瓦实测图-1 (1/4)
- 第104图 出土瓦实测图-2 (1/4)
- 第105图 出土瓦实测图-3 (1/4)

- 第106图 出土瓦实测图—4 (1/4)
第107图 出土瓦实测图—5 (1/4)
第108图 出土瓦实测图—6 (1/4)
第109图 出土瓦实测图—7 (1/4)
第110图 出土瓦实测图—8 (1/4)
第111图 出土瓦实测图—9 (1/4)
第112图 出土瓦实测图—10 (1/4)
第113图 出土瓦实测图—11 (1/4)
第114图 出土瓦实测图—12 (1/4)
第115图 出土瓦实测图—13 (1/4)
第116图 出土瓦实测图—14 (1/4)
第117图 出土瓦实测图—15 (1/4)
第118图 出土瓦实测图—16 (1/4)
第119图 出土瓦实测图—17 (1/4)
第120图 出土瓦实测图—18 (1/4)
第121图 出土瓦实测图—19 (1/4)
第122图 出土瓦实测图—20 (1/4)
第123图 出土瓦实测图—21 (1/4)
第124图 出土瓦实测图—22 (1/4)
第125图 出土瓦实测图—23 (1/4)
第126图 出土瓦实测图—24 (1/4)
第127图 出土瓦实测图—25 (1/4)
第128图 出土瓦实测图—26 (1/4)
第129图 出土瓦塔实测图—1 (1/4)
第130图 出土瓦塔实测图—2 (1/4)
第131图 出土瓦塔实测图—3 (1/4)
第132图 出土瓦塔实测图—4 (1/4·1/2)
第133图 出土金属器实测图—1 (1/2)
第134图 出土金属器实测图—2 (1/2)
第135图 出土钱货实测图—1 (1/1)
第136图 出土钱货实测图—2 (1/1)
第137图 出土钱货实测图—3 (1/1)
第138图 出土钱货实测图—4 (1/1)
第139图 出土石器实测图—1 (1/1·1/3)

表 目 次

- 第 1 表 建物一覽表
- 第 2 表 土壤等一覽表
- 第 3 表 溝一覽表
- 第 4 表 瓦觀察表
- 第 5 表 瓦塔觀察表
- 第 6 表 金屬器觀察表
- 第 7 表 錢貨觀察表
- 第 8 表 SE-11 出土錢貨觀察表
- 第 9 表 土器觀察表

写真図版目次

写真図版 1-1	1次	O-5~7区全景 (南から)	2	1次	M・N-4区全景 (東から)	
	3	1次	O-3~5区近景 (南から)			
写真図版 2-1	1次	O-8区近景 (南から)	2	1次	O-9区近景 (南から)	
写真図版 3-1	1次	S I-2・P-1 (南から)	2	1次	S B-180 (南から)	
写真図版 4-1	1次	S K-172上層遺物出土状況 (北から)				
	2	1次	S K-172下層遺物出土状況 (北から)			
写真図版 5-1	1次	S B-138 (東から)				
	2	1次	S B-138遺物出土状況 (南から)			
写真図版 6-1	1次	S E-2 (北から) - 1	2	1次	S E-2 (北から) - 2	
	3	1次	S E-2 (北から) - 3	4	1次	S E-2 (北から) - 4
	5	1次	S E-2 (北から) - 5	6	1次	S E-2 (北から) - 6
写真図版 7	3次	A~G-4区全景 (東から)				
写真図版 8	3次	I・J-7~9区全景 (南から)				
写真図版 9	3次	I・J-2~7区全景 (北から)				
写真図版 10-1	3次	S B-142 (東から)	2	3次	S B-150 (東から)	
写真図版 11-1	3次	S A-3 (南から)	2	3次	S A-2西辺 (南から)	
写真図版 12-1	3次	S D-8・9遺物出土状況 (西から)				
	2	3次	S D-5・6完掘 (西から)			
写真図版 13-1	3次	S D-6上層遺物出土状況 (北から)				
	2	3次	S D-5上層遺物出土状況 (北から)			
	3	3次	S D-6下層遺物出土状況 (北から)			
	4	3次	S D-6下層遺物出土状況 (南から)			
写真図版 14-1	3次	S D-7遺物出土状況 (南から)				
	2	3次	S D-7遺物出土状況近景 1 (南から)			
	3	3次	S D-7遺物出土状況近景 2 (南から)			
	4	3次	S K-197遺物出土状況 (北東から)			
写真図版 15-1	4次	O~Q-4区全景 (東から)	2	4次	R・S-4区全景 (西から)	
写真図版 16-1	4次	S B-189~192 (東から)				
	2	4次	S D-3遺物出土状況 (北から)			
	3	4次	S D-3完掘 (北から)			
写真図版 17-1	8次	P~R-7・8区全景 (南から)				
	2	8次	R・S-7・8区全景 (南から)			
写真図版 18-1	8次	S K-218遺物出土状況 (東から)				

- 2 8次 SK-218遺物出土状況 (南から)
- 写真図版19 12次 全景 (西から)
- 写真図版20-1 12次 全景 (北から) 2 12次 SM-1 (南から)
- 写真図版21-1 12次 SD-4土層断面 (東から)
- 2 12次 SD-4遺物出土状況 (西から)
- 3 12次 SD-4完掘 (西から)
- 写真図版22-1 12次 SK-220遺物出土状況 (南から)
- 2 12次 SK-220遺物出土状況近景 (南から)
- 写真図版23 17次 全景 (西から)
- 写真図版24-1 17次 SB-204 (東から) 2 17次 SB-203 (南から)
- 3 17次 SK-224遺物出土状況 (南から)
- 写真図版25-1 17次 SB-240遺物出土状況 (南から)
- 2 17次 SB-240完掘 (南から)
- 写真図版26-1 18次 T・U-7・8区全景 (東から)
- 2 18次 T-W-5・6区全景 (東から)
- 写真図版27-1 18次 SA-5全景 (北西から)
- 2 18次 SB-197・198 (西から)
- 写真図版28-1 18次 SB-201・202 (南東から) 2 18次 SB-203 (北東から)
- 3 18次 SB-202 (南から)
- 写真図版29-1 21次 全景 (南から)
- 写真図版30-1 21次 SA-1 (南から) 2 21次 SD-1遺物出土状況 (南から)
- 写真図版31-1 22次 全景 (西から) 2 22次 SA-1・2 (西から)
- 3 22次 SB-160・163 (西から)
- 写真図版32-1 22次 SD-8・9完掘 (西から)
- 2 22次 SD-8遺物出土状況 (西から)
- 3 22次 SD-8・9遺物出土状況 (東から)
- 写真図版33-1 26次 全景 (北から) 2 22次 SB-167 (南から)
- 3 26次 SB-139 (北から)
- 写真図版34-1 26次 SB-139遺物出土状況 (北から)
- 2 26次 SB-139竪遺物出土状況 (西から)
- 写真図版35-1 27次 全景 (西から) 2 27次 Q-S-2~4区全景 (北から)
- 写真図版36-1 27次 SA-1・SD-1 (北から) 2 27次 SA-2 (南から)
- 3 27次 SD-1遺物出土状況 (南から)

- 4 27次 R-2区SD-1 遺物出土状況 (北から)
- 写真図版37-1 27次 SB-140遺物出土状況 (西から)
- 2 27次 SK-246遺物出土状況 (東から)
- 3 27次 SK-246完掘 (東から)
- 4 27次 SK-245遺物出土状況 (西から)
- 写真図版38-1 27次 SK-249、SB-193-195 (北から)
- 2 27次 SK-249遺物出土状況 (南から)
- 3 27次 SK-249鍋 (273)・銭貨出土状況 (北から)
- 4 27次 SK-249鍋 (272)・遺物出土状況 (南から)
- 5 27次 SK-247遺物出土状況 (南から)
- 写真図版39-1 28次 全景 (南から) 2 28次 SB-183・184・187 (南から)
- 写真図版40-1 28次 SB-188・241 (南から) 2 28次 SD-1 (南から)
- 写真図版41-1 28次 SB-183・P-6 柱穴断面景 (西から)
- 2 28次 SD-1 遺物出土状況 (南から) 3 28次 SK-268遺物出土状況 (南から)
- 4 28次 SK-250遺物出土状況 (南から)
- 5 28次 SK-259遺物出土状況 (北から)
- 6 28次 SK-260遺物出土状況 (南から)
- 写真図版42 33次 全景 (南から)
- 写真図版43-1 33次 SK-177・178完掘 (西から)
- 2 33次 SD-2・SK-177遺物出土状況 (南から)
- 写真図版44-1 33次 SK-177遺物出土状況 (西から)
- 2 33次 SK-178遺物出土状況 (西から)
- 写真図版45-1 34次 全景 (南から)
- 2 34次 SB-168・169 (南から)
- 写真図版46-1 34次 SB-168・169完掘 (南から)
- 2 34次 SB-168・169完掘 (西から)
- 写真図版47-1 34次 SB-167完掘 (南から) 2 34次 SB-165・166 (南から)
- 写真図版48-1 34次 SB-168・P-25柱穴断面 (南から)
- 2 34次 SB-168・P-26柱穴断面 (北から)
- 3 34次 SB-168・P-30柱穴断面 (北から)
- 4 34次 SB-168・P-34柱穴断面 (北から)
- 5 34次 SB-168・P-36柱穴断面 (北から)
- 6 34次 SB-168・P-23柱穴断面 (東から)

- 写真図版49-1 34次 SK-272遺物出土状況 (南から)
2 34次 SK-272土層断面 (南から)
- 写真図版50-1 34次 SK-280遺物出土状況 (南から)
2 34次 SK-278遺物出土状況 (西から)
- 写真図版51-1 34次 SB-164・P-4柱穴断面 (北から)
2 34次 SB-166・P-9柱穴断面 (北から)
3 34次 SB-164・P-10柱穴断面 (東から)
4 34次 SB-166・P-3柱穴断面 (北から)
5 34次 SB-166・P-4柱穴断面 (東から)
6 34次 SB-166・P-10柱穴断面 (西から)
- 写真図版52-1 37次 全景 (北から) 2 37次 SD-10遺物出土状況 (西から)
3 37次 SA-2柱穴断面 (北から) 4 37次 SA-2柱穴断面 (北から)
- 写真図版53-1 39次 全景 (北から) 2 39次 全景 (南西から)
- 写真図版54-1 39次 SB-228~230 (東から) 2 39次 SB-227 (東から)
3 39次 SA-2 (西から)
- 写真図版55-1 39次 SK-300 遺物出土状況 (北から)
2 39次 SE-11 (南から)
3 39次 SK-295 遺物出土状況 (南から)
4 39次 SK-285 遺物出土状況 (南から)
5 39次 SB-229・P-6 (西から)
6 39次 SK-380 遺物出土状況 (東から)
- 写真図版56-1 40次 全景 (南から) 2 40次 東半 (北から)
- 写真図版57-1 40次 西半 (北から) 2 40次 SA-2・4 (西から)
- 写真図版58-1 40次 SB-177 (北から) 2 40次 SB-207 (西から)
- 写真図版59-1 40次 SK-305 遺物出土状況 (北から)
2 40次 SK-313 遺物出土状況 (北から)
- 写真図版60-1 41次 全景 (東から) 2 41次 SB-171・SD-16 (南から)
- 写真図版61-1 41次 SB-171西溝 (南から) 2 41次 SB-173 (南から)
- 写真図版62-1 41次 SK-333完掘 (南から) 2 41次 SB-174 (北から)
- 写真図版63-1 41次 SK-332完掘 (東から) 2 41次 SK-331完掘 (南から)
- 写真図版64-1 41次 市道2号窯 (西から) 2 41次 SI-2・P-1 (西から)
- 写真図版65-1 41次 SK-333遺物出土状況 (南から)
2 41次 SK-331下層遺物出土状況近景 (北から)

- 写真図版66-1 41次 SK-331遺物出土状況 (北から)
 2 41次 SK-332遺物出土状況 (西から)
 3 41次 SK-329遺物出土状況 (南から)
 4 41次 SK-328遺物出土状況 (南から)
- 写真図版67-1 41次 SB-171西溝 (南から) 2 41次 SB-171東溝 (南から)
 3 41次 SB-171南溝遺物出土状況 (西から)
 4 41次 SB-171南溝遺物出土状況 (東から)
- 写真図版68-1 42次 全景 (北西から) 2 42次 市道3号窯遠景 (西から)
- 写真図版69-1 42次 SA-1 (西から) 2 42次 南半全景 (西から)
- 写真図版70-1 42次 SB-156・157遠景 (西から) 2 42次 SA-1・2 (東から)
- 写真図版71-1 43次 I-48・49区 (南から) 2 43次 SB-212 (北から)
- 写真図版72-1 43次 J-45-49区 (南から) 2 43次 J-49区 (南から)
 3 43次 SB-216 (北から) 4 43次 SA-1南西隅 (北から)
 5 43次 SB-206 (南から)
- 写真図版73-1 44次 全景 (東から) 2 44次 全景 (西から)
- 写真図版74-1 44次 SA-1北西隅 (北から)
 2 44次 F-5・SD-1遺物出土状況 (北西から)
- 写真図版75-1 44次 SK-381土城墓 (南から)
 2 44次 SK-348土城墓・遺物出土状況 (東から)
- 写真図版76-1 45次 東半全景 (西から) 2 45次 西半全景 (南から)
- 写真図版77-1 45次 SB-179 (南から) 2 45次 SB-178 (南から)
- 写真図版78-1 45次 SI-1 (東から) 2 45次 SA-2・SD-6 (北西から)
 3 45次 SB-176・177
- 写真図版79-1 45次 SD-5断面 (南から) 2 45次 SD-12断面 (東から)
 3 45次 SK-323遺物出土状況 (西から)
 4 45次 SD-6遺物出土状況 (南から)
 5 45次 SD-12遺物出土状況 (東から)
- 写真図版80-1 46次 S・T-2区 (北から) 2 46次 R・S-49・50・1 (北から)
- 写真図版81-1 46次 SB-234~237・SA-1 (南西から)
 2 46次 SB-238・SA-1 (北から)
- 写真図版82-1 46次 SB-141遺物出土状況 (南から)
 2 46次 SB-141完掘 (南から)
- 写真図版83-1 46次 SB-141竈近景 (西から)

- 2 46次 SD-1 遺物出土状況 (南から)
3 46次 SA-1、SE-13 (北から) 4 46次 現地説明会風景

写真図版84	土器-1
写真図版85	土器-2
写真図版86	土器-3
写真図版87	土器-4
写真図版88	土器-5
写真図版89	土器-6
写真図版90	土器-7
写真図版91	土器-8
写真図版92	土器-9
写真図版93	土器-10
写真図版94	土器-11
写真図版95	土器-12
写真図版96	土器-13
写真図版97	土器-14
写真図版98	土器-15
写真図版99	土器-16
写真図版100	土器-17
写真図版101	土器-18
写真図版102	土器-19
写真図版103	土器-20
写真図版104	土器-21
写真図版105	土器-22
写真図版106	土器-23
写真図版107	土器-24
写真図版108	土器-25
写真図版109	土器-26
写真図版110	土器-27
写真図版111	土器-28
写真図版112	土器-29
写真図版113	土製品-1
写真図版114	土製品-2

写真図版115	瓦-1
写真図版116	瓦-2
写真図版117	瓦-3
写真図版118	瓦-4
写真図版119	瓦-5
写真図版120	瓦-6
写真図版121	瓦-7
写真図版122	瓦-8
写真図版123	瓦-9
写真図版124	瓦-10
写真図版125	瓦-11
写真図版126	瓦-12
写真図版127	瓦-13
写真図版128	瓦-14
写真図版129	瓦-15
写真図版130	瓦-16
写真図版131	瓦-17
写真図版132	瓦-18
写真図版133	瓦-19
写真図版134	瓦塔-1
写真図版135	瓦塔-2
写真図版136	瓦塔-3
写真図版137	金属器-1
写真図版138	金属器-2
写真図版139	石器
写真図版140	钱貨

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

豊橋市は中央構造線沿いに流れる豊川左岸の下流部に位置する。市の東部には赤石山脈の末端である弓張山地が連なっている。南部は渥美半島の基部に当たり、高師原台地等の河岸段丘が広がり、太平洋に面している。西部は豊川河口部で沖積地や干拓地が広がり、三河湾に面している。市域の大部分は豊川と旧天竜川の河岸段丘及び沖積平野などの平坦地である。市域の大半を占める河岸段丘は高位面である天伯原面、中位面である高師原～豊橋上位面、低位面である豊橋面の3面に分類されている(註1)。

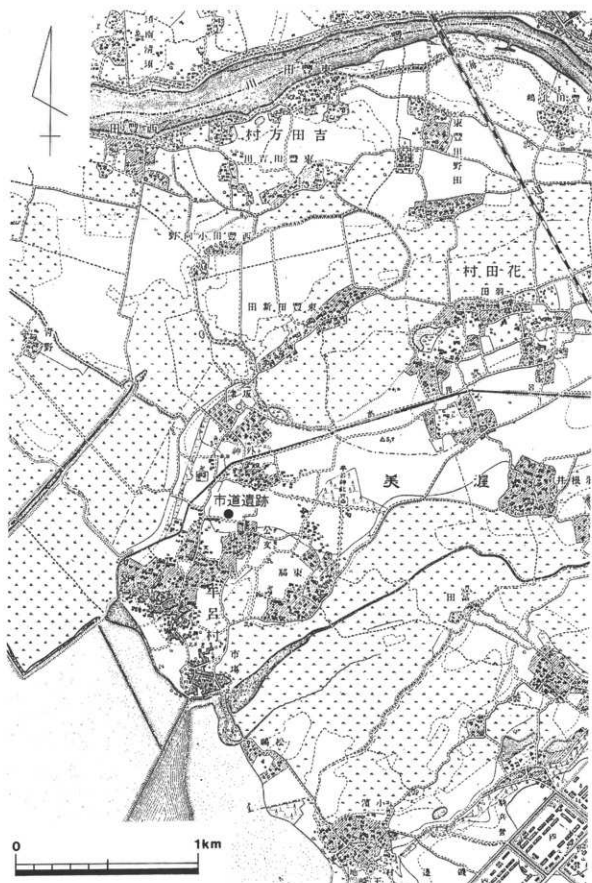
市道遺跡のある牟呂町は市域の西部にあり、三河湾に向かって延びる低位段丘の先端部に位置している。段丘の北側には豊川とその沖積面が広がり、南側には柳生川とその沖積面が広がっている。段丘は先端部分で南側に折れ、東側には浅い谷が入り、入り江状になっている(挿図1)。西の三河湾側は干拓地が広がっているが、干拓前には段丘崖の下にまで海がせまっていた。この段丘の直下や段丘斜面には縄文時代から続く貝塚が多く分布している。

段丘上はかなり平坦であり、現在ではほとんどが宅地となっているが、明治時代には、集落は段丘端部に集中しており、段丘内部には少なかった(挿図2)。段丘南部の入り江状になったところには、船が着いたとの伝承があり、古くからの港と考えられ、現在でも干拓によってかなりせまってはいるが先端部には市場港がある。入り江の反対側に当たる段丘北側の「坂津」にも、「志香須賀の渡し」と呼ばれ船が着いたとの伝承があり、豊川を渡河する重要な地点であったと考えられる。豊川の対岸約10kmには国府・国分寺等があり、古代以前から船運を中心とした海上交通の要衝であったと考えられる。

註1 水野季彦 「第1章-1. 豊橋市周辺の自然環境」『豊橋市埋蔵文化財調査報告第27集 外神遺跡』豊橋市教育委員会他 1995年



插图1 牟呂地区周辺地形復元图 (1/10,000)



挿圖2 牟呂地区周辺地形 (1/20,000明治23年測量)

2. 歴史的環境

市道遺跡のある牟呂町は縄文時代中期から遺跡が形成され、以後現在までほとんど途切れることなく継続している。市道遺跡では奈良・平安時代を中心とした古代寺院と官衙的建物群が確認されており、古代の渥美郡において重要な役割を負った遺跡であったと考えられる。以下では市道遺跡を中心として、各時代ごとに概説を行う（挿図3）。

縄文時代

牟呂町地内の縄文時代の遺跡は、晩期を中心とした貝塚群が段丘直下と縁辺部に集中して見られる。最も古いものは中期中葉～後期初頭の土器が出土している坂津寺貝塚（1）である。柳生川を挟んだ対岸には前期から晩期の土器を出土した小浜貝塚（41）がある。

晩期から弥生時代前期には、段丘直下に水神第1貝塚（4）、水神第2貝塚（5）、大西貝塚（16）、市杵嶋神社貝塚（23）等の貝塚が形成されている。現在ではほとんどその面影は見られないが、段丘直下の海岸線には「殻山」と呼ばれた大規模な貝塚が山脈のように見られ、大きなものは面積が一町五反（約15,000㎡）もの大きさがあったとされている（註1）。これらの殻山から出土したものは石器、土器、獣骨等で弥生式土器がほとんどであったとされているが、発掘調査が行われた水神第1貝塚では、最下層に縄文晩期前半の土器が見られ、この時期に貝塚が形成され始めたことを示している。

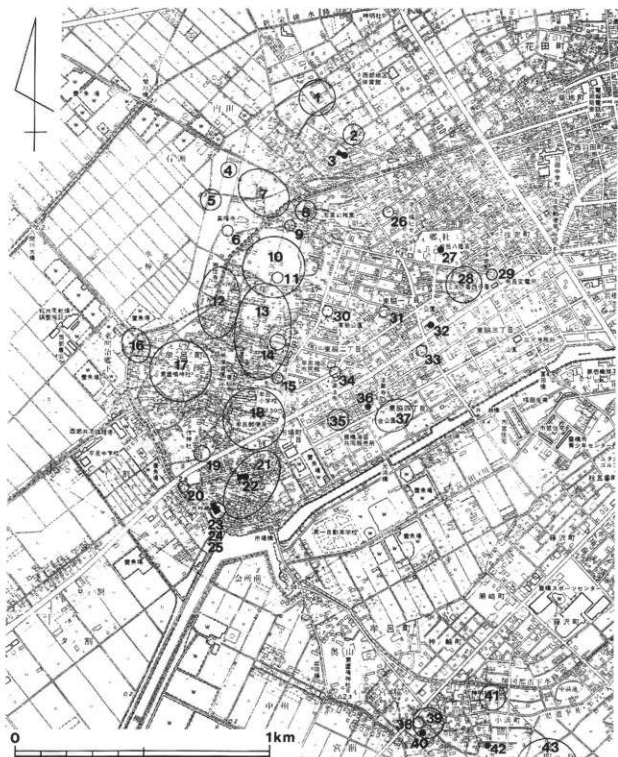
弥生時代

弥生時代の遺跡は縄文時代の突帯紋土器の系譜を引く条痕紋土器が水神第1・第2貝塚、大西貝塚、市杵嶋神社貝塚等で出土しているが、住居跡等の遺構は未だ確認されていない。水神第1・第2貝塚、大西貝塚では弥生前期の条痕紋土器が、市杵嶋神社貝塚では弥生中期初頭の条痕紋土器が出土しており、大西貝塚では少量の遠賀川式土器も出土している。

弥生中期後葉では牟呂町より約1kmほど柳生川右岸の上流寄りに見丁塚遺跡（28）があり、方形周溝墓が確認されている。また、左岸には中期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡、方形周溝墓が確認され、多くの遺物が出土し、当地域の中心的集落と考えられる橋良遺跡（註2）がある。牟呂町内においては、貝塚に伴って土器が少量出土しているが、内陸部では弥生時代の遺構は確認されておらず、集落が形成されていなかったと考えられる。

古墳時代

古墳時代では前期の前方後方墳である市杵嶋神社古墳（24）、後期初頭の前方後円墳である三ツ山古墳（3）、後期後半の前方後円墳である牟呂王塚古墳（22）等がある。この他には生産址として三ツ山古墳に埴輪を供給したと考えられる6世紀初頭（TK-47型式）の須恵器・埴輪併焼窯である水神古窯（6）がある。柳生川左岸には墳形は不明であるが、幅2.16m、全長10m以上の大型の横穴式石室を持ち、頭椎・環頭・円頭の各飾大刀やトンボ玉等の豊富な種類の玉類を出土した磯辺王塚古墳（40）がある。これ以外には、牟呂八幡神社古墳（27）、東脇古墳（32）があり、かつては三ツ山古



- | | | | | | |
|------------|----------|------------|-------------|-----------|----------|
| 1 板津寺貝塚 | 9 市道北遺跡 | 17 大西遺跡 | 25 市杵嶋神社古墓 | 33 高良社遺跡 | 41 小浜貝塚 |
| 2 堺松遺跡 | 10 市道遺跡 | 18 中村遺跡 | 26 八王子神社遺跡 | 34 薬法寺北遺跡 | 42 万福寺古墳 |
| 3 三ツ山古墳 | 11 市道1号窯 | 19 作神遺跡 | 27 牟呂八幡神社古墳 | 35 行合遺跡 | 43 王ヶ崎遺跡 |
| 4 水神貝塚(第1) | 12 大海津遺跡 | 20 さんまい貝塚 | 28 見丁塚遺跡 | 36 権現神社古墳 | |
| 5 水神貝塚(第2) | 13 公文遺跡 | 21 市場遺跡 | 29 王塚貝塚 | 37 東脇遺跡 | |
| 6 水神古窯 | 14 牟呂城址 | 22 牟呂王塚古墳 | 30 市道西遺跡 | 38 王ヶ崎貝塚 | |
| 7 若宮遺跡 | 15 公文南遺跡 | 23 市杵嶋神社貝塚 | 31 林遺跡 | 39 王塚遺跡 | |
| 8 外神遺跡 | 16 大西貝塚 | 24 市杵嶋神社古墳 | 32 東脇古墳 | 40 磯辺王塚古墳 | |

挿図3 牟呂地区周辺遺跡分布図(1/15,000)

墳の周辺にも古墳と考えられる高まりがいくつか存在していたようで、小規模な円墳が散在的に見られたようである。しかし、豊橋市東部の山脈裾部のように数十基単位の群集墳が連なるような状況とは異なっていたようである。

集落では6世紀後半から7世紀前半にかけて竪穴住居跡、掘立柱建物等が確認されている大西遺跡(17)、古墳時代後期、奈良～平安時代を中心とした大海津遺跡(12)、見丁塚遺跡(28)等がある。古墳時代前期の集落は未発見であるが、大西貝塚(16)では4～5世紀頃の土師器が出土しており、近接した地域に当時期の集落が確認される可能性は高い。古墳時代の集落は段丘の縁辺部に見られ、これ以後の集落とは立地が異なるようである。

古代

古代では市道遺跡(10)が最も規模が大きく、遺構も集中し、遺物も多量に出土している。市道遺跡は南側の方一町(99m四方)の区画とこの北東側に隣接する掘立柱建物群とで構成され、南側区画は主軸がわずかにずれた方一町の外側区画から54m×78mの内側区画に造り替えられていることが推定されている。

外側区画では北・東・南辺の掘立柱の塀は確認されているが、西辺の塀はまだ確認されていない。内側区画は区画中央には礎石建物の金堂、4間×7間の四面庇の掘立柱建物の講堂、7棟の掘立柱建物の僧房群が確認された。金堂から南東約20mの塀の南東隅にはロストル式平窯の市道1号窯が確認され、南辺には門も確認されており、建物や塀、溝等の切り合い関係からは2～3回程度の建て替えが推定されている。また、金堂と講堂の位置には幅約2mで14m×8m程の長方形の溝が掘られ、13世紀頃の中世陶器が出土しており、小規模な建物が再建された可能性が考えられる。

北側の掘立柱建物群では約120棟の建物が確認されている。掘立柱建物は北辺と西辺に3間×3間の総柱建物が軒を揃えるようにして並び、この南と東側に間仕切りのある建物や側柱建物が集中している。また、北辺の総柱建物群の中央北側と北西隅では、中心主柱穴を持ったA型と持たないB型の正六角形の掘立柱建物が合計5棟確認されている。正六角形掘立柱建物は中央北側と北西隅の2棟が同時存在し、A型からB型へ建て替えられている可能性が高く、掘立柱建物の配置の上で重要な位置を占めていると考えられる。これら各種の掘立柱建物群はその数量や規格からすべてが南側の寺に付随するものではなく、倉庫を中心とした何らかの官衛的性格を持った遺構である可能性が考えられる。出土遺物から推定される遺構の時期は一部に断続は見られるが、およそ7世紀末～13世紀で、8世紀後半から10世紀頃を中心としている。

市道遺跡や近接した公文・大西遺跡等では奈良時代の竪穴住居跡が散発的に発見され、平安時代の灰釉陶器を出土する遺構等が確認されているが、集落の全体像は良くわからず、当時の集落景観を復元するまでには至っていない。

中世～近世

平安末から鎌倉時代になると牟呂地区の各地で遺跡数が増える。市道遺跡では、南側区画内の金堂と講堂のあったところに小規模な礎石建物が再建されたと考えられ、周辺部には掘立柱建物や井戸等

が確認されている。公文遺跡（13）は一辺が70m以上で、幅約4m、深さ約2mの断面V字状の溝が確認され、12～13世紀頃の豪族居館と考えられる。溝からは中世陶器と共に馬骨を中心とした獣骨が多く出土している。若宮遺跡（7）では掘立柱建物、井戸、地下式土壇墓等が確認されている。

公文遺跡の東側には牟呂城址がある。牟呂城址は鶴殿兵庫の城跡と言いつえられている。発掘調査により、方形にめぐる土塁や幅約3.8m、深さ約1.3mの堀、井戸等が確認され、16世紀を中心とした城跡であったと考えられる。

古墳時代前期に前方後方墳である市杵嶋神社古墳が築造されて以後、後期の三ツ山古墳、牟呂王塚古墳、磯辺王塚古墳等の首長墳が築造されているところから、牟呂地区は古墳時代を通して豊川河口部にける在地勢力の重要な拠点であったことが確認できる。集落跡は6世紀後半から7世紀前半頃を中心とした大西遺跡や大海津遺跡等で確認されているが、市道遺跡ではこの時期の遺物は出土しておらず、7世紀末から8世紀初頭頃にこれまでの居住域とは離れたところに新たに造られた遺跡であると考えられる。

市道遺跡は8世紀後半から10世紀頃を中心として存続するが、若干の断続を挟んで13世紀頃まで存続する。市道遺跡以後は南に隣接して、豪族居館と考えられる公文遺跡が12世紀頃から14世紀頃、更にその南の牟呂城址が16世紀頃を中心とした遺跡である。これらの遺跡はその性格から一般集落ではなく、古代の官衙的遺跡である市道遺跡に見られるように、当地が古墳時代から近世に至るまで豊川河口部の中心的地域であったことを示している。

註1 白井梅里「古代概観その一」『牟呂吉田村誌』1933年

註2 豊橋市教育委員会「豊橋市埋蔵文化財調査報告第18集 橋良遺跡」1994年

第2章 調査の経過

1. 調査の経過

市道遺跡では豊橋平呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として、昭和59年度から平成9年度までで47回の発掘調査が行われた(挿図4)。市道遺跡の範囲は昭和59年度に行った広範囲に渡る道路築造部分の発掘調査(1～3次調査)によって、ある程度の推定ができたので、これ以後は宅地造成部分を中心に調査が進行した。

発掘調査は宅地部分を中心となったため、発掘の面積や期間についてはかなり分割されることになった。各調査の担当、面積、期間等は一覧表に示した(挿表1)。

市道地区は住宅が密集している平呂の中でも比較的畑が多く、近年になって宅地化が進んだ地区である。このため、発掘調査時点では畑であった所については発掘調査が行えたが、区画整理事業開始以前に建築された住宅部分については発掘調査が行えなかった。

築造される道路面の高さは現地表面とほとんど同じであり、住宅建設に当たっては削平されることなく、多くの場合土盛りされた上に建設されている。建設される建物は木造2階建ての建物が多く、基礎が遺構検出面まで達することはない。

市道遺跡はこれまでの発掘調査によって、古代寺院である南側区画とこの北東側にある北側掘立柱建物群の2つの遺構群に大別できることが確認されている。発掘調査は北側掘立柱建物群の方が進展が早かったので、第1分冊(「市道(I)」)は正倉・居館編として北側掘立柱建物群について報告を行った。今回は寺院編として南側区画を報告する。

2. 調査の方法

調査に当たり、区画整理事業地内を字名により10地区に分割した(挿図5)。これらの地区はアルファベットの頭文字3字で略記することにし、市道地区は「ICM」と表記した。また、市道遺跡は市道地区の大半と公文地区の一部に位置しているため、公文地区「KMN」に含まれるもの(第39・40次)や既報告の公文遺跡(註1)に遺構の一部が含まれている場合がある。このため、市道地区と公文地区の一部で調査区が混在するところがあった。

市道地区における調査区設定は、道路築造のために設置された杭を基準に、道路方向に沿って設定した。区画整理事業に伴って設置された工事用の杭は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠している(挿図6)。道路築造のための杭を基準にしたのは第1次調査が道路築造部分に当たり、調査区の設定と杭打ちを迅速に行うためである。具体的にはO-4区の中心が調査を始める地点で十字路になっていたため、この中心杭を基準にし、ここから北に延びる道路のセンター杭を方向の基準にした。地区名については東西方向はアルファベット、南北は数字によって示すことにし、それぞれ西から東、南から北に向かって設定した(挿図7)。

各地区の発掘調査は基本的に同様の方法で進めた。発掘調査はまず重機により表土除去を行い、遺

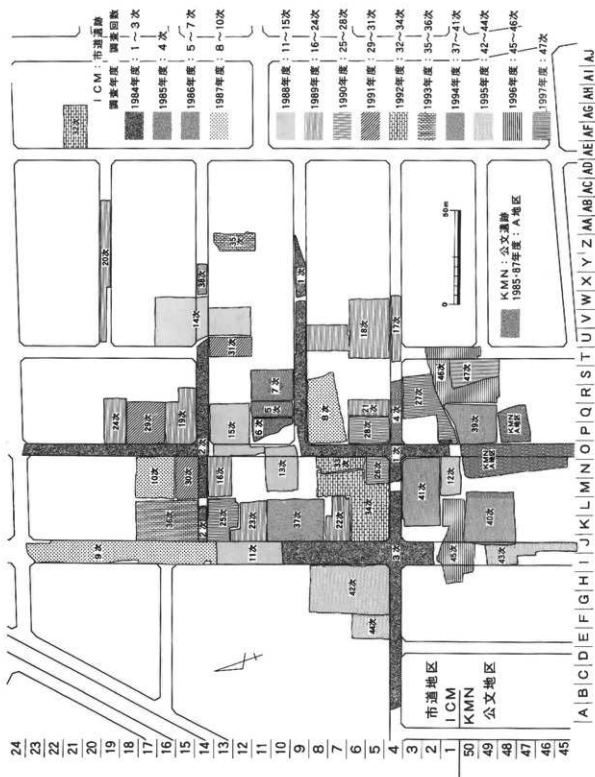
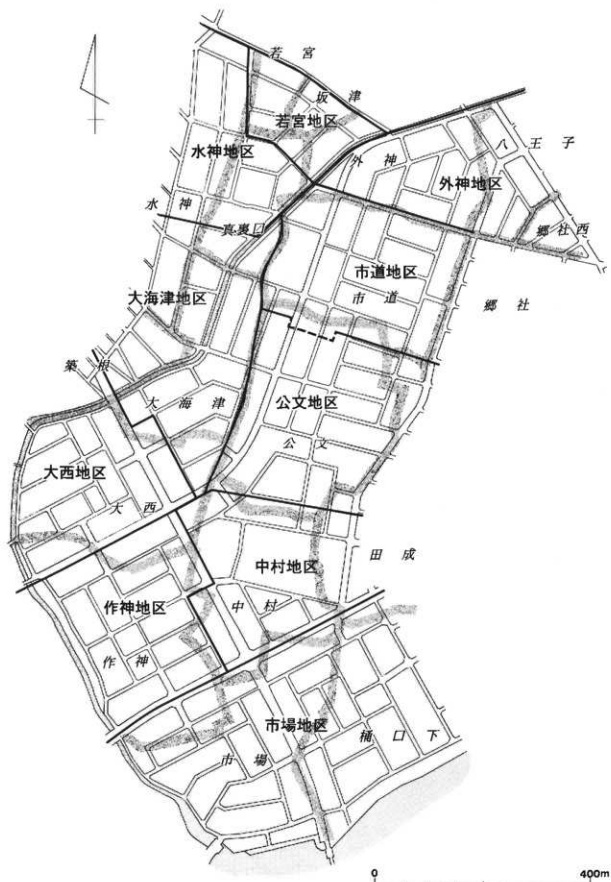


插图 4 市道地区調査区配置図 (1/2,000)

挿表1 市道遺跡発掘調査地区一覧表

調査次	年度	面積(m ²)	調査担当者	調査期間
1次	昭和59年	1,227	費元洋	1984.7.23~1985.3.7
2次	昭和59年	1,166	費元洋	1984.9.5~1985.2.20
3次	昭和59年	1,746	費元洋	1984.9.20~1985.2.20
4次	昭和60年	195	費元洋	1985.6.26~7.14
5次	昭和61年	210	費元洋	1986.12.13~1987.1.19
6次	昭和61年	240	費元洋	1987.1.6~3.25
7次	昭和61年	450	費元洋	1987.1.20~3.25
8次	昭和62年	600	費元洋	1987.10.12~11.26
9次	昭和62年	1,000	岩瀬彰利	1987.10.26~1988.3.28
10次	昭和62年	360	岩瀬彰利	1987.10.26~1988.3.28
11次	昭和63年	400	岩瀬彰利	1988.6.13~6.29
12次	昭和63年	240	小林久彦	1988.6.29~8.10
13次	昭和63年	420	小林久彦	1988.10.20~11.21
14次	昭和63年	1,060	費元洋	1988.11.21~12.19
15次	昭和63年	700	小林久彦	1989.1.11~3.8
16次	平成元年	280	小林久彦	1989.5.8~5.29
17次	平成元年	180	費元洋	1989.6.1~6.16
18次	平成元年	820	費元洋	1989.6.15~8.17
19次	平成元年	420	費元洋	1989.8.17~10.24
20次	平成元年	330	岩瀬彰利	1989.8.21~9.11
21次	平成元年	200	岩瀬彰利	1989.10.26~11.10
22次	平成元年	250	費元洋	1989.11.2~12.12
23次	平成元年	335	費元洋	1990.1.8~2.26
24次	平成元年	290	岩瀬彰利	1990.2.5~2.15
25次	平成2年	345	費元洋	1990.7.20~9.3

調査次	年度	面積(m ²)	調査担当者	調査期間
26次	平成2年	185	岩瀬彰利	1990.9.21~10.17
27次	平成2年	600	費元洋	1990.10.20~12.7
28次	平成2年	250	岩瀬彰利	1991.1.7~2.5
29次	平成3年	475	小林・赤木剛	1991.5.1~5.24
30次	平成3年	280	岩瀬彰利	1991.9.11~11.10
31次	平成3年	250	岩瀬彰利	1991.11.19~12.5
32次	平成4年	300	岩瀬彰利	1992.5.11~5.22
33次	平成4年	220	費元洋	1992.7.31~8.25
34次	平成4年	940	費元洋	1992.12.22~1993.3.18
35次	平成5年	700	小林久彦	1993.7.9~7.22
36次	平成5年	230	岩瀬彰利	1993.10.25~11.29
37次	平成6年	800	岩瀬彰利	1994.5.9~6.29
38次	平成6年	90	小林久彦	1994.6.15~6.20
39次	平成6年	450	小林久彦	1994.7.6~9.26
40次	平成6年	700	岩瀬彰利	1994.7.6~9.26
41次	平成6年	700	岩瀬彰利	1994.7.6~9.26
42次	平成7年	1,100	小林久彦	1995.5.9~6.22
43次	平成7年	500	岩瀬彰利	1995.11.21~12.26
44次	平成7年	250	岩原剛	1996.1.25~2.17
45次	平成8年	600	小林久彦	1996.4.8~6.6
46次	平成8年	550	岩瀬彰利	1996.9.30~11.22
47次	平成9年	210	小林久彦	1997.5.26~7.4
合計		23,844		



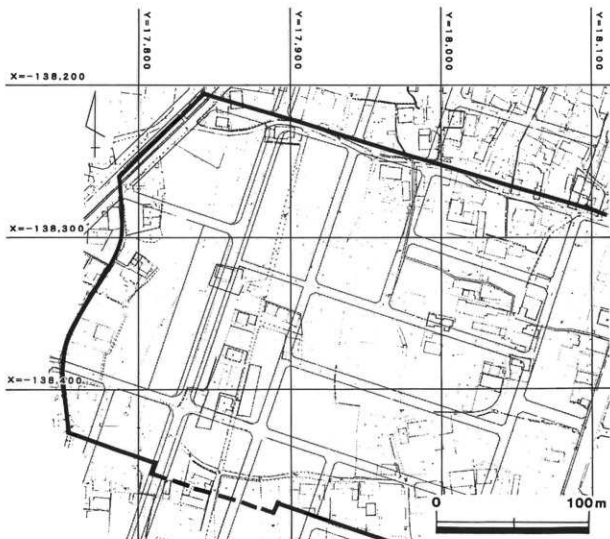
挿図5 羊吕地区割図 (1/7,000)

構検出、遺構精査、遺物・遺構細部写真撮影、遺構実測、全体写真、断ち割り、遺構図補足、埋め戻しの順に行った。

市道地区は表土層が薄く、最も浅い所で15cm程の耕作土を除去すると遺構検出面である地山面に達した。当地区は段丘の中央部分であり、土が堆積しないところであったので基本的に遺物包含層は見られなかった。

市道遺跡の基本土層は耕作土である表土層と遺構検出面である地山層の2層しかない。地山層は豊川と旧天竜川の堆積物であり、シルトと砂礫層の互層である。

註1 豊橋市教育委員会「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第8集 公文遺跡(Ⅰ)」1988年



挿図6 市道地区位置図 (1/25,000)



挿図7 市道地区調査区位置図 (1/2,500)

第3章 遺 構

市道遺跡の発掘調査は区画整理事業に伴って昭和59年より継続的に行われ、これまでの調査でようやく全体像を推定できるようになった。遺跡は南側にある約99m四方の堀に囲まれた区画（南側区画）とこの北東側に近接して集中する掘立柱建物群（北側掘立柱建物群）とに二分される。

北側掘立柱建物群は8世紀から14世紀頃の掘立柱建物、竪穴住居、廃棄土壌等で構成されているが、8世紀後半から9世紀前半と、12世紀から14世紀に遺構が集中している。

南側区画は約99m四方の外側区画から、54m×78mの内側区画に造り替えられている。区画内からは、34次調査では4間×7間の掘立柱建物の講堂や僧房群、41次調査では礎石建物の金堂が確認され、この区画が寺であることが確認された。

今回の報告はこの寺院址に関するものであり、北側掘立柱建物群については第1分冊の正倉・居館編（『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集 市道遺跡（I）』1996年）として既に刊行している。発掘区では、ICMの9区ラインより南側のA-4区からW-6区までである（挿図4・7）。

各遺構の所屬時期については第1分冊では9期に分類した。今回は基本的には同様であるが、新たに10・11期を増やし、11期区分とした。各時期の設定方法については第5章で説明している。

遺構については時期別ではなく、掘立柱建物、礎石建物、竪穴住居、堀、門、轆轤支柱、土塼、土塼墓、井戸、不明遺構、溝の11種類に大別して説明する。

1. 掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は103棟（SB-142-170・172-241）が確認されている。8世紀から18世紀頃の各時期（今回の報告では出土遺物等から1-11期に分類している。）のものを含んでおり、奈良・平安時代の建物は掘方の直径が大きい傾向がある。各建物の所屬時期は1期から11期までであり、中心となるのは4・5期であるが、時期毎ではなく掘立柱建物の種類別に説明する。各建物の個別計測値等の詳細は第1表にある。

南側区画で確認されている掘立柱建物は総柱建物、間仕切り建物、庇付建物、側柱建物の4種類が確認されている。

各種の建物の時期別棟数は時期・種類ごとにかなり偏りが見られる。全体の建物総数の傾向としては3-5期と7-9期にピークが見られる。前半の古代は特に9世紀後半から10世紀頃の4・5期に集中し、後半の中世は13世紀後半から14世紀初頭の8・9期に集中している（挿図17-27、第5章参照）。

古代の建物は内側区画内部に配置された金堂、講堂、僧房等の伽藍を構成する建物と、内側区画の外で東側と南西側に近接する建物群とで構成されている。

建物の種類別では側柱建物がほとんどであり、庇付建物は講堂、総柱建物は4期に集中している。

A. 総柱建物

総柱建物は7棟が確認されている。規模が確認できる建物では4間×2間が1棟、3間×3間が1棟、3間×2間が4棟、規模不明が1棟あり、時期は4期に集中している。各建物の詳細は一覧表(表1)に掲載している。

SB-173 SB-173(第35図)は1間以上×2間以上の総柱建物である。P1~P5まで確認されているが、いずれの柱穴も円形で直径が1mほどあり、他の掘立柱建物と比較してかなり大きなものである。柱穴の直径では掘方の形は違うが講堂(SB-168)や幢竿支柱(SI-2)とほぼ同じである。SB-173は金堂の北西に近接しており、他の総柱建物とは異なり、通常の倉庫ではなく、特殊な用途の建物と考えられる。

SB-178 SB-178(第37図)は3間×3間の総柱建物である。SA-2の南西隅にあり、SA-2に平行し、同じ総柱建物であるSB-179南側の軒が揃っている。P1~P11まで確認されているが、後世の溝に破壊されて柱穴が一つ確認できていない。

SB-179 SB-179(第37図)は3間×3間の総柱建物である。SB-178とは桁行はほぼ同じであるが、梁間が30cmほど小さくなっている。柱穴はP1~P12まですべて確認されており、柱痕跡も明瞭に残っている。

SB-202 SB-202(第43図)は3間×2間の総柱建物である。柱穴はやや不揃いであるが、P1~P13までが確認されている。SB-202の南半には一辺が約3.5mで隅丸方形の土壇であるP-14がある。P-14はSB-202に伴うものと考えられ、同様な構造を持った建物(SB-195・240)が確認されている。

SB-207 SB-207(第46図)は3間×3間の総柱建物である。規模等はSB-178・179とほぼ同じであり、この2棟の南側10m程のところにある。SB-178・179とは主軸方向が異なっており、位置もずれている。SB-207の西約5mにあるSB-206は総柱建物である可能性もあり、SB-178・179からSB-206・207へと建て替えられた可能性もある。

SB-188 SB-188(第39図)は4間×2間の総柱建物である。現状ではP1~P12まで12個の柱穴が確認されているが調査区の間にかかり、一部確認できていない柱穴がある。柱穴の直径は小さく、並びも不揃いで、特に中心のP-10-12はわずかに斜めになっている。柱穴の規模や並びは、4期までの古代の一般的に見られる掘立柱建物より、7期以降の中世に見られる掘立柱建物に近い。

SB-195 SB-195(第41図)は3間×2間の総柱建物である。柱穴は一部調査区外になりはっ

きりしないものもあるが、P1～P10まで確認されている。SB-195の南半には一辺約4mで隅丸方形のSK-249がある。SK-249はSB-195に伴うものと考えられ、同様な構造を持った側柱建物(SB-202・240)が確認されている。また、SB-195に重なるように、側柱建物SB-193・194があり、これらの建物にもSK-249が付随するものと考えられる。

B. 間仕切り建物

間仕切りのある建物は2棟(SB-172・240)が確認されている。

SB-172 SB-172(第35図)は4間×2間で、時期は6期である。柱穴は細く、一部確認できないところもあるが、現状で10個が確認されている。東西棟で、講堂の前面やや東よりにある。間仕切りは東側に見られる。また、金堂前面には同じような位置で、東西に長いという類似した構造と法量の側柱建物SB-175が見られる。この両者は講堂と金堂の前面の同じような位置にあり、それぞれ講堂と金堂に関係する建物と考えられる。

SB-240 SB-240(第52図)は3間×2間で、時期は9期である。柱穴は細く、一部確認できないところもあるが、現状で11個が確認されている。南北棟で、北寄りに間仕切りのためのP11があり、南半には一辺約3mでほぼ正方形のP12がある。P12はSB-240に伴うものと考えられる。

C. 庇付建物

庇付建物は5棟が確認されている。7間×4間が3棟、5間×3間が1棟、3間×3間が1棟、時期は3～5期に集中している。庇付建物は講堂が4棟であり、伽藍の中心建物に集中している。各建物の詳細は一覧表(第1表)にある。

SB-167 SB-167(第28図)は7間×4間の四面庇の掘立柱建物である。他の講堂と比較して、桁行が短いのが特徴である。SB-167は現在使われている道路が中央を通り、4回(1・3・26・34次)に分けて調査されている。このため一部で確認できなかった柱穴があり、現状ではP-1～28の柱穴が確認されている。

SB-168 SB-168(第29・31図)は7間×4間の四面庇の掘立柱建物である。講堂としては最も規模が大きい。SB-168の柱穴はP1～36まですべてが確認されている。庇部分の柱穴(P1～22)は四角いものも見られるが、やや小さく円形に近いものが多いのに対し、中央の柱穴(P23～36)は方形で一辺1.3m程あり、最も大きい。柱穴断面の観察では、柱痕跡は確認できなかったが、SB-169に切られていることが確認できた。

SB-169 SB-169(第30・31図)は7間×4間の四面庇の掘立柱建物である。SB-168の上

に規模をやや縮小して建て替えられている。SB-169の柱穴はP1~36まですべてが確認され、SB-168と切り合っている。柱穴はほぼ円形で径は1m~0.7mであり、SB-168よりは一回り小さい。柱穴断面の観察では、柱痕跡は確認できなかったが、SB-168を切っていることが確認できた。市道遺跡の古代の掘立柱建物は、柱痕跡が残っている場合が多く、これだけの規模の柱穴に柱痕跡が確認できないのは、柱が引き抜かれ再利用された可能性を示すものかも知れない。

SB-170 SB-170(第32図)は5間×3間の南面庇の掘立柱建物である。SB-168の上に規模をかなり縮小し、構造を簡略化して建て替えられている。SB-170の柱穴はP1~206まですべてが確認され、SB-168と一部で切り合っている。柱穴はほぼ円形で径は0.5m~0.7mであり、他の講堂よりはかなり小さくなっている。位置的にはSB-169の建て替えと考えられ、講堂として差し支えない。

D. 側柱建物

側柱建物は85棟が確認されている。規模が確認できる建物では6間×3間が最も大きく、1間×1間がもっとも小さい。側柱建物はすべての時期にあり、掘立柱建物の基本形態である。規模のばらつきは大きい、3間×1間のものが全体の3分の1を占め、7~9期に集中している。

3間×1間で梁間の間隔が長い建物は、柱穴の直径は小さいが、深い傾向にあり、中世に特徴的に見られる建物である。

これ以外の側柱建物では、古代の建物が掘方が大きく、柱の位置関係が整然としており、柱痕跡が確認できるものが多い傾向にある。

この他には構造上特に説明を要するものはないが、一部に塀を伴うものがあり、以下ではこの建物について説明する。各建物の詳細は一覧表(第1表)による。

SB-199 SB-199(第17・42図)は2間×3間以上の側柱建物で、北側約4m離れたところにSA-5がある。SA-5はSB-199と主軸方向が一致するところから、SB-199に伴う塀と考えられる。SB-199は構造上特に特徴はない。

SB-219 SB-219(第11・47図)は1間×5間の側柱建物で、南側約1.5m離れたところにSA-6がある。SA-6はSB-219と主軸方向が一致し、南側の軒と同じ位置で平行するようになるところから、SB-219に伴う塀と考えられる。SB-219は、梁間が1間で350cmあり、かなり長いところに特徴がある。

E. 堅穴状遺構を伴う建物

掘立柱建物の中には、建物内部に大型の土壌を伴うものが確認されている。このような形態の建物は市道遺跡周辺の若宮遺跡等でも確認されており、共通した構造の建物が見られる。堅穴状遺構を伴う

掘立柱建物は、総柱建物（SB-195・202）2棟、側柱建物（SB-193・194・232・233）4棟、間仕切のある（SB-240）1棟の計7棟が確認されている。これらの建物に伴う穴はほぼ正方形のもの（SB-240）や不整形で建物外にやや広がるもの（SB-233等）が見られるが、いずれも建物面積の半分ほどを土壌が占めている。

2. 礎石建物（SB）

SB-171 SB-171（第33・34図）は、現状ではおよそ8間×8間の小さな柱穴（P1-27）がほぼ四角く確認されているだけである。これらの柱穴は金堂建立時の足場穴と考えられる。金堂は最終的に十字に断ち割りを入れたが、掘り込み地業等は見られなかった。南辺と西辺の柱穴外側には幅約1m、長さ約10mの浅く細長い土壌（P28-31）が見られ、遺物がわずかに出土している。中世以降の遺物は含まれておらず、金堂に伴う溝と考えて差し支えない。この溝は浅く途切れ、全体に回っていないが、幅が広いところから雨落ちの溝とするよりも、基壇外表構築に伴う溝の可能性が高いと考えられる。

金堂は礎石等の明確な構造は残っていないが、建立時の足場穴と基壇外表の痕跡が確認できるところから、礎石建物であった考えられる。また、四方に巡らないが、所々でいくつかの柱穴が直線的に並ぶところがある。これらも金堂建て替え時の足場穴であり、複数回の建て替えを示す可能性も十分に考えられる。

3. 竪穴住居（SB）

竪穴住居はSB-138-141（第18・19図）の4棟が確認されている。平面形が方形の竪穴状遺構を竪穴住居とした。浅い壁溝は巡っているが、いずれもはっきりとした柱穴が確認できず、竈や炉跡もはっきりと確認できないものがある。恒常的な住居というより、作業場の仮設建物である可能性が高いと考えられる。

SB-138 SB-138（第18図）は1次調査O-8区の西側にあり、東側と北側が溝により切られている。北側の溝は幅約50cmで西方向に向かい、33次調査区まで延びている。壁溝ははっきりしない。支柱穴ははっきりしないが、掘方の深さは確認できるところでは約25cmである。法量は299cm×300cm以上であり、方形あるいは長方形になると考えられる。SB-138は5期と考えられる。

SB-139 SB-139（第18図）は南北450cm、東西337cmのほぼ長方形で三辺に壁溝が巡っている。掘方の深さは約10cmで浅い。柱穴は無く、東辺の南よりに竈がある。中央には大きな攪乱があるが、一部に焼土が残存している。

SB-140 SB-140（第19図）は南北330cm以上、東西337cmのほぼ方形で三辺に壁溝が巡っている。掘方の深さはほとんどなく、かろうじて壁溝で平面形が確認できるのみである。柱穴ははっきり

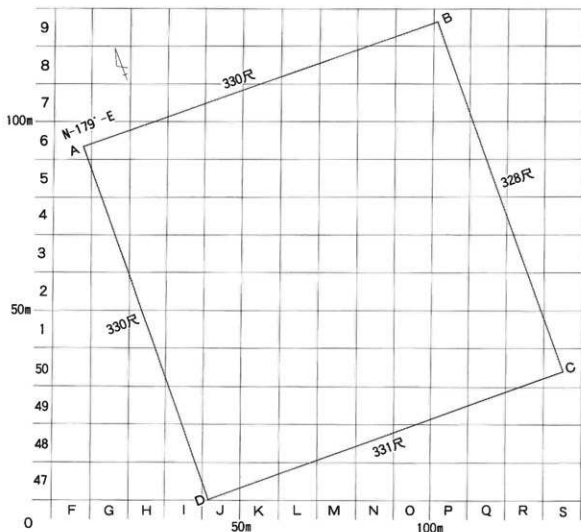
せず、竈も確認できなかったが、南西隅には焼土が見られた。

SB-141 SB-141 (第19図) は南北250cm以上、東西337cmのはほぼ方形で二辺で壁溝が確認できた。掘方の深さは約10cmで浅い。柱穴ははっきりせず、南東隅で竈が確認できたが、焼土は確認できなかった。

SB-139-141は2期に所属すると考えられるものであり、ほぼ同じ構造と規模である。これらの特徴づけるのは隅に寄って造られた竈であり、何らかの工房であった可能性が高いと考えられる。

4. 塀 (SA)

塀はSA-1～6の6ヶ所で確認されている。



挿図8 SA-1位置図 (1/1,000)

SA-1 SA-1は南側区画の内、約99m四方の外側の区画である。区画の四隅が確認されており、各隅間の長さが正確に把握されている。

そこで、F-47区の南西隅を基点(挿図8)として、四隅(A~D)の位置と長さを計算し、使用された尺を復元すると以下ようになる。各隅は柱痕跡が確認できるものについてはこの中心、確認できないものについては掘方の中心を基点としている。主軸方向はA→DでN-179°-Eである。

A (7.72m, 93.37m) ・ A→B間の長さ=99.1061m・330尺(1尺=0.3003m)

B (101.16m, 126.40m) ・ B→C間の長さ=98.4531m・328尺(1尺=0.3002m)

C (135.04m, 33.96m) ・ C→D間の長さ=99.3366m・331尺(1尺=0.3001m)

D (41.58m, 0.30m) ・ D→A間の長さ=99.0380m・330尺(1尺=0.3001m)

復元できた尺の各辺での誤差は最大でも0.2mmであり、いずれもほぼ同じ30cmと考えて差し支えない。また、A→B・D→A間が330尺であるのに対し、B→C間が328尺、C→D間が331尺であるのは、Aを基点としてB・Dを測量して定めた後にCを定めたためのずれである可能性も考えられる。

SA-2 SA-2は南側区画の内、約78m×約52mの内側の区画である。区画の隅はすでに攪乱等で壊されたりして確認できないものがある。

そこで、I-49区の南西隅を基点として(挿図9)、各隅(A~F)の位置と長さを計算し、使用

された尺を復元すると以下ようになる。各隅は柱痕跡が確認できるものについてはこの中心、確認できないものについては掘方の中心を基点とし、攪乱等で柱穴掘方が確認できないものについては、各辺の交点を基点としている。主軸方向はA→DでN-2°-Eである。

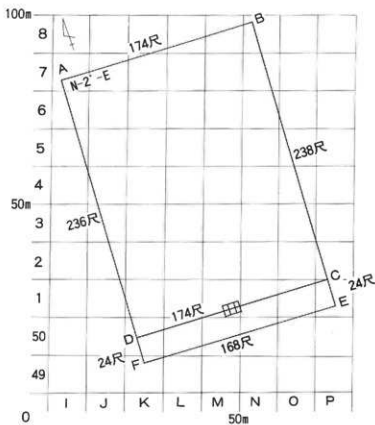
A (2.51m, 82.90m) ・ A→B間の長さ=52.3145m・174尺(1尺=0.3007m)

B (52.46m, 98.45m) ・ B→C間の長さ=71.3523m・238尺(1尺=0.2998m)

C (72.94m, 30.10m) ・ C→D間の長さ=52.3597m・174尺(1尺=0.3009m)

D (22.82m, 14.95m) ・ D→A間の長さ=70.9204m・236尺(1尺=0.3005m)

E (73.18m, 22.87m) ・ E→F間の長さ=50.4139m・168尺(1尺=0.3001m)



挿図9 SA-2位置図(1/1,000)

- F (25.04m、7.90m) ・ C→E間の長さ= 7.2340m ・ 24尺 (1尺=0.3014m)
- ・ D→F間の長さ= 7.3913m ・ 24尺 (1尺=0.3080m)
- ・ B→E間の長さ=78.3687m ・ 261尺 (1尺=0.3003m)
- ・ A→F間の長さ=78.3109m ・ 261尺 (1尺=0.3000m)

各計算値のうち、B→C間+C→E間の値がB→E間の値よりわずかに大きくなっているのは、現地調査時に確認されていたようにB→C間の主軸方向よりC→E間主軸方向がわずかに西にずれているためと考えられる。また、A・D・F間の関係も同じと考えられる。

SA-3 SA-3 (第54図) は内側区画の南東にあり、長さ10mで6間である。方位はN-2°-Eで、SB-159の西辺の軒と方向が一致しており、同時期のものと考えられる。SA-3・P-7からは中世陶器 (第58図101) が出土しているが、遺構検出時にP-7の上に乗るようにして出土しており、柱穴規模が大きく、SB-159との主軸方向を共有することから混入と考えられる。

SA-4 SA-4 (第53図) はSA-2南西隅外側にあり、長さ773cmで5間である。方位はN-101°-Eで、SA-2の南辺と方向が一致しており、同時期のものと考えられる。SA-4からは須恵器・灰釉陶器 (第58図102-105) が出土しており、4期と推定される。

SA-5 SA-5 (第53図) は18次・U-7区にあり、長さ570cmで4間である。方位はN-77°-Eで、掘方の直径は小さい。主軸方向はSB-199の主軸と一致しており、SB-199の北西約4mのところにある。SA-4からは出土遺物はないが、SB-199と同時期と推定される。

SA-6 SA-6 (第54図) は公文(KMN) ・ A地区のO-48区にあり、長さ11.3mで6間である。方位はN-96°-Eで、掘方の直径は小さく、間隔も一定しない。主軸方向はSB-219と一致しており、SB-219の南約3mのところと平行してある。SA-6からは出土遺物はないが、SB-219と同時期と推定される。

5. 門 (SM)

門は2ヶ所 (SM-1・2) で確認されているが、内側区画の拡張された南辺にも当然門があったと推定されるので、少なくとも3ヶ所はあったと考えられる。また、SA-2の各辺に平行する溝は途中で切れており、SD-2とSD-3との間、SD-5・6の北側部分、SD-9とSD-10との間にも小規模な門があった可能性が推定でき、南辺には大規模な門が、その他の3辺には小規模な門が造られていたと考えられる。

SM-1 SM-1 (第53図) は3期の内側区画の南辺中央にある南門である。2間×3間の総柱構造で、桁行425cm、梁間302cmである。柱間は桁行の中央が広く175cm、両側が125cmである。P-3・8・16はそれぞれP-2・7・10の東側に接するようになってあり、P-12は二つの穴が重なって

いる。これらはいずれも門の建て直し、あるいは補修を示すものと考えられる。

SM-2 SM-2 (第54図)は1期の外側区画の南辺中央にある南門である。門としては柱間が広くなっただけの単純な構造であり、棟門と呼ばれるものである。柱間は187.5cmである。

6. 幢竿支柱 (SI)

幢竿支柱は2ヶ所 (SI-1・2) で確認されている。いずれも、二つの大型の柱穴が対になったものである。他の掘立柱建物と比較して、柱穴はかなり大きく、柱痕跡も約40cmとかなり太い。柱の構造や規模からSI-2からSI-1へ造り替えられたものと考えられる。

SI-1 SI-1 (第53図)は金堂の南西側L-1区にある。柱穴は直径約1mであり、柱痕跡は直径約40cmである。両柱穴間の間隔は160cmであり、主軸方向はN-11°-Eである。SI-2より柱穴は小型で、柱間隔も短い。

SI-2 SI-2 (第53図)は金堂の南東側O-2区にある。柱穴は直径約1.2~1.5mであり、柱痕跡は直径約40cmである。両柱穴間の間隔は260cmであり、主軸方向はN-100°-Eである。SI-1よりは大型である。

7. 土壌 (SK)

土壌は多数確認されているが、ここでは図示した遺物を出土したもののうち、他の遺構との関係が強いと考えられるものについて説明する。各土壌の位置、法量等のデータは一覧表 (第2表) による。

瓦溜まり (SK-173・197・198・219・327~333)

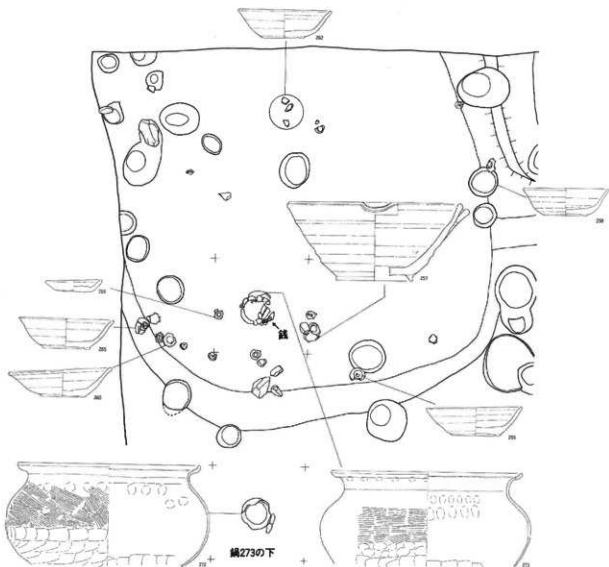
瓦溜まりは多量の瓦が出土した廃棄土壌である。これらはいずれも金堂の周辺に集中しており、金堂建て替え時の工事に伴う廃棄土壌と考えられる。これらの廃棄土壌出土遺物はほとんどが瓦であり、土器は少量である。しかし、出土した土器には各土壌ごとに時期差があり、一時期にすべての廃棄土壌が形成されたのではないことを示している。

特に出土量が多い大型の廃棄土壌は、4期 (SK-327・331) と6期 (SK-219・332・333) に集中しており、この時に大規模な建て替えが行われたことを示している。また、金堂の遺構は確認されていないが1期 (SK-197・328・330)、2期 (SK-173) にも、中小規模の瓦溜まりが確認でき、この時期にも金堂が存在した可能性が高いことを示している。

これら以外にも、講堂周辺で中規模の廃棄土壌が見られるが、瓦を多量に出土することはない。講堂周辺の廃棄土壌は講堂の建て替えに伴うものである可能性が高いが、瓦が出土しないことは講堂が瓦葺きでなかったためと考えられる。

掘立柱建物に伴う土壌 (SK-249・287・294、SB-202・P14、SB-240・P12)

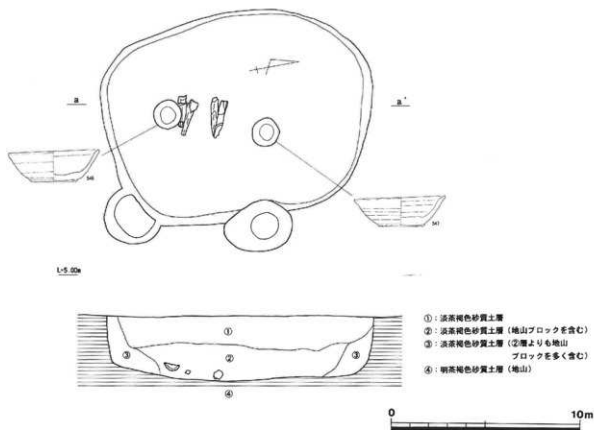
掘立柱建物に伴う土壌は以上の5基がある。いずれも正方形が円形に近く、建物面積の半分ほどを占めている。



挿図10 SK-249遺物出土状況図 (1/40)

SK-249 SK-249 (挿図10) では多量のハマグリ貝殻と共に多数の中世陶器と銭貨24枚が出土している。銭貨24枚の内、23枚 (第135図21-43) は伊勢型鍋二つを口を下にして重ね、その上から繋がった形で出土しており、埋納されたものである可能性が高い。

これ以外の土壌では、土壌の性格を示唆するような出土遺物等は確認されていない。



挿図11 SK-348遺物出土状況図 (1/20)

8. 土墳墓 (SK)

土墳墓は6基 (SK-348・381~384) が確認されている。これらの中には遺存状態が不良で、はっきりと確認できないものもある。

SK-348 SK-348 (挿図11) は大腿骨等と考えられる長骨が確認できた。これが膝の方向を示しているとすれば、頭を北、体を東に向けた横臥屈葬と考えられる。副葬品は中世陶器碗が2点 (第77図546・547) 出土しており、8期と考えられる。

SK-382 SK-382 (第1図) も骨の遺存状態から頭を北、体を西に向けた横臥屈葬であったと考えられる。頭の下には石がおかれていた。副葬品は見られず、時期不明である。

SK-385 SK-385 (第15図) は大半が溝に切られており、大腿骨等の可能性がある長骨の一部が確認されたのみである。この骨の遺存状態から膝は西を向いていたと考えられ、頭を北、体を西に向けた横臥屈葬であったと考えられる。明確な副葬品は見られないが、覆土中から中世陶器碗が出土しており、8~9期のものと推定できる。

SK-381・383に関しては、土壌の規模も小さく、骨の遺存状況も不良であるため、詳細は不明である。土壌墓ではない可能性も考えられる。

また、SK-384に関しては、現代まで墓であるという伝承があり、近世～近代の新しい時期のものである可能性が高い。

9. 不明遺構 (SX)

通常の土壌や瓦溜まりとは異なり、多くの遺物を出土し、不整形で大型の土壌を不明遺構として説明する。

SX-3~6 SX-3~6 (第16・17図)は18次調査のT・U-7~9区にある不整形の浅い土壌である。SX-3~6はいずれもSE-2の南側に近接するように集中しており、いくつかの浅い穴が連結したところも見られることから、複数回の廃棄の集合体である可能性がある。

新しい時期の溝の一部が切られているが、SX-3とSX-4、SX-5とSX-6は連結しており、両者の間はL字状の空間がある。この空間は幅約4m程で北側はSE-2に続いており、位置的にもSE-2と何らかの関係が想定できる。また、SX-6の南東約10mにはSA-5とSB-199がある。SX-3~6の辺りには井戸、土器を多量に出土した大型の廃棄土壌、掘立柱建物約40m×20mの範囲に配置されており、何らかの厨房的な施設群と考えられる。

10. 井戸 (SE)

井戸は今回の報告範囲内からは8基(SE-2・10~16)が確認されている。井戸の調査については、できる限り断ち割り調査を行ったが、宅地部分の調査においては重機による断ち割り調査が行えず、出土遺物や詳細についてははっきりしなかったものがある。各井戸の計測値は表2に示してある。

SE-2 SE-2 (第54図、写真図版6)は1次調査のT-9区で確認された。遺構検出面の直径は約550cm、上部の直径は約290cm、底部の直径は約200cm、深さは遺構検出面から約350cmである。井戸の底部には削ぎの井筒の一部と板材によって組まれた枠の3~4段ほどが残存していた。井戸底部には砂が15~20cm程の厚さで敷かれ(第54図⑦層)、この上に枠が組まれていた。枠は長方形の板材の小口を組み合わせて四角く組まれており、各接点の内側には杭が打たれていた。井戸枠と井筒の間には粘土と共に裏込めの石が多量に詰め込まれていた(第54図⑥層)。

井筒は高さ約1mほどが斜めになって残存していた。井筒の上部あたりで直径が大きくなっており、井戸枠を再利用するために抜き取ったときの穴と考えられる。

井戸枠等の木製品は保存処理の都合上、第Ⅲ分冊で報告する予定である。

SE-9 SE-9は37次調査のL-11区で確認された。前回の報告分であるが、一覧表に掲載が漏れていたため、今回示している。

SE-10 SE-10 (第8図) は1次調査のN-4区で確認された。深さは遺構検出面から約130cmである。出土遺物は灰釉陶器が出土しており、時期が遡る可能性もある。現状では湧水は見られなかったため、形状から井戸としたが、他の井戸と比較して直径が小さく、深さも浅いため、井戸ではない可能性も考えられる。この場合、寺院址に付随する何らかの遺構と考えられる。

SE-11 SE-11 (第12図) は39次調査のP-1区で確認された。断ち割り調査が行えなかったため深さは不明である。井戸の肩から銭貨が510枚かたまっており出土している。出土状況からは井戸に埋納されたものかどうかは確定できない。

SE-12 SE-12 (第11図) は39次調査のQ-49区で確認された。断ち割り調査が行えなかったため深さは不明である。出土遺物からは9期と推定される。

SE-13 SE-13 (第15図) は46次調査のR-1区で確認された。南側は掘削で壊されているが、直径は約180cmと考えられる。断ち割り調査が行えなかったため深さは不明である。出土遺物は須恵器、灰釉陶器、中世陶器の碗が見られ、8期頃と推定される。

SE-14 SE-14 (第6図) は3次調査と42次調査のI-6区にまたがって確認された。断ち割り調査が行えなかったため深さは不明である。出土遺物は須恵器、中世陶器碗・播鉢が見られ、8期頃と推定される。

SE-15 SE-15 (第16図) は18次調査のT-6区で確認された。断ち割り調査が行えなかったため深さは不明である。出土遺物は須恵器、中世陶器碗が見られ、8期頃と推定される。

SE-16 SE-16 (第12図) は1次調査のO-5区で確認された。断ち割り調査が行えなかったため深さは不明である。出土遺物は中世陶器碗(東濃産)、土師器の小片が見られ、8期頃と推定される。

11. 溝 (SD)

溝に関しては、寺院址に関係して構築されたものと、近世以降で排水と土地の区画に関するものとは二分できる。前者に関しては溝の全体像も推定できるが、後者に関しては全体的な計画性や規模に関してもはっきりしないものが多く、同一の溝が複数の調査区に渡って確認されており、端部が確認できない溝がほとんどである。

このため、前者の溝に関しては通し番号 (SD-1~16) を付け、後者の溝については「市道 (I)」と同様に暫定的に調査時の遺構番号をそのまま使用することにした。例えば、4次・SD-1 (第15図) は第4次調査区の東端で確認された溝である。また、南隣の27次調査で確認された27次・SD-1 (第15図) は4次・SD-1と同一の溝である可能性が高いが異なった名称になる。今

回は暫定的にこのような名称を使用するが、統一的な名称は今後全体的な分析を進めた上で再考する。なお、長さ等の量量についても決定できない。

SD-1 SD-1 (第11～15図) は外側区画の東辺内側に沿って南北約90mに渡って直線に伸び、P-8区で直角に曲がり、東に約28m伸びているL字状の溝である。南端はS-50区にあり、ちょうど外側区画の南東隅辺りでわずかに東へ曲がり、浅くなって無くなっている。東端は1次調査のR-9区で終わっており、約15m先にはSE-2がある。この東端部分は第1分冊でSK-112としたところに当たり、SK-112は土壁ではなく、溝の一部であることが判明した。断面はコの字形であり、全体に非常に浅いが出土遺物は比較的多い。断面はコの字状で深さは約24cmである。

SD-2 SD-2 (第9・13図) は内側区画東辺の外側に沿っている。溝は南端がO-5区で切れており、東端は調査区外で不明である。断面はU字状で深さは約26cmである。

SD-3 SD-3 (第12・13図) は内側区画東辺の外側に沿っており、SD-2の南側に続いている。溝は北端がO-5区で切れており、南端は調査区外を挟んでSA-2の南東隅まで伸びているが、端部は溝に切られており不明である。断面はU字状で深さは約38cmである。SD-3からは多量の遺物が出土しており、特に甕類を中心にO-5区に集中的に廃棄されていた。

SD-4 SD-4 (第8・12図) は内側区画南辺の外側に沿っており、SM-1の東側にある。溝は西端がSM-1の手前で切れており、東端は調査区外で不明である。断面はコの字状で深さは約38cmである。SD-4の埋土はかなり地山質であり、出土遺物も少量である。門を挟んだ反対の西側にはSD-13があり、対応するものと考えられる。

SD-5 SD-5 (第5図) は内側区画西辺の外側に沿っており、調査区外を挟んで南に伸びている。溝は北端がJ-3区で切れており、南端は溝や攪乱に切られており不明である。断面はU字状で深さは約47cmであり、かなり深い。SD-5は掘り直されており、北端のJ-3区辺りでは2本が重なった形状をしている。溝中の埋土は断面でも分層はできなかった。

SD-6 SD-6 (第5図) は内側区画西辺の内側に沿っており、調査区外を挟んで南に伸びている。溝は北端がJ-3区で切れており、南端は溝や攪乱に切られており不明である。断面はU字状で深さは約50cmであり、かなり深い。SD-6も掘り直されており、北端のJ-3区辺りでは溝底部が二重になった形状をしている。溝中の埋土は断面でも分層はできなかったが、比較的多くの瓦が片寄せ出しており、この出土状況からも掘り直しが確認できた。SD-5・6の北端は同じところで切れており、この辺りに出入口が造られていた可能性がある。

SD-7 SD-7 (第5図) は内側区画西辺の外側に沿っており、I-4・5区で一部がかろう

じて確認できたのみである。後世の溝にかなり攪乱されており、完形に近い遺物が溝底部に集中して出土している。南北両端は溝や攪乱に切られており不明である。

SD-8 SD-8 (第6図) は内側区画北辺の内側に沿っており、中央より西側にある。溝は一部後世の溝に切られているが、東端がSA-2中軸線あたりで切れており、西端もJ-7区の溝の手前で切れている。溝の西側では平面形がやや崩れ、底部にも凹凸が見られる。断面は浅いU字状で深さは約15cmと浅い。

SD-9 SD-9 (第6図) は内側区画北辺の外側に沿っており、中央より西側にある。溝は一部後世の溝に切られているが、東端がSA-2中軸線あたりで切れており、西端もJ-7区の溝の手前で切れている。SD-8と平行する位置にあり、同時に存在したものと考えられる。溝の西側では平面形が崩れ、底部にも凹凸が見られる。断面は浅いU字状で深さは約19cmと浅い。出土遺物は比較的多くの灰釉陶器を出土している。SD-8・9の東端はSA-2北辺中央の同じ位置で切れており、この辺りに出入口が造られていたと考えられる。

SD-10 SD-10 (第9図) は内側区画北辺の外側に沿っており、中央より東側にある。溝の両端は調査区外でありはっきりしないが、中軸線を挟んでSD-9と対応する位置にある。断面は浅いU字状で深さは約36cmである。

SD-11 SD-11 (第6・9図) は内側区画北辺の内側に沿っており、中央より西側にある。溝は一部調査区外を挟んで、西端がSA-2の中軸線あたりで切れており、東端もM-8区で切れている。断面は浅いU字状で深さは約11cmと浅い。

SD-12 SD-12 (第8図) は内側区画南辺の内側に沿っており、中央より西側にある。SD-12は後世の溝にかなり攪乱されており、底部近くが残るのみである。西端はSB-177の手前で切れているようであり、同時に存在した遺構である可能性が高い。断面は浅いU字状で深さは約52cmである。SM-1を挟んだ反対側には同様な溝は見られない。

SD-13 SD-13 (第7図) は内側区画南辺の外側にあるが、調査区外にかかり、攪乱が著しく、一部が確認されたのみである。位置的にはSM-1を挟んでSD-4と対応しており、同様な溝になると考えられる。断面は浅いU字状で深さは約30cmである。

SD-14 SD-14 (第9図) は内側区画北辺の内側に沿っており、中央より西側にある。西端はM-8区で切れており、東端は後世に溝に切られて不明である。断面は浅いU字状で深さは約18cmと浅い。

SD-15 SD-15 (第5・6・8・9図) はL-5区の講堂のあったところに造られている。長

径約13m、短径約8mの長楕円形で、幅は約2mである。断面はU字状で深さは約37cmである。溝内からは中世陶器が多量に出土しており、7期に造られたと推定される。溝の内側からは掘立柱建物等の遺構は確認できていないが、南側の金堂跡地についても同様な溝が造られており、溝内部に何らかの建物が建てられていたと考えられる。この場合、礎石建物であった可能性が高いと考えられる。

SD-16 SD-16（第8図）はL-3区の金堂のあったところに造られている。長軸約14m、短軸約12mの隅丸長方形で、幅は約2mである。断面はU字状で深さは約45cmであり、掘り直しが行われている。溝内からは中世陶器が多量に出土しており、7期に造られたと推定される。溝の内側からは掘立柱建物等の遺構は確認できていないが、北側の講堂跡地と同様に礎石建物が建てられていた可能性が高いと考えられる。

第4章 遺物

南側区画（寺院址）出土の遺物は土器、瓦、金属器、石器に大別した。土器は須恵器～土製品の8種類159型式、瓦は8種類、金属器は銅製品、鉄製品の2種類、石器は個別に示した。個々の遺物のデータについては一覧表にまとめてある（第9表参照）。

1. 土器

寺院址出土の土器は掘立柱建物群出土土器と比較して、灰釉陶器と中世陶器の比率が高い点に特徴がある。これは主体となる遺物の時期に違いが見られるためであり、特に灰釉陶器に関しては北側掘立柱建物群では欠落していた型式がいくつか認められた。新たに追加した型式は、須恵器17型式、灰釉陶器13型式、鉛釉陶器5型式、中世陶器4型式、陶磁器24型式、土師器18型式、土製品4型式である。また、これ以外に鉛釉陶器5型式を追加した。前回の報告では緑釉陶器碗が1点出土しただけであったので分類表に掲載しなかったが、今回は緑釉陶器及び三彩等の彩釉陶器が増加したのでこれらを一括して、鉛釉陶器とした。これらを含め今回新たに追加した型式は87型式である。なお、製塩土器については一覧表では土製品としたが、土器観察表では土師器としており、一覧表が間違っていたので訂正する。

新たに設定した各型式の詳細は前回と同様に一覧表と図に示している。以下では各種類ごとに新たに設定した型式を中心に説明する。今回示したもの以外は前回の分類（註1）を踏襲している。

A. 須恵器（挿図12・13、挿表2・3・5）

須恵器には、蓋、坏、皿、盤、高盤、高坏、火舎、碗、壺、陶白、甕、鉢、硯、承盤、甌の15器種がある。今回新たに追加した器種は高坏、火舎の2器種、型式は18型式である（挿表2）。以下では、新たに追加した型式がある器種について説明する。

蓋は壺蓋3、平頂蓋3の2型式を追加して、16型式となった。壺蓋3は口縁部端部の折返し短いものである。平頂蓋3は体部が弓なり状で口縁端部に折返しが見られず、湖西窯でも最終段階のⅥ期第2小期（註2）に位置付けられている。

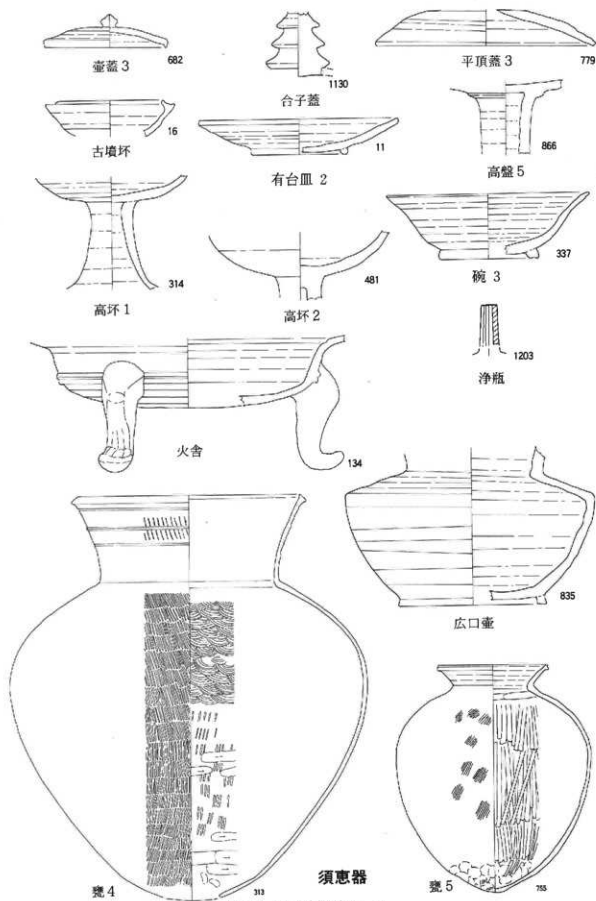
皿は有台皿2を追加して、4型式となった。有台皿2は盤5に近似しているが、盤5の口縁部が外側に折れるのに対し、ほぼ直線からやや内傾する点、盤5の高台よりも小さくなる点に特徴があり、灰釉陶器の模倣品と考えられるものである。

高盤は高盤5を追加して、5型式となった。高盤5は坏部と脚部との接合部に明瞭な突帯を持つことに特徴がある。坏部や脚部ははっきりしないが、坏部と脚部が大きく開くものが一言町黒谷B遺跡などで灰釉陶器に伴って出土している（註3）。高盤4も接合部に小さな突帯を持つが坏部が小さく直線的に開くもので、坏部や脚部の形状に違いが予想される。高盤5は少なくとも黒笹90号窯期には見られるものであり、これ以後に降る可能性もある。

高坏は今回新たに追加した器種であり、2型式がある。脚部の形状と法量に違いが見られるが、破片資料であり詳細は不明である。

挿表3 土器型式分類表-1

新番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
1	682	須恵器	壺	壺蓋 3	体部は笠形、口縁部は下方に小さく折れる。
2	1130	須恵器	壺	合子蓋	摘みは小塔状、内面は丁寧にナデられている。体部は不明。
3	779	須恵器	壺	平頂蓋 3	体部は丸い笠形で天井部はケズリ、口縁端部の折返しはない。
4	16	須恵器	坏	古墳坏	内面に受け部を持つ合子状の坏身
5	11	須恵器	皿	有台皿 2	体部はやや内湾し、内外面にノタ目が見られる。底部は糸切り未調整。灰釉陶器皿の模倣品。
6	866	須恵器	高盤	高盤 5	体部と脚部との接合部に明瞭な突帯が巡らされている。脚部は棒状になるが体部は不明。
7	314	須恵器	高坏	高坏 1	坏部は丸く内湾している。脚部は裾で大きく広がっている。
8	481	須恵器	高坏	高坏 2	坏部は丸く内湾している。脚部は細い棒状であるが端部は不明。
9	134	須恵器	火舎	火舎	体部はやや丸底下端に突帯を巡らす。口縁部は大きく外反し、内面に一条の沈線がある。脚は三足で作りは簡略。
10	337	須恵器	碗	碗 3	体部は丸く立ち上がった後、口縁部はやや外反している。内外面にノタ目が見られ、底部はケズリである。
11	1203	須恵器	壺	浄瓶	口縁部先端のみであり、詳細は不明。
12	835	須恵器	壺	広口壺	体部は肩が張り明瞭に折れる。口縁部は不明。
13	313	須恵器	甕	甕 4	口縁部は肥厚しやや突出した面を持ち、外面には沈線と櫛描刺突文を持つ。胴部最大径は上半部にあり、丸底である。外面は平行タタキ、内面は上半は同心円当て具、下半は平行当て具、底部付近はケズリ。
14	755	須恵器	甕	甕 5	口縁部は短く外反し、頸部はくの字に折れる。口縁端部はやや拡張されている。底部は丸底。外面は平行タタキ後ナデ、内面は板ナデ。
15	764	須恵器	甕	甕 6	口縁部は大きく外反し頸部は直角に折れ、端部は上下に肥厚して面を持つ。胴部は肩が張り、下半は直線的にすばまる。底部は平底で、未調整と木葉痕がある。外面は平行タタキ、内面は無文当て具。内外面に黄土がハケ塗りされたものがある。



挿圖12 土器型式分類圖一I

火舎も今回新たに追加した器種であり1型式がある。体部下半に一条の突帯が見られるものであるが、胎土はきめ細かく、白色に近い焼き上がりであり、無釉の灰釉陶器あるいは緑釉陶器の素地の可能性もある。

碗は碗3を追加して、4型式となった。碗3は口縁部上半が緩やかに外反し、内外面にノタ目が見られるものである。碗2よりも口縁部が大きく開いている。灰釉陶器のように内面がコテにより調整され平滑になっているものとは明らかに異なり、焼き上がりも暗灰色で通常の須恵器の焼成である。碗3は灰釉陶器碗の模倣形態と考えられる。

壺は浄瓶、広口壺を追加して、14型式となった。浄瓶は小破片であり、詳細は不明であるが、広口壺は肩が張り、明瞭に折れるもので、湖西窯に特徴的な広口壺である。

甕は甕4～7を追加して、7型式となった。大きくは丸底の甕1・4・5、平底の甕6・7に二分される。甕4は甕1としたものの中から沈線と刺突文、口縁端部の形状を基準に細分したものである。甕は丸底から平底へ、紋様や突帯のように装飾のあるものから無いものへと変化したことが想定できる。また、黄土をハケ塗りしたものが確認できるのは平底の甕6のみである。

鉢は鉄鉢を追加して、3型式となった。鉄鉢は802のように口縁端部に内傾する面を持ち、底部がやや尖るもの、581のように口縁端部に面を持たず、底部もやや平たくそり切ったもの、206の小型品等に見られるように細分できる可能性が高いが、今回は一括している。

甗は甗2を追加して、2型式となった。甗2は体部の肩が張り、下半がやや直線的に延びるもので、広口壺と同様の特徴があり、湖西窯のⅣ期とされるものと同じと考えられる。

挿表2 須恵器型式変更一覧表

番号	旧分類「市道Ⅰ」			新分類「市道Ⅱ」			変更事項
	種	類	器種型式	種	類	器種型式	
1				須恵器	蓋	壺蓋3	新設定
2				須恵器	蓋	合子蓋	新設定
3				須恵器	蓋	平頂蓋3	新設定
4				須恵器	坏	古墳坏	新設定
5				須恵器	皿	有台皿2	新設定
6				須恵器	高盤	高盤5	新設定
7				須恵器	高坏	高坏1	新設定
8				須恵器	高坏	高坏2	新設定
9				須恵器	火舎	火舎	新設定
10				須恵器	碗	碗3	新設定
11				須恵器	壺	浄瓶	新設定
12				須恵器	壺	広口壺	新設定
13				須恵器	甕	甕4	新設定
14				須恵器	甕	甕5	新設定
15				須恵器	甕	甕6	新設定
16				須恵器	甕	甕7	新設定
17				須恵器	鉢	鉄鉢	新設定
18				須恵器	甗	甗2	新設定

B. 灰釉陶器 (挿図13・14、挿表4・5)

灰釉陶器には碗、蓋、皿、壺、鉢、硯、高坏の7器種がある。今回新たに追加したのは硯、高坏の2器種、型式は13型式である。以下では、新たに追加した型式がある器種について説明する。

挿表4 灰釉陶器型式変更一覧表

番号	旧分類「市道Ⅰ」			新分類「市道Ⅱ」			変更事項
	種	類	器種型式	種	類	器種型式	
1				灰釉陶器	碗	大碗 2	新設定
2				灰釉陶器	碗	大碗 3	新設定
3				灰釉陶器	碗	深碗 2	新設定
4				灰釉陶器	碗	稜碗 1	新設定
5				灰釉陶器	蓋	合子蓋	新設定
6				灰釉陶器	皿	皿 1	新設定
7	灰釉陶器	皿	皿 1	灰釉陶器	皿	皿 2	名称変更
8	灰釉陶器	皿	皿 2	灰釉陶器	皿	皿 3	名称変更
9				灰釉陶器	皿	皿 4	新設定
10				灰釉陶器	皿	折縁皿	新設定
11				灰釉陶器	鉢	鉄鉢	新設定
12				灰釉陶器	硯	円面硯 1	新設定
13				灰釉陶器	硯	風字硯 1	新設定
14				灰釉陶器	高坏	高坏 1	新設定
15				灰釉陶器	高坏	高坏 2	新設定

碗は、前回の分類ではほぼ9世紀から11世紀頃までの各時期のものが出土しているが、欠落している器形のものも見られたので、大碗2・3、深碗2、稜碗1を追加して、13型式となった。大碗2は高台が細く外側に開くもので東山72号窯期に対応すると考えられる。大碗3は他とは形態が異なり、高台はほとんど認められず、腰が張った鉢状をしている。底部形態は手付瓶に最も近いが、内外面に釉がハケ塗りされており、とりあえず大碗3とした。

蓋は合子蓋を追加して、3型式となった。合子蓋は余形が分かるものはないが、小塔状の筒みと半球形の坏部に特徴がある。胎土はきめ細かく、白色に近い焼き上がりであり、無釉の灰釉陶器あるいは緑釉陶器の素地の可能性もある。

皿については前回確認できなかった時期のものを確認することができたので、新たな型式を設定すると共に型式名の変更を行った。皿は皿1・2を名称変更して皿2・3とし、新たに皿1・4を追加した。これに折縁皿を加え、総計12型式となった。皿1は角高台で底部調整はケズリ、釉はハケ塗りで三又トチによる重ね焼きである。皿4は口径が小さく、底部は未調整、高台も低い三角形である。折縁皿は口縁の端部近くが内側に折れて、やや外湾するものである。

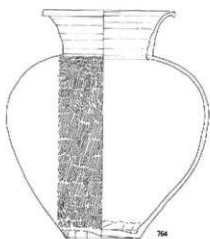
皿1が黒笹14号窯期、皿2が黒笹90号窯期、皿3が折戸53号窯期、皿4が東山72号窯期～百代寺窯期にほぼ対応すると考えられる。

鉢は鉄鉢を追加して、2型式となった。鉄鉢は底部が平底で、口縁端部が丸く内湾し、釉が内面及び口縁端部外面にハケ塗りされているものである。口縁端部が内湾したまま終わるもの(791)と、内湾した後上につまみ上げられるもの(279)とがあり、細分できる可能性があるが、今回は一括している。

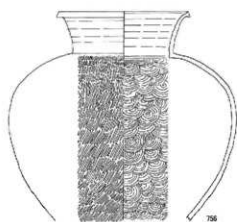
硯は今回新たに追加した器種であり、円面硯1と風字硯1の2型式がある。円面硯1は脚部のみであるが、形状から円面硯とした。風字硯1は器壁がかなり厚く、外面がケズリ調整されているもので

挿表5 土器型式分類表-2

新番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
16	756	須恵器	甕	甕 7	口縁部は大きく外反し頸部は直角に折れ、端部は上下に肥厚して面を持つ。底部は平底で、未調整。外面は平行タタキ、内面は同心円当てで具。
17	802	須恵器	鉢	鉄 鉢	底部は丸く、下1/3はケズリ。口縁部は内湾し、端部に内傾した面を持つ。
18	466	須恵器	甗	甗 2	体部は肩が張り明瞭に折れる。底部の高台は四角でやや外側に張り出している。
19	1226	灰釉陶器	碗	大碗 2	底部は糸切り未調整、高台は細く外側に開く、体部は直線的に外側に開く。釉は不明。
20	354	灰釉陶器	碗	大碗 3	底部はケズリで径が大きい。高台は極めて低く削り出しの可能性は高い。体部は丸く内湾する。釉は内外面ハケ塗り。
21	485	灰釉陶器	碗	深碗 2	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、体部は強く腰が張り、高台は張り出し細く高い。重ね焼き。
22	357	灰釉陶器	碗	稜碗 1	底部はケズリ、体部は明瞭に腰が折れ、上半部は外反する。高台は爪形で、釉は内外面ハケ塗り。
23	1084	灰釉陶器	蓋	合子蓋	摘みは小塔状、天井部は丸く外面はケズリ。無釉。
24	158	灰釉陶器	皿	皿 1	底部はケズリで角高台。器壁は底部が厚く、退部は僅かに内湾しながら直線的に伸びる。口縁端部は外側に引き出され、外面が沈線状になる。釉は内面にハケ塗り。三又トチによる重ね焼き。
25	790	灰釉陶器	皿	皿 4	底部は糸切り未調整、体部は僅かに内湾するが水平に近い。口径は小さく、高台は低い三角形。釉は口縁部に漬け掛けで光沢はない。重ね焼き。
26	845	灰釉陶器	皿	折縁皿	底部はケズリ、体部は直線的に開き、口縁部近くで明瞭に折れている。口縁端部は外反している。体部外面はケズリ、釉は内面にハケ塗り。
27	791	灰釉陶器	鉢	鉄 鉢	底部は平底でケズリ、体部は丸く口縁部は内湾し、端部は折れて尖っている。体部下半はケズリ、釉は内面にハケ塗り。
28	307	灰釉陶器	碗	円面碗 1	脚には長方形のスカシとヘラガキ沈線。



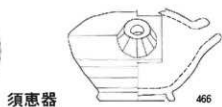
甕 6



甕 7



鉄鉢

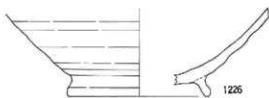


須恵器

甗 2



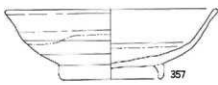
大碗 3



大碗 2



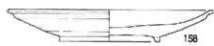
深碗 2



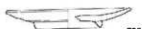
稜碗 1



合子蓋



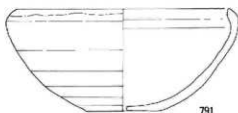
皿 1



皿 4

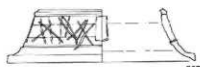


折縁皿



鉄鉢

灰釉陶器



円面甗 1

挿図13 土器型式分類図-2

あるが、小破片のため詳細は不明である。

高坏も今回新たに追加した器種であり、高坏1・2の2型式がある。高坏1は外側に開く短脚で小型のものである。高坏2は太い脚で大型のものである。全体形ははっきりしないが、静岡県湖西市の大知波峠寺出土のものに類似しており、飲食器と考えられる。施釉は見られず、無釉の灰釉陶器あるいは緑釉陶器の素地の可能性が考えられる。

C. 鉛釉陶器 (挿図14、挿表5・6・9)

前回の報告では緑釉陶器は型式分類表に掲載しなかったが、今回は出土数は少ないものの、二彩・二彩も出土しているため、鉛釉陶器として一括して説明する。

鉛釉陶器には三彩合子、二彩蓋、緑釉碗、緑釉皿の4器種を設定したが、ほとんどは1個体のみのものである。

挿表6 鉛釉陶器型式変更一覧表

番号	旧分類『市道Ⅰ』			新分類『市道Ⅱ』			変更事項
	種	類	器種型式	種	類	器種型式	
1				鉛釉陶器	三彩合子	合子	新設定
2				鉛釉陶器	二彩蓋	小壺蓋	新設定
3				鉛釉陶器	緑釉碗	碗	1新設定
4				鉛釉陶器	緑釉碗	稜碗	1新設定
5				鉛釉陶器	緑釉皿	段皿	1新設定

三彩合子は小破片になって出土しているが、すべて同一個体と考えられる。器形は底部が丸く、受け部を持ち、合子形になると考えられる。軸は内外面に施されているが、外面に茶色、黄緑色の釉が交互に掛けられているようである。調整は底部外面はケズリ、これ以外はナデによる。

二彩小壺蓋は全体に黄色が強い釉が掛けられている。ところどころ、釉が抜けて白色に近いところが見られ、二彩と考えた。

緑釉碗は碗1と稜碗1の2型式がある。碗1は前回報告したもの(註4)で、高台が外側に張り出す点に特徴がある。稜碗1は小破片であるので詳細は不明である。

緑釉皿は段皿1の1型式がある。底部はケズリでやや細い角高台、体部下半はケズリで内面はミガキである。緑釉陶器は技術的に古い形態を残しているため、黒厩90号窯期に対応するものと考えられる。

D. 中世陶器 (挿図14、挿表7・9)

中世陶器は碗、皿、支脚、鉢、壺、甕、陶丸、硯の8器種がある。

新たに設定した器種は支脚、壺、陶丸、硯の4器種、型式は4型式である。

支脚は今回新たに追加した器種であり、1型式がある。支脚は棒状の脚のみで、詳細は不明である。とりあえず支脚としたが、類例を待って再考したい。

壺は今回新たに追加した器種であり、壺1の1型式がある。壺1は頭部に断面三角形の突帯が巡らされてものであるが、詳細は不明である。

陶丸は今回新たに追加した器種であり、1型式がある。

碗は今回新たに追加した器種であり、1型式がある。平面形は長方形になると考えられる。

挿表7 中世陶器型式変更一覧表

番号	旧分類「市道Ⅰ」			新分類「市道Ⅱ」			変更事項
	種	類	器種型式	種	類	器種型式	
1				中世陶器	支脚	支脚	新設定
2				中世陶器	壺	壺1	新設定
3				中世陶器	陶丸	陶丸	新設定
4				中世陶器	硯	硯	新設定

E. 陶磁器 (挿図14・15、挿表8・9)

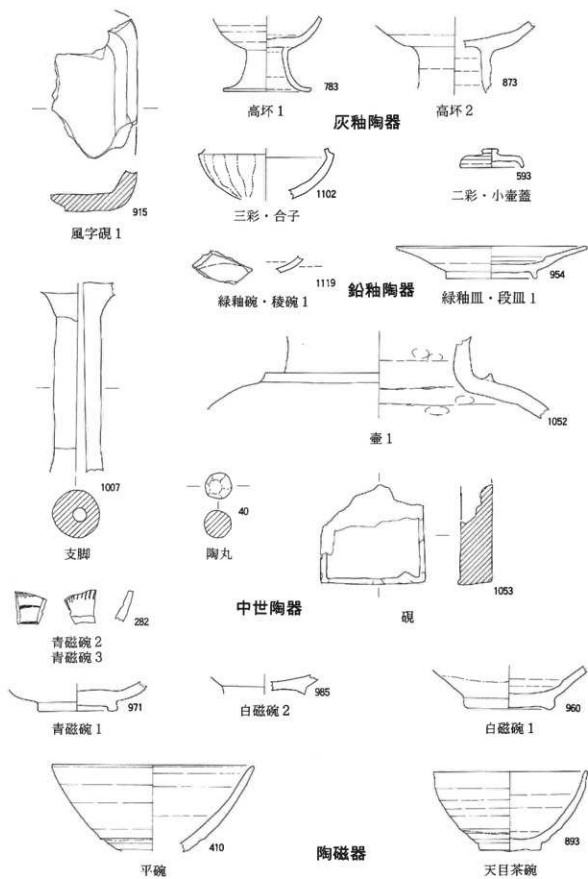
陶磁器には14～19世紀頃の中国からの輸入陶磁器と瀬戸・美濃等の国内産のものが見られる。本来は産地等の属性から種類別に細分した上で、更に器種、型式と細分すべきであるが、今回は便宜的に器種の項目で中国陶磁、古瀬戸、近世陶磁の3種類に分類した。型式名として挙げたのは細分できるものを含んだ大まかな分類である。なお前回の分類も合わせて名称変更を行っている(挿表8)。

挿表8 陶磁器型式変更一覧表

番号	旧分類「市道Ⅰ」			新分類「Ⅱ」			変更事項
	種	類	器種型式	種	類	器種型式	
1	陶磁器	碗	碗1	陶磁器	中国陶磁	青磁碗1	名称変更
2	陶磁器	碗	碗2	陶磁器	中国陶磁	青磁碗2	名称変更
3	陶磁器	皿	皿1	陶磁器	中国陶磁	白磁皿1	名称変更
4	陶磁器	皿	皿2	陶磁器	古瀬戸皿	折縁皿	名称変更
5				陶磁器	青磁碗	青磁碗3	新設定
6				陶磁器	白磁碗	白磁碗1	新設定
7				陶磁器	白磁碗	白磁碗2	新設定
8				陶磁器	古瀬戸碗	平碗	新設定
9				陶磁器	古瀬戸碗	天目茶碗	新設定
10				陶磁器	古瀬戸皿	卸皿	新設定
11				陶磁器	古瀬戸皿	縁軸小皿	新設定
12				陶磁器	古瀬戸皿	折縁深皿	新設定
13				陶磁器	古瀬戸皿	直縁大皿	新設定
14				陶磁器	古瀬戸仏具	仏供	新設定
15				陶磁器	古瀬戸壺	四耳壺	新設定
16				陶磁器	古瀬戸壺	小壺	新設定
17				陶磁器	古瀬戸壺	水注	新設定
18				陶磁器	古瀬戸摺鉢	摺鉢	新設定
19				陶磁器	近世陶磁	染付碗	新設定
20				陶磁器	近世陶磁	染付皿	新設定
21				陶磁器	近世陶磁	碗	新設定
22				陶磁器	近世陶磁	天目茶碗	新設定
23				陶磁器	近世陶磁	皿	新設定
24				陶磁器	近世陶磁	仏飯器	新設定
25				陶磁器	近世陶磁	仏花瓶	新設定
26				陶磁器	近世陶磁	鉢	新設定
27				陶磁器	近世陶磁	摺鉢	新設定
28				陶磁器	近世陶磁	壺	新設定

挿表9 土器型式分類表-3

新番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
29	915	灰軸陶器	硯	風字硯1	外面はケズリ、器壁はかなり厚い。
30	783	灰軸陶器	高 坏	高 坏 1	坏部は丸く、脚は太く端部が裾広がり。無釉
31	873	灰軸陶器	高 坏	高 坏 2	坏部は丸く、脚は太い。大型であるが詳細は不明。無釉。
32	1102	鉛釉陶器	三彩合子	合 子	体部は丸く半球状、口縁部は不明。釉は地が黄緑色で体部外面に茶色、透明が掛かる。内面は黄緑色と透明である。
33	593	鉛釉陶器	三 彩 蓋	小 壺 蓋	天井部は平らで口縁部は丸く直角に折れる。端部は丸い。天井部外面はケズリ、他はナデ。釉は全体に黄色が強く、所々抜けている（白色釉）ところがある。
34		鉛釉陶器	緑 釉 碗	碗 1	高台は細く外側に開いている。全面施釉。
35	1119	鉛釉陶器	緑 釉 碗	稜 碗 1	小破片であり詳細は不明。
36	954	鉛釉陶器	緑 釉 皿	段 皿 1	底部はケズリで角高台。体部下半はケズリ、内面はミガキ。全面施釉。
37	1007	中世陶器	支 脚	支 脚	脚部が棒状で長いが全形は不明。
38	1052	中世陶器	壺	壺 1	体部は肩が丸く、頸部には断面三角形の突帯が巡る。
39	40	中世陶器	陶 丸	陶 丸	手捏ねの球形品。
40	1053	中世陶器	硯	硯	断面は長方形で、平面形も長方形の可能性が高い。
41	971	陶磁器	中国陶磁	青磁碗1	削り出し高台の蓮弁文碗を一括した。
42	985	陶磁器	中国陶磁	青磁碗2	高台は削り出しで方形、内面見込みには沈線文がある。
43	282	陶磁器	中国陶磁	青磁碗3	劃花文青磁碗。小片であるため詳細不明
44	960	陶磁器	中国陶磁	白磁碗1	高台が低く、見込みに段がある。
45	985	陶磁器	中国陶磁	白磁碗2	高台が高い。
46	410	陶磁器	古瀬戸碗	平 碗	表9土器観察表参照
47	893	陶磁器	古瀬戸碗	天目茶碗	表9土器観察表参照
48	378	陶磁器	古瀬戸皿	卸 皿	表9土器観察表参照
49	1097	陶磁器	古瀬戸皿	緑釉小皿	表9土器観察表参照
50	152	陶磁器	古瀬戸皿	折縁深皿	表9土器観察表参照
51	148	陶磁器	古瀬戸皿	直縁大皿	表9土器観察表参照
52	509	陶磁器	古瀬戸仏具	仏 供	表9土器観察表参照
53	921	陶磁器	古瀬戸壺	四(三)耳壺	表9土器観察表参照
54	1189	陶磁器	古瀬戸壺	小 壺	表9土器観察表参照



挿圖14 土器型式分類圖-3

中国陶磁

中国陶磁は青磁碗1・2・3、白磁碗1・2、白磁皿1に分類した。青磁碗1は蓮弁文のあるものを一括した。断面四角形の高台で鎮蓮弁文のものも見られ、多くは龍泉窯系の碗と考えられる。青磁碗2は内外面に柳描文と沈線文が見られ、同安窯系の碗の可能性はあるが、小片のため詳細は不明である。白磁碗1は高台が低く、内面に段があるものである。白磁碗2は高台が高いものであるが、いずれも破片のため詳細は不明である。なお、前回の分類との関係は挿表8にある。

古瀬戸

古瀬戸は平碗、天目茶碗、卸皿、縁釉小皿、折縁皿、折縁深皿、直縁大皿、仏供、四耳壺、小壺、水注、播鉢に分類した。個々の説明は土器観察表(表9)に示した。また、折縁皿は前回の分類で陶磁器・皿2としたものである。とりあえず、中国陶磁ではないと思われたので古瀬戸としたが、いわゆる瀬戸・美濃産の陶磁器ではない可能性もある。

近世陶磁

近世陶磁器は、中国陶磁、古瀬戸以外のものを一括した。本来は産地別に分類すべきであるが、今回は便宜的に染付碗、染付皿、碗、皿、仏供、鉢、播鉢に分類した。また、出土点数が少なく種類も多いので分類表には掲載せず、個々の説明は土器観察表(表9)に示してある。

F. 土師器(挿図15・16、挿表8・9・11・13)

土師器には、甕、鍋、皿、坏、高坏、蓋、鉢、碗、裂塩土器の9器種がある。今回新たに追加した器種は高坏の1器種、型式は19型式である。以下では、変更があるもの、あるいは新たに追加した型式がある器種について説明する。

甕は遠江型2を追加して10型式になった。遠江型2は平底で体部が直線的に大きく開き、口縁部が外湾し端部が上方に肥厚するものである。これは同時期にある長胴甕と対応関係にある甕であるいは鍋とすべきかも知れない。遠江からの搬入品の可能性が高い。

鍋は伊勢型1・2、くの字形1、半球形1、茶釜形1、焙烙形1、羽釜形1、小鍋の8型式がある。これらの内、伊勢型2は前回の分類で伊勢型1としたものである。今回これよりも古い型式の伊勢型鍋が確認できたので、これを伊勢型1として新たに設定した。伊勢型1は器壁がやや厚く、外面調整のハケが顕著でない点が特徴である。これよりも古い形態の伊勢型鍋は市道遺跡では確認されていないが、南側に近接する公文遺跡では出土している(註5)。

皿については、新たな型式を設定すると共に型式名の変更を行った。皿3は皿5に、高盤1・2は有台皿1・2に名称変更し、新たに皿3・4、灰釉皿1を追加し、総計11型式となった。高盤については、須恵器の高盤のように脚が高く、坏部の径が大きいものが遠江に分布しており、前回高盤としたものを有台皿とした。

坏は有台坏1を追加し、3型式となった。有台坏1は須恵器の有台坏の模倣形態と考えられ、遠江からの搬入品と考えられる。

高坏は今回新たに追加した器種であり、2型式がある。高坏1は小破片のため詳細は不明であるが、高坏2は脚部が中空の棒状で高く、裾広がりになった形態をしており、遠江の分布している高盤とは

挿表10 土師器型式変更一覧表

番号	旧分類「市道Ⅰ」			新分類「市道Ⅱ」			変更事項
	種	類	器 種 型 式	種	類	器 種 型 式	
1				土師器	甕	遠江型2	新設定
2				土師器	鍋	伊勢型1	新設定
3	土師器	甕	伊勢型1	土師器	鍋	伊勢型2	名称変更
4	土師器	皿	皿 3	土師器	皿	皿 5	名称変更
5				土師器	鍋	くの字形1	新設定
6				土師器	鍋	半球形1	新設定
7				土師器	鍋	茶釜形1	新設定
8				土師器	鍋	焙烙形1	新設定
9				土師器	鍋	羽釜形1	新設定
10				土師器	鍋	小 鍋	新設定
11				土師器	皿	灰釉皿1	新設定
12				土師器	皿	皿 3	新設定
13				土師器	皿	皿 4	新設定
14				土師器	坏	有台坏1	新設定
15				土師器	高 坏	高 坏 1	新設定
16				土師器	高 坏	高 坏 2	新設定
17				土師器	蓋	合子蓋	新設定
18				土師器	鉢	手捏ね	新設定
19				土師器	碗	碗 4	新設定
20				土師器	碗	碗 5	新設定
21				土師器	碗	無台碗1	新設定
22	土師器	高 盤	高 盤 1	土師器	皿	有台皿1	名称変更
23	土師器	高 盤	高 盤 2	土師器	皿	有台皿2	名称変更
24	土製品	製塩土器	製塩土器1	土師器	製塩土器	製塩土器1	名称変更

明らかに形態が異なっている。脚部の表面は摩滅しているが、縦方向の整形痕が認められ、愛知県以西からの搬入品の可能性が考えられる。

蓋は合子蓋を追加して、2型式になった。合子蓋は灰釉陶器合子蓋の模倣品と考えられ、同じ形態をしている。いずれも摘みのみであるので詳細については不明である。

鉢は手捏ねを追加して、2型式になった。手捏ねとしたものは半球形の鉢形をした小型品である。

碗は碗4・5、無台碗1を追加して、6型式になった。碗4は中世陶器碗の模倣形態、碗5は灰釉陶器碗の模倣形態と考えられる。無台碗1は灰釉陶器碗を無高台にした形態をしており、遠江地域に見られるもので、ここからの搬入品と考えられる。

製塩土器は前回は分類表では土製品、土器観察表では土師器となっていたが、土師器に統一する。

G. 土製品 (挿図16、挿表12・13)

土製品は土錘、支脚、輪の羽口、五徳、土玉、円盤の6器種である。今回新たに追加した器種は五徳、土玉、円盤の3器種、型式は4型式である。以下では、変更があるもの、あるいは新たに追加した型式がある器種について説明する。

挿表11 土器型式分類表-4

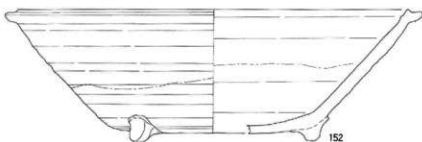
新番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
55	392	陶磁器	古瀬戸壺	水注	表9土器観察表参照
56	1055	陶磁器	古瀬戸鉢	播鉢	表9土器観察表参照
57	342	土師器	甕	遠江型2	底部は平底、体部は直線的に延び、頸部がくびれた後口縁部が外反する。口縁端部は丸く肥厚し、口縁部内面も肥厚している。体部外面はユビオサエ後下半部はハケ。内面はユビオサエ。
58	1163	土師器	鍋	伊勢型1	口縁部は緩やかに外反し、端部は内側に折り返されている。体部は偏球形。内面はユビオサエ、外面体部上半はユビオサエ後ハケ、下半はケズリ。器壁はやや厚い。
59	1041	土師器	鍋	くの字形1	口縁部はくの字に曲がり外面は折り返されている。外面はユビオサエ後ハケ、下半部は後ケズリ。内面は板ナデ下半部はケズリ。内耳は口縁部内面に2ヶ所。
60	156	土師器	鍋	半球形1	口縁部は肥厚し、端部をつまみ出して凹面になる。体部は半球形。体部外面はユビオサエ、下半部はケズリ。体部内面は板ナデ。内耳は2ヶ所。
61	155	土師器	鍋	茶釜形1	口縁部はやや内傾し端部に面を持つ。胴部は肩が張る偏球形になると思われる。外面はユビオサエ後ハケ、内面はナデ。
62	1089	土師器	鍋	焙烙形1	口縁部は直立し、端部は外側につまみ出されて凹面になる。外面はユビオサエ、下半部はケズリ。内面は板ナデ。内耳は口縁部内面に2ヶ所。
63	153	土師器	鍋	羽釜形1	口縁部は内湾し、鈔は水平に付く。口縁端部は肥厚し、内面直下は強いナデにより凹面になる。体部外面はユビオサエ後ハケ、下半部はケズリ。内面は丁寧なナデ。
64	510	土師器	鍋	小鍋	口縁部はくの字に折れ、短く尖っている。体部は偏球形で外面はユビオサエ、内面はナデ。内耳の有無は不明。
65	1209	土師器	碗	碗 4	底部は糸切り後ナデ、体部は緩やかに外反し、口縁部が僅かに引き出されている。器壁は厚く、内外面ともナデ。
66	241	土師器	碗	碗 5	底部は糸切りのちナデ、口縁部は細長く外側に張り出す。体部は不明。
67	565	土師器	碗	無台碗1	底部は糸切り、体部下半は緩やかに内湾し、上半は外反している。無高台の碗の形状。



卸皿



378



折縁深皿

152



縁袖小皿

1097



直縁大皿

148



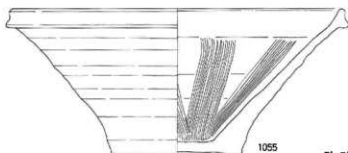
仏供

509



四耳壺

921



掃鉢

1055



小壺

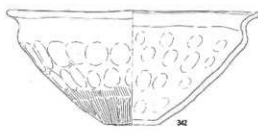
1189



水注

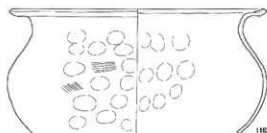
392

陶磁器



遠江型 2

342



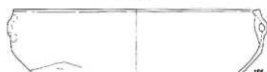
伊勢型 1

1183



くの字形 1

1041



半球形 1

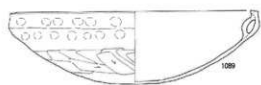
196

土師器

挿圖15 土器型式分類図-4

挿表13 土器型式分類表－5

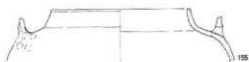
新番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
68	409	土師器	皿	皿 3	口縁部は緩やかに立ち上がり尖っている。外面はユビオサエ、内面は丁寧なナデ。
69	143	土師器	皿	皿 4	口縁部は立ち上がった後外反してくびれている。端部は尖っている。外面はユビオサエ、内面は丁寧なナデ。
70	66	土師器	皿	灰釉皿 1	口縁部は尖り僅かに内湾している。高台は細く張り出している。底部調整は不明。
71	1210	土師器	坏	有台坏 1	底部は突出し、体部は外反する。高台は三角形で外側に開いている。内外面ナデで外面は赤彩されている。
72	246	土師器	高坏	高坏 1	細い棒状脚で、坏部・脚部は不明。
73	673	土師器	高坏	高坏 2	太い棒状脚でやや太くなり先端で大きく外反する。外面は縦方向の整形痕がある。
74	316	土師器	蓋	合子蓋	摘みは小塔状、天井部は不明。内外面ナデ。
75	1188	土師器	鉢	手捏ね	底部は小平底、体部は半球形。内外面ともユビオサエ。
76	1180	土製品	土 鍾	紡錘形 7	胴が張った紡錘形で表面はユビオサエ。自然釉がかかっている。
77	1073	土製品	五 徳		上端にU字形の切れ込みが4ヶ所ある。内外面とも丁寧なナデ。
78	28	土製品	土 玉		手捏ねの玉。
79	1079	土製品	円 盤		平瓦を円盤状に加工したものの。



焙烙形 1



羽釜形 1



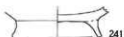
茶釜形 1



小鍋



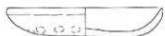
碗 4



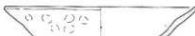
碗 5



無台碗 1



皿 3



皿 4



灰釉皿 1



有台环 1



高环 2



合子蓋

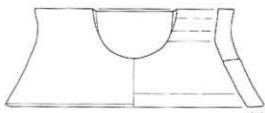


手捏ね

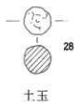
土師器



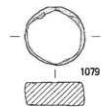
紡錘形 7



五徳



土玉



円盤

土製品

挿圖16 土器型式分類圖一5

土鍾は今追加した紡錘形7を含め、円筒形1～3、紡錘形1～7の10型式がある。紡錘形7は両端が細くなっており、自然釉が掛かっている。灰軸陶器と同じ胎土であり、灰軸陶器窯で生産されたものと考えられる。

五徳は土師質でU字型の切れ込みが見られるものである。単独で使用するのではなく、他の部材と共に組み合わせられる可能性もあり、とりあえず五徳と推定しておく。

土玉は中世陶器陶丸と同一形態のもので、同時期のものと考えられる。

円盤は灰色で表面が暗灰色に焼き上がった平瓦を加工して作られている。

挿表12 土製品型式変更一覧表

番号	旧分類『市道Ⅰ』				新分類『市道Ⅱ』				変更事項				
	種	類	器	種	型	式	種	類		器	種	型	式
1							土製品	土	鍾	紡錘形7			新設定
2							土製品	五	徳				新設定
3							土製品	土	玉				新設定
4							土製品	円	盤				新設定

2. 瓦

瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、文字・紋様瓦に分類した。また、本来瓦とは異なるが瓦塔と螺髪も合わせて本章で報告する。型式名は軒丸瓦にはKM、軒平瓦にはKH、丸瓦にはM、平瓦にはHを用い、個々の型式についてはこれに数字を付した。また、同一型式内の細部の違い、同範の彫り直し等は数字の後にアルファベットを付した（第4表）。

A. 軒丸瓦

軒丸瓦は大別5型式、細別8型式に分類できる。

KM01（第103図1～10） 素弁八葉蓮華紋軒丸瓦。花卉は肉厚で高く、周縁は直立して高い。中房は平坦で蓮子を1個配している。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒は石英とチャートが多く、角が取れて丸くなっている。焼成は堅緻で灰色から灰褐色に焼き上がったものから、やや焼成があまく黄褐色に焼き上がったものまでである。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

筒部は瓦当裏面の最上部につき、補強粘土は瓦当裏面の一部に認められる。瓦当と筒部が接合する部分は一段低くなって、ナデ調整されている。このナデ調整は瓦当裏面の中央まで及ばず、瓦当整形時点で筒部と接合する部分があらかじめ低く作られ、ここに筒部をはめ込んだ後、瓦当裏面と外周の最終調整を行っていることを示している。瓦当裏面と外周の調整はナデであり、ケズリの痕跡は認められない。

KM02A（第104図11～13） 素弁八葉蓮華紋軒丸瓦。花卉は肉厚で高いが短く寸胴である。周縁は

直立して高く、中房は平坦で1+8の蓮子を配している。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2~5mm程の砂粒も僅かに含んでいる。大きな砂粒は石英とチャートが多い。焼成は堅緻で灰色から淡灰色に焼き上がっている。

筒部は瓦当裏面の最上部につき、補強粘土は瓦当裏面の一部に認められる。瓦当と筒部が接合する部分は一段低くなって、ナデ調整された後に当たりを取るための切れ目が入れている。この切れ目は瓦当裏面の中央まで及ばず、KM01と同様に瓦当整形時点で筒部と接合する部分があらかじめ低く作られ、ここに筒部をはめ込んだ後、瓦当裏面と外周の最終調整を行っていることを示している。瓦当裏面と外周の調整はナデであるが、外周の一部にケズリが認められるものもある。KM02A型式はここに示した3点が確認されているだけである。

KM02B (第104図14・15) 素弁八葉蓮華紋軒丸瓦。花卉は肉厚で高いが短く寸胴である。周縁は直立して高く、中房は平坦で1+8の蓮子と円形の突線を配している。

胎土、焼成、調整技法等はKM02Aと同様である。KM02B型式はKM02A型式に中房の突線を付加したものである。KM02B型式はここに示した2点が確認されているだけである。

KM03 (第105図16) 素弁八葉蓮華紋軒丸瓦。花卉はやや低い。周縁は直立しているが幅が狭く低い。突出した中房には1+8の蓮子を配し、外区には低い突線上に珠文を配している。KM03型式はここに示した1点しか出土していない。胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成は不良で灰色に焼き上がっているが、2次的に火を受けている可能性もある。

筒部は瓦当裏面の最上部につき、補強粘土は瓦当裏面の一部に認められる。瓦当部の厚さはKM01・02型式の半分ほどであり、かなり薄い。瓦当裏面下部には丸瓦痕跡と考えられる部分があるが、表面の遺存状態が悪く断定できない。また、瓦当裏面及び外周部はナデ調整と思われる。

KM04A (第105図17・19~22) 素弁八葉蓮華紋軒丸瓦。瓦当面はほとんど平坦で、花卉はたく浅い沈線で表現されている。周縁は直立して高く、幅広ではあるが一定していない。中房はほとんど痕跡状になっており、外区には突線が1条巡っている。胎土は1~2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で赤褐色に焼き上がっている。

筒部は瓦当裏面の先端から3cm程下がったところにつき、補強粘土は主に外面に施されている。瓦当裏面と外周の調整はナデである。外区の突線の直径が1.2cmあり小さいものをKM04A型式とした。

KM04B (第105図18・23) 外区の突線の直径が1.2cmあり大きいものをKM04B型式とした。これ以外の特徴はKM04A型式と全て同じであり、筈が異なるものである。

KM05A (第106図24~26) 素弁八葉蓮華紋軒丸瓦。花卉は肉厚で高く、中房は高く突出し、1+4の蓮子を配している。外区には低い突線上に珠文を配している。周縁は直立して高いが、幅は一定しておらず、内面には型に良くはまらず粘土がよれた痕が見られる。胎土には砂粒を含まない。焼成は極めて堅緻であり、淡灰色に焼き上がっている。胎土・焼成ともに須恵器と同様な仕上がりである。

筒部は瓦当裏面の最上部につき、補強粘土はほとんど見られない。瓦当部の厚さはKM03型式と同様にかなり薄い。瓦当裏面下部には丸瓦痕跡が明瞭に残り、一本づくり技法によって製作されたものであることを示している(註6)。瓦当裏面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残り、一部にヘラある

いは棒状工具による刺突が見られる。また、筒部の裏面には粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に残り、外面には平行タタキが認められる。筒部の側縁と丸瓦痕跡には切り取られた痕が見られ、側縁に平行して切り取りの目安となる沈線が残っているものもある。外区の外線の直径が11cmあり、小さいものをKM05A型式とした。

KM05B (第106図27・28) 外区の外線の直径が11.5cmあり大きいものをKM05B型式とした。これ以外の特徴はKM05A型式と全て同じであり、范が異なるものである。

B. 軒平瓦

軒平瓦は大別3型式、細別4型式に分類できる。

KH01A (第107図29) 素文軒平瓦。瓦当文様が無く、ナデで調整されているものである。頸部は平瓦と同じ厚さで幅10cmの粘土板を貼り付けたもので、明瞭な段になる。両側縁は三角形に切り取られ、稜を持っている。胎土は1～2mm程度の砂粒を比較的多く含み、5～10mm程の小石も目立っている。大きな砂粒は石英とチャートが多い。焼成は堅緻で灰色から灰褐色に焼き上がったものから、やや焼成があまく黄褐色に焼き上がったものまでである。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、割がれた頸部凹面にも糸切り痕が見られる。凸面はナデ調整されているが、頸部が割がれた部分では格子タタキが見られる。法量は長さ46cm、広端面(瓦当面)27cm、狭端面25.5cm(推定)、厚さ2cmであり、通常の平瓦と比較して長方形に近く、やや長い。

KH01B (第108図30) 素文軒平瓦。瓦当文様が無く、格子タタキで調整されているものである。頸部は平瓦と同じ厚さで幅5cmの粘土板を貼り付けたもので、明瞭な段になる。両側縁は三角形に切り取られ、稜を持っている。胎土は1～2mm程度の砂粒を比較的多く含み、5～10mm程の小石も目立っている。大きな砂粒は石英とチャートが多い。焼成はやや焼成があまく黄褐色に焼き上がったものが多い。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、割がれた頸部凹面にも糸切り痕が見られる。凸面はナデ調整されているが、頸部が割がれた部分では格子タタキが見られる。法量は長さ40.5cm、広端面(瓦当面)28cm、狭端面24.5cm、厚さ2cmであり、通常の平瓦と同じである。

KH02 (第109図31・32) 重弧文軒平瓦。瓦当文様は瓦当面の中心に太い棒状工具で断面四角形の沈線を弾いたものである。頸部は平瓦と同じ厚さで幅5cmの粘土板を貼り付けたもので、明瞭な段になる。両側縁は三角形に切り取られ、稜を持っている。胎土は1～2mm程度の砂粒を比較的多く含み、5～10mm程の小石も目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成は堅緻で灰褐色に焼き上がったものが多い。黒色の粘土粒のようなものが目立ち、シャーモットと考えられる。

凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、凸面はナデ調整されている。法量は先存するものがないため不明である。

KH03 (第109図33～37) 鋸歯文軒平瓦。瓦当文様は内区と周縁を一本の外線で区画し、内区には山形文と珠文が配されている。頸部は無頸で、瓦当面では平瓦の3倍ほどの厚さがある。両側縁は

垂直に、下端はやや丸くなっている。胎土は1～2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で赤褐色に焼き上がっている。胎土、焼成ともKM04型式の軒丸瓦と同様である。

凹面には布目圧痕が残り、凸面はナデ調整されているが、頸部が割られた部分では縄目タタキが見られる。法量は完存するものがないため、長さは不明、広端面（瓦当面）29.5cm、狭端面不明、厚さ1.8cmである。

C. 丸瓦

丸瓦の分類は破片資料でも判別可能な属性として凸面の調整技法の違いを中心に分類を行った。丸瓦は大別5型式、細別6型式に分類できる。

M01（第110図38、第111図41） 凸面ナデ調整丸瓦。凸面は縦方向のナデで調整されている。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、布の縦じ合わせの痕跡が残っている。側縁にはヘラ切りによる粘土のはみ出しが顕著で、側縁内側、狭端面内側はヘラで面取りされている。法量は長さ40cm、広端面27.5cm、狭端面12cm、厚さ1.5cmである。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒は石英とチャートが多く、角が取れて丸くなっている。焼成は堅緻で灰色から灰褐色に焼き上がったものから、やや焼成があまく黄褐色に焼き上がったものまでである。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

M02（第110図39） 凸面格子叩き調整丸瓦。凸面は格子叩きが施された後、縦方向にナデられている。M02型式は出土数が極めて少なく、ナデ残りが表面に残っている可能性が高く、本来はM01型式と同一と考えられる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残っている。側縁にはヘラ切りによる粘土のはみ出しが顕著で、側縁内側はヘラで面取りされている。法量は完存するものが無く不明である。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒は石英とチャートが多く、角が取れて丸くなっている。焼成は堅緻で灰褐色に焼き上がっている。

M03（第110図40） 凸面縄目叩き調整丸瓦。凸面は縄目叩きが施されている。M03型式は出土数が極めて少なく、単に表面調整が欠落したものである可能性もある。凹面には布目圧痕が残っている。側縁内側はヘラで幅広く面取りされている。法量は完存するものが無く不明である。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒は石英とチャートが多く、角が取れて丸くなっている。焼成はややあまく黄褐色に焼き上がっている。また、2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

M04（第111図42） 玉緑式丸瓦。凸面は摩滅しているものが多いが、ナデと思われる。凹面には粗い布目圧痕が残っている。側縁にはヘラ切りによる粘土のはみ出しが見られず、側縁内側の面取りはない。法量は完存するものが無く、玉緑端部の幅は10cm、段部が14.2cmである。胎土は1～2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で赤褐色に焼き上がっている。胎土、焼成ともKM04型式の軒丸瓦と同様である。

M05A（第112図43・45、第113図47・48） 凸面平行叩き調整丸瓦。凸面は縦方向のナデで調整されているが、平行タタキを残すものがあり、基本的には平行タタキ後ナデ調整が施されたと考えられる。また、凸面の一部に布目が残っているものがあるが、調整終了後に付いたものである。凹面は横

方向のナデであり、粘土紐の痕跡を顕著に残しているが当て具の痕跡は見られず指によるヨコナデが顕著である。狭端面は丸く撫でられており、広端面には製作台からの切り放しのためのヘラ切り痕があり、わずかに段になっている。両側縁にはヘラ切りによる粘土のはみ出しが顕著で、未調整である。また、両側縁の凸面側には切り放しの日印のためのヘラによる沈線が残っているものがある。

分量は完存するものがないが、広端面18.5cm、狭端面13cm、厚さ1.5cmであり、円筒形を3分の1分割したものである。胎土は砂粒を全く含まず、焼成は堅緻で灰色から、やや焼成があまく灰白色に焼き上がったものまでである。胎土・焼成・調整とも須恵器の堯と酷似している。

M05B (第112図44、第113図46) 凸面平行叩き調整丸瓦。凸面は横方向のナデで調整されている。円筒形を2分の1分割したものであり、これ以外の特徴はM05A型式と同じである。

D. 平瓦

平瓦の分類は丸瓦と同様に破片資料でも判別可能な属性として凸面の調整技法の違いを中心に分類を行った。平瓦は大別4型式、細別7型式に分類できる。

H01A (第114図49) 凸面ナデ調整平瓦。凸面は縦方向のナデ、あるいはエビオサエで調整されている。また、凸面にも糸切り痕が残っているものが見られ、叩きの行程が省略されていると考えられる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残るが、糸切り痕のみで布目圧痕がほとんど見られないものもある。また、布の縦じ合わせの痕跡が広端面の端部近くに横方向に深く残っているものがあり、布の端部が補強のために縫い合わされていたことを示している。粘土板の重ね目が見られるものもあるが、糸切り痕の方向が逆になるものがあり、模骨の痕跡も顕著でない。あるいは一枚作りの可能性も指摘できる。両側縁はヘラ削りされている。

分量は長さ43cm、広端面29cm、狭端面24.5cm、厚さ2cmである。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒が目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成はややあまく黄褐色に焼き上がったものが多い。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

H01B (第115図50) 凸面ナデ調整平瓦。凸面は縦方向のナデで調整されている。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残るが、糸切り痕のみで布目圧痕がほとんど見られないものもある。粘土板の継ぎ目は顕著ではなく、模骨痕も顕著ではない。また、両側縁及び両端部もヘラ削りされており、一枚作りである可能性が高い。

分量は長さ37.5cm、広端面28cm、狭端面23.5cm、厚さ1.5cmである。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒が目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成は堅緻で灰色から灰褐色に焼き上がったものから、やや焼成があまく黄褐色に焼き上がったものまでである。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。H01B型式はH01A型式より小さいものである。

H02 (第116図51、第117図52) 凸面格子叩き調整平瓦。凸面は縦方向のナデの後、格子叩きが間隔を開けて施されている。このタタキは既にナデ調整が行われた後に行われたものであり、タタキ

締めるためのものではないと考えられる。軒平瓦の頸部が剝離した部分には格子叩きが密に施されており、ナデの行程の前に叩きの行程が行われていた可能性も指摘できる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残るが、顕著ではない。布の縦じ合わせの痕跡が広端面の端部近くに横方向に深く残っているものがあり、布の端部が補強のために縫い合わされていたことを示している。粘土板の重ね目が見られるものもあるが、模骨の痕跡は顕著でない。

分量は長さ44cm、広端面30cm、狭端面25cm、厚さ2cmである。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成はややあまく黄褐色に焼き上がったものが多い。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

H03A (第118図53) 凸面縄目叩き調整平瓦。凸面はユビオサエとナデの後、縄目叩きが小さな単位で乱雑に施されている。このタタキは格子叩きと同程度の大きさの工具により施されており、広端面から狭端面まで一直線に通るタタキとは異なる。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、布目痕が顕著である。両側縁と両端部の凹面側はヘラケズリにより面取りされている。粘土板の重ね目が見られるものもあるが、模骨の痕跡は顕著でない。

分量は長さ42cm、広端面不明、狭端面24cm、厚さ2cmである。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成はややあまく黄褐色に焼き上がったものが多い。また、黄褐色のものには2～5mm程の赤色粒が含まれているものがあり、シャーモットと考えられる。

H03B (第119図54、第120図57、第121図58) 凸面縄目叩き調整平瓦。凸面は縄目叩きが施されている。このタタキは広端面から狭端面まで一直線に通っている。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、布目痕が顕著である。なお、凸面は広端部に行くに従って裾広がりになっている。両端部の凹面側はヘラケズリにより面取りが顕著である。粘土板の重なりも見られず、模骨痕も顕著ではなく、一枚作りの可能性を指摘できる。

分量は長さ37cm、広端面27.5cm、狭端面24cm、厚さ1.5cmである。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成はややあまく黄褐色に焼き上がったものが多い。

H03C (第119図55・56) 凸面縄目・格子叩き調整平瓦。凸面は縄目叩きと格子叩きの両方が施されている。この縄目タタキはH03A型式と同じであり、格子叩きと同程度の大きさの工具により施されている。凹面には糸切り痕と布目圧痕が残り、布目痕が顕著である。粘土板の重なりも見られるが、出土個体数が少なく、詳細は不明である。

分量は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を比較的多く含み、2～5mm程の砂粒も目立っている。大きな砂粒はチャートが多い。焼成は堅緻で赤褐色から灰褐色のものがある。

H05 (第122図59・60、第123図61～63) 凸面平行叩き調整平瓦。凸面は縦方向のナデの後、平行タタキを残すものが多い。また、凸面の一部に布目が残っているものがあるが、調整終了後に付いたものである。凹面は横方向のナデ、あるいは横方向のナデの後縦方向にナデが行われている。また、粘土紐の痕跡を顕著に残しているが当て具の痕跡は見られず指によるヨコナデが顕著である。狭端面

は丸くなられており、広端面には製作台からの切り放しのためのヘラ切り痕があり、わずかに段になっている。両側縁にはヘラ切りによる粘土のはみ出しが顕著で、未調整である。また、両側縁の凸両側には切り放しの目印のためのヘラによる沈線が残っているものがある。

分量は完存するものがないが、全長37cm、広端面不明、狭端面20.5cm、厚さ1.5cmであり、円筒形を3分の1分割したものである。胎土は砂粒を全く含まず、焼成は堅緻で灰色から、やや焼成があまり灰白色に焼き上がったものまでである。胎土・焼成・調整とも須恵器の甕と酷似している。

E. 道具瓦

隅軒平瓦 (第125図65) 65はKH01A型式の軒平瓦を焼成前に裁断して作成したものである。

65は同じくKH01A型式の軒平瓦の狭端面を焼成後に半円形に打ち欠いたものである。通常の軒平瓦とは異なる形態であるが、これがどの部分に使用されたのかは不明である。

隅切瓦 (第126図66) 66は隅切瓦である。H01型式の平瓦の広端面の片側の一部を焼成前に切り取って作成している。

鬘斗瓦 (第127図70・71) 70・71は鬘斗瓦である。焼成前に整形されたものであり、平瓦からの転用品ではない。調整等はH01型式の平瓦と同じである。

鬼瓦 (第128図74) 74は鬼瓦である。表面はナデ、裏面には布目痕が残っている。残存しているのが小破片であるので全形は良く分からないが、無文で直径2cm程の穴が開いている。

塼 (第127図73) 73は塼である。第19次調査のQ-16区の表土から出土している。塼は、市道遺跡では市道3号窯の畝に使われているものが確認されているのみである。市道3号窯の畝に使われていた塼は焼成部床面に接していた部分が黒変しており、この塼にも同様の特徴が見られるところから市道3号窯の畝に使われていたものと考えられる。

その他 (第124図64) 64はKH01A型式の軒平瓦の狭端面を半円形に打ち割ったものである。どのような部分に使われたものかははっきりしない。

F. 文字・紋様瓦

文字瓦 (第127図72) 72は文字瓦の可能性のあるものである。M01型式の丸瓦に焼成前にヘラガキで書かれているが、文字かどうかは確定できない。

文様瓦 (第126図67～69) 文様瓦は文様がヘラガキされているものである。67はH01型式の平瓦の凸面に山形文、波状文、直線文が書かれている。68はH01型式の平瓦の凸面にヘラガキで沈線が1条書かれている。69はH01型式の平瓦の凸面にヘラガキで沈線がL字状に書かれている。

G. 瓦塔

瓦塔は相輪、屋蓋部、輪部、基壇の各部分が出土しているが、出土量は少なく全体の10%程度である。また、すべて同一個体と考えられ、明らかに別個体と判断できるものは出土していない。胎土は緻密で1mm程度のチャートと思われる白色砂粒をごくわずかに含む。また、1～2mmほどの赤色粒が見られ、シャーモットと考えられる。焼成はやや不良で、2次的に火を受けている可能性もある。色

調は黄灰褐色である。出土位置は金堂周辺にある瓦を多量に廃棄した大型の土塋（瓦溜まり）を中心に行っている。個々の出土位置等に関しては第5表に示している。

相輪（第129図1～3） 相輪の部材は宝珠、九輪、伏鉢が出土している。1は宝珠で直径3.6cmで中空である。2は九輪で直径13.4cmである。中心の穴は不明であり重なり方は分からない。下面には円形の低い突帯が巡らされている。3は伏鉢で最大径8.7cmで、低く丸い突帯と沈線が巡らされている。下端は露盤との剝離面と思われる、一部に切り込みの痕跡が認められる。これらはいずれもロクロ整形と思われる。

屋蓋部（第129・130図4～24） 屋蓋部には裏面に垂木を表現したもの（7～17・19～21）としなもの（4～6・18）がある。丸瓦部は棒状粘土を貼り付けたのち半截竹管で押し引きして表現している。垂木は断面四角形で位置は丸瓦部と対応している。22～24は小さな穴が貫通しており、風鐸を吊るすためのものであり、隅木と考えられる。裏面の垂木表現の有無は屋蓋部の各層で違いを示し、上層ほど簡略化された表現のものが使用されていると考えられる。

軸部（第130～132図25～39） 軸部は初層部（34～39）とこれより上の層（29）のものがあり、これ以外にも小破片（25～28・30～33）がある。組物の表現は、軸部壁体に長方形の粘土を貼り付け、この上に板状粘土で作った斗拱を貼り付けている。斗拱両側の組物表現は、板状粘土をヘラで逆T字型に切り取り、両側に小さな逆T字型を型押ししている。柱は四隅のみに見られ、斗拱下は省略されている。初層部の開口部は壁面に大きく開いており、柱は他の層よりも太く、断面は円形である。内法長押しには柱端から5cmのところ直径5mmの穴が開けられている。

基壇（第132図40） 基壇は長方形粘土板を組み合わせ四角くし、この上に壁体を組み上げている。地長押しには柱端から5cmのところ直径5mmの穴が開けられている。内法長押し穴と対応する位置にあり、扉の軸受けと考えられる。

その他（第132図41） 41は厚さ1.8cmの粘土板の端部が折り曲げられ、直径1cmほどの穴が開けられたものであるが、瓦塔の部品であるかは分からない。

H. 螺髪

螺髪は1点（第132図42）出土している。直径1.3cm、高さ1.6cmの円錐形で、螺旋状に沈線が巡っている。

3. 金属器

市道遺跡から出土した金属器は、銅製品と鉄製品がある（第133～138図）。個々の遺物の計測値等は一覧表に示している（第6表）。

A. 銅製品

銅製品は伯牙弹琴鏡、提子の環座、鈎帯金具、錢貨が出土している。

伯牙弹琴鏡（第134図24） 伯牙弹琴鏡は43次SD-1のJ-49区から出土している。法量は復元直径16.8cm、厚さ0.62cm、重量67gである。鳳凰の尾の部分と外区の銘帯には7文字が推定できる。尾の部分で折れ曲がってちぎれたようになっており、銅色が残っている。材質が純銅に近いためか、鈎

上がり悪く、銘帯の文字もはっきり読みとれない。類例としては、愛知県幡豆郡幡豆町西幡豆出土のもの（註7）に最も近く、踏み返し鏡と考えられる。

提子の環座（第134図26） 提子の環座はSK-341から出土している。分量は長さ4.3cm、摘みの厚さで0.53cm、重量19.6gである。鈕は鶏冠形、正面には12弁の菊花紋あるいは蓮華紋の変形と考えられる文様がある。また正面中央には4mm程の穴があり、これを中心に直径17mm程が無文で摩滅している。裏面は凹面であり、周縁がわずかに平らに磨かれているが、ほとんど錆肌のまま未調整である。裏面が凹面になっているのは本体の銚と目釘でかきしめるためであり、目釘は正面の擦痕から笠の大きなものであったと思われる。

鈔帯金具（第134図25） 25は鈔帯金具の巡方の裏金具である。分量は縦25.1mm、横28.8mm、厚さ1.2mm、重量5.1gである。外面の4辺は削り落とされている。

銭貨（第135～138図） 銭貨については和同開珎以外は中世の貿易銭がほとんどであり、近世の寛永通寶等がわずかにある。個々の計測値等は一覧表（第7・8表）に示してある。以下では代表的な遺構出土のものについて説明する。

SK-28出土銭貨（第138図155～161、第7表） SK-28（註8）からは和同開珎7点が出土している。「開」の門構えが隷書風の破字体で「新和銅」と呼ばれるものである。

SK-249出土銭貨（第135図21～43、第7表） SK-249からは北宋銭等の中国銭が24点出土している。このうち23点（21～43）は重ねられた土師器鍋の中から一括して出土している。最も新しいものは1260年初鑄の南宋銭「景定元寶」（40）である。

SE-11出土銭貨（第136～138図44～140、第8表） SE-11からは北宋銭等の中国銭が510点出土している。このうち最も新しいものは1408年初鑄の永樂通寶であり、94点が出土している。

B. 鉄製品

鉄製品には刀子、釘、不明鉄板、紡錘、鉄瓶がある（第133・134図、第6表）。

刀子は4点（第133図1～4）出土している。ほとんどが一部を欠損しているが、1はほぼ全形を推定できる。3のようにかなり使い込まれ、刃部が減っているものも見られる。関は両関造りで、茎は扁平で長方形のもの（2・3・4）が多いが、細長いもの（1）も見られる。

不明鉄板は2点（第133図5・6）出土している。5・6ともに両端が欠損しており、全形は不明である。幅20～30mm、厚さ約2mmの薄い鉄板で両側縁には刃部は見られず、用途不明である。

釘は13点出土している。遺存状態が悪くはっきりしないものもあるが、いずれも断面四角形の角釘と考えられる。頭部は一方に折れ曲がり、台形状になるものと、両方に延びて長方形になるものがある。

紡錘（第134図20）は直径5.6cm、厚さ0.3cmで一部を欠損している。軸部は残存長9.7cm、直径0.4cmで断面円形である。両端は欠損し、下端の接合痕ははっきりしないが、紡錘と考えられる。

鉄瓶（第134図23）は高さ6.8cm、胴部最大径6.3cmで完存している。胴部中央には沈線があり、この下端が突帯状にわずかに段になっている。内面も同じ位置がわずかに段になっており、この部分が鋳型の継ぎ目であることを示している。脚部は獣脚を模したもので、外側に2本の刻線があり、3脚

である。釣り手は尖頭型の五角形をしており、高さ1.1cm、厚さ0.4cmであり、直径0.2cmほどの穴が開いている。口部は直径1cmほどの円筒形で、直径0.3cmほどの穴が開いている。この鉄瓶はSK-354から、釘(第134図22)、無高台の中世陶器碗(第77図555)と共に出土しており、13世紀末～14世紀頃のものとして推定できる。

このほかに器種不明の鉄製品(第134図21)が出土している。21は厚さ0.4cmほどの鉄板をコの字状に折り曲げたものであるが、両端を欠いている。同程度の厚さで幅1cm程の鉄板を巻いて締めている。木製のものに巻かれていた可能性が高いが、木質等は確認されていない。

4. 石器

市道遺跡では縄文・弥生時代の遺構は確認されていないが、磨製石斧と石鏃が採集されている。これらの石器は近世の溝に廃棄された貝層中から出土しているものがあり、近接する縄文～弥生時代の貝塚(大西貝塚・水神貝塚等)から運び込まれた貝に混じって混入したものと考えられる。これ以外には、砥石類が出土している。

磨製石斧(第139図1・2) 1は1次・P-9区出土の太型給刃石斧である。現存長6.75cm、幅4.62cm、厚さ3.06cmである。両側縁は平らになっており、断面は隅丸長方形をしている。一部に敲打痕を残すが全面が良く磨かれている。刃部は敲打され潰れている。弥生時代中期頃のものと思われる。石質は塩基性岩である。2は41次・M-2区出土の乳棒状石斧である。現存長4.08cm、幅4.36cm、厚さ1.92cmである。両側縁は丸くなり、断面は楕円形である。表面には敲打痕を良く残している。石質は塩基性岩である。

打製石鏃(第139図3・4) 3は18次・U-7区出土の凹基式の石鏃である。脚部の一部を欠損している。全長1.85cm、幅1.42cm、厚さ0.34cm、重量0.7gである。石質は安山岩である。4は37次・K-9区出土の石鏃である。脚部を欠損しているため全形は不明である。残存長2.10cm、幅1.20cm、厚さ0.32cm、重量0.8gである。石質はチャートである。

硯(第139図5) 5は45次・I-50区表土出土の石製の硯である。かなり使い込まれ、穴が開いている。また、両面とも使用されている。残存長7.54cm、幅4.45cm、厚さ1.56cmである。石質は粘板岩である。

砥石(第139図6～12) 6～11はいずれも手持ちの砥石と考えられる。6はSK-362出土の砥石で両端が欠損している。断面は四角形で4面とも使用されている。残存長6.56cm、幅4.13cm、厚さ4.05cmである。石質は綺状の凝灰岩である。7はSK-362出土の砥石で下端が欠損している。断面は四角形で4面とも使用されている。残存長11.93cm、幅5.74cm、厚さ4.47cmである。石質は凝灰岩である。8はSK-365出土の砥石で中央で折れている。断面長方形で表裏両面が良く使い込まれている。また、折れた後も使い続けられており、接合部の厚さが異なって段になっている。残存長11.89cm、幅3.73cm、厚さ1.88cmである。石質は綺状の凝灰岩で6と同一である。9はSD-16出土の砥石で一部のみであり、全形は不明である。残存長6.66cm、幅2.3cm、厚さ2.98cmである。使用されているのは1面のみであり、他は欠損している。石質は砂岩である。10はSK-367出土の砥石で断面は長方形である。4面とも使用されているが、各面とも中央に稜があり、上下2面を構成してい

る。鎌砥石のように手持ちで使用されたと考えられる。全長10.78cm、幅2.59cm、厚さ2.09cmである。石質は凝灰岩である。11はSK-379出土の砥石で断面が不整形である。他の大型の砥石の欠損品の再利用と考えられる。各面とも使用痕があるが、一面のみが良く使い込まれている。全長11.68cm、幅6.02cm、厚さ2.61cmである。石質は凝灰岩である。12はSK-249出土の据え置き型の砥石である。半分以上欠損していると考えられる。残存長8.69cm、幅11.28cm、厚さ8.95cmである。石質は凝灰岩であるが火を受けているようである。

- 註1 豊橋市教育委員会他 1996年 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集 市道遺跡（I）」
- 註2 後藤建一 1989年 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県文化財調査報告書 第42集 静岡県の窯業遺跡』
- 註3 須川勝以 1995年 「第7章 黒谷B遺跡」「城山」宝飯郡一宮町教育委員会
- 註4 豊橋市教育委員会他 1996年 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集 市道遺跡（I）」28頁挿図7（1411）
- 註5 豊橋市教育委員会他 1997年 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第33集 公文遺跡（Ⅲ）・牟呂城址」C地区・S D-3出土のもの（24頁117）等がある。
- 註6 鈴木久男 1990年 「一本造り軒丸瓦の検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 註7 片山昭悟 1994年 「伯牙弹琴鏡」『奈良時代の鏡』
- 註8 豊橋市教育委員会他 1996年 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集 市道遺跡（I）」62頁第6図

第5章 まとめ

1. 時期区分の方法

南側区画（寺院址）の時期区分は、基本的に前回の報告（『市道（I）』1996年）で行った土器編年を基にした9期区分を使用し、新たに遺物・遺構が確認された中世後期を10期、近世以降を11期とした。具体的な建物配置の復元は基本的に前回の報告と同じ方法で行っている。

今回報告する地区では切り合い関係を持つ遺構が少なく、建物と切り合い関係を持ち、かつ遺物を多量に出土する廃棄土壌も少なかった。そこで、掘立柱建物出土遺物を詳細に検討して、これを基準とした。次に切り合い関係にないものは建物の主軸方向や位置関係から同時存在を推定した。

A. 遺構全体の構成

掘立柱建物は7期以降の掘方の径が小さなものが大半を占め、切り合い関係を確認できるものはほとんどなかった。1～6期の古代では約99m四方の堀に囲まれた区画（寺院址）と金堂、講堂、僧房群が中心になっている。講堂は切り合い関係を持っており、僧房群は重なっていた。この両者は寺院内の主たる建物であり、これを中心に遺構が構成されていたことは間違いない。以下では遺構の全体構成の中で問題となる点を説明する。

(1) 堀の切り合い

南側区画で確認されている掘立柱の堀は、外側の区画である約99m四方のSA-1と内側の区画である約78m×約54mのSA-2の二つがある。この両者は北辺の中央辺りで切り合っており、SA-1からSA-2へ造り替えられていることが確認されている。この両者の主軸方向は約3°ずれているが、中軸線はほとんど同じところを通っており、基点となったのは北辺の中央と考えられる。

SA-1は出土遺物がほとんど見られず、遺物から所属年代を確定することは困難である。SA-2も出土遺物がほとんどなく、遺物から所属年代を確定することは困難である。しかし、SA-2の両側に平行する溝からは多量の遺物が出土している。これらは須恵器を主体としながらも灰軸陶器も多く含んでおり、その下限年代は6期と推定できる。

(2) 金堂

金堂は礎石建物であったと推定されるが、建立時の足場穴が確認できるだけで、その規格・法量等については不明である。出土遺物も金堂に伴うと考えられる溝から小片が少量出土しただけである。

(3) 講堂

講堂の主たる建物は4間×7間の四面庇の掘立柱建物であり柱穴の切り合い関係から、SB-167→168→169へと建て替えられたことが確認されている。また、これ以後に構造を変化させ、規模を縮小してSB-170→172へと建て替えられたことが推定でき、講堂だけで少なくとも5時期があった

挿表14 時期別建物数一覧表

建物	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
礎石建物			1	1	1		2	2				7
総柱建物			1	3	1			1	1			7
間仕切り建物						1			1			2
庇付建物			1	2	2							5
側柱建物		1	3	7	9	4	21	22	8	9	1	85
竪穴住居		3			1							4
合計	0	4	6	13	14	5	23	25	10	9	1	110

挿表15 種類別・規模別建物数一覧表

礎石建物				
桁行数	8	?	小計	
梁間数	8	?		
時	1			
	2			
	3	1		1
	4	1		1
	5	1		1
	6			
期	7		2	2
	8		2	2
	9			
	10			
	11			
合計	3	4	7	

竪穴住居

時 期	1	
	2	3
	3	
	4	
	5	1
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	
合計	4	

・礎石建物は建物一覧表（第1表）ではSB-171だけであるが、3～5期に想定できるので重複して挙げている。また、SD-15・16の内部にも礎石建物を想定しており、これも礎石建物として計算している。

挿表15 種類別・規模別建物数一覧表

間仕切り建物

	桁行数	4	3	小計
	梁間数	2	2	
時	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6	1		1
期	7			
	8			
	9		1	1
	10			
	11			
合計	1	1	2	

総柱建物

	桁行数	4	3	3	?	小計
	梁間数	2	3	2	?	
時	1					
	2					
	3				1	1
	4		1	2		3
	5	1				1
	6					
期	7					
	8			1		1
	9			1		1
	10					
	11					
合計	1	1	4	1	7	

庇付建物

	桁行数	7	5	3	小計
	梁間数	4	3	2	
時	1				
	2				
	3	1			1
	4	1		1	2
	5	1	1		2
	6				
期	7				
	8				
	9				
	10				
	11				
合計	3	1	1	5	

側柱建物

	桁行数	6	5	5	5	5	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	1	?	?	?	?	小計	
	梁間数	3	3	2	1	?	2	1	?	3	2	1	?	2	1	?	1	3	2	1	?			
時	1																						0	
	2					1																	1	
	3			1																1		1	3	
	4	1	1							1	1		1					1	1				7	
	5					3			1	2	1	1											1	9
	6				1		1						1					1						4
期	7			1		1	2	1		1	10		1	2								2	21	
	8				1	1		2		1	11	1	2										3	22
	9					1	1				4	1											1	8
	10			1			1	1	1	1	1			1	1						1	1		9
	11																						1	1
合計	1	1	3	2	1	7	6	2	1	6	28	4	2	5	1	1	1	1	3	3	7		85	

ことが推定できる。

また、切り合い関係から最も古いと考えられるSB-167からは小片ではあるが灰釉陶器が出土しており、上限年代は3期と推定できる。灰釉陶器を出土した柱穴は7個あり、混入によるものとは考えがたい。

(4) 僧房

僧房は8棟が確認されており、南側の軒を揃えて並んでいる複数の群が確認できた。

(5) 溝

溝は3期以後のものが確認されている。3～6期のものとしてはSA-1の東辺に沿ってL字状になるSD-1とSA-2に伴うSD-2-14がある。また、7～9期の溝としては、講堂と金堂の跡に造られた楕円形の溝(SD-15・16)がある。

SD-1はSA-1と重なっている。出土遺物からは4期に埋まったと推定され、SA-1とSA-2との切り合い関係と矛盾しない。

(6) 掘立柱建物の偏在性

掘立柱建物のうち古代の建物に関しては、金堂、講堂等が内側区画の内部に整然と配置され、これ以外の建物と重複することがない。また、内側区画の東辺中央外側と南西隅外側には総柱建物を含む複数の建物が、軒を揃えるようにして集中している。

(7) 18次調査の北側、T-V-7～9区では広範囲にわたって遺物が集中する部分があった。新しい時期の溝に壊されている部分もあるが、不整形の浅い土壇状の遺構で、大型の廃棄土壇と考えられる。これらの遺構の北西に接するようにSE-2があり、井戸に近接するところから厨房施設に関係するものである可能性がある。これらの土壇の出土遺物は時期差を持っており、継続的に廃棄行為が行われたことを示している。

(8) 7期以降の掘立柱建物は1間×3間の側柱建物が圧倒的に多く、塀(SA-2)に囲まれた区画内(6期の古代寺院跡)にはほとんど見られない。

B. 時期区分の決定

今回報告する部分については、掘立柱建物間の切り合い関係が確認できるところが少なかった。時期区分の決定に当たって最も信頼できるのは、多量の遺物を出土した溝を伴うSA-2である。SA-2は出土遺物からは3期に造られたものと推定でき、これに切られているSA-1は1・2期のものと考えられる。また、SA-2内部の建物は出土遺物からその上限が3期と推定され、1・2期に確実に遡ると確認できた建物はない。

掘立柱建物で切り合い関係および重なりが確認できたのは、講堂である。SA-2は出土遺物から

3期～6期まで存続していたことが推定できるので、講堂は各時期に共通して存在していたと推定できる。

2. 各時期の遺構

ここで示した1～11期の時期区分は、前回の1～9期の時期区分に新たに確認された10・11期を追加したものである。掘立柱建物等の各遺構は実際には二つの時期にまたがって存在した遺構を想定することも可能であり、また各時期に含まれる遺構のすべてが同時に存在したものでもない。しかし、各遺構の個々の存続期間を明らかにすることは現状ではほとんど不可能に近い。

そこで、各時期に含まれる遺構は当該時期の幅内において存在していたとして、各時期における遺構全体の構成や各時期間の遺構変遷について具体的に説明する。

A. 1期 (挿図17)

1期は約99m四方のSA-1が主体となっている。SA-1内部には廃棄土壌がいくつか見られるが、これは出土遺物から見た上限年代であり、これらの廃棄土壌が1期以降に降る可能性も十分に考えられる。現状では、SA-1内部の建物は全く不明である。金堂の位置はSA-1においてはほぼ中央にあり、これが1期に遡る可能性も考えられる。

廃棄土壌は区画内部ではSK-197・310・311・324・328・330がある。SA-1の区画外では東辺東側のU-8区あたりに不整形で大型のもの(SX-3・6)と円形あるいは楕円形で小型のもの(SK-228・235・237)がある。これらの廃棄土壌の北西に接するようにSE-2があり、両者には何らかの相関関係が考えられる。これらの井戸と廃棄土壌は厨房施設に関連する可能性が最も高いと考えられるが、付随する建物等は確認できない。

1期において確実に確認できるのはSA-1とこの東側に集中する井戸、廃棄土壌等だけであり、区画内部の建物は確認できない。しかし、区画東側の施設の存在から、区画の内部に何らかの施設があったことは容易に推定できる。これにより内部には礎石建物が配置され、寺院としての機能を備えており、これが後に何ら痕跡を残さない程度に片づけられたと推定できる。

B. 2期 (挿図18、挿表14・15)

2期の遺構配置は基本的に1期と同様の構成をとっている。SA-1とその内部の廃棄土壌、東辺外側の井戸(SE-2)と廃棄土壌群(SX-5、SK-227・236・238)は1期と同じ構成であり、やはり内部の土壌に関しては同様に大型(SK-272・273・274等)のもの、小型(SK-312・313・314等)のものがあり、後の時期に降る可能性もある。特に東辺内側のO・P-5・6区あたりにあるSK-252・255・261・263・265・266は4期に見られる掘立柱建物とこれに伴うと推定できる土壌群と重なる位置にあり、この時期まで降る可能性も考えられる。

また、区画内部の建物構造も寺院としての機能を推定できるような建物は確認されておらず、1期と同様であったと推定できる。

2期には1期に見られたこれらの遺構以外に、掘立柱建物と竪穴住居がSA-1内外に見られる。

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W

1 期

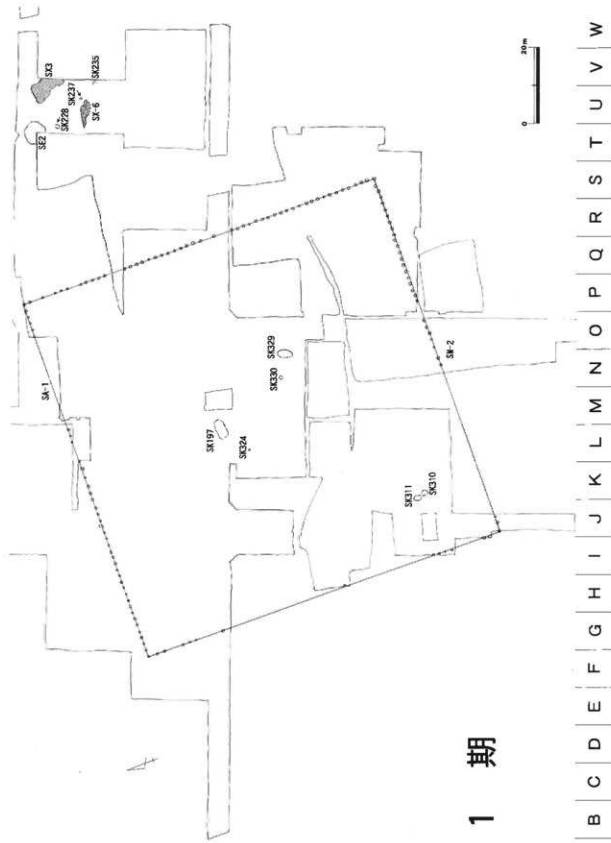
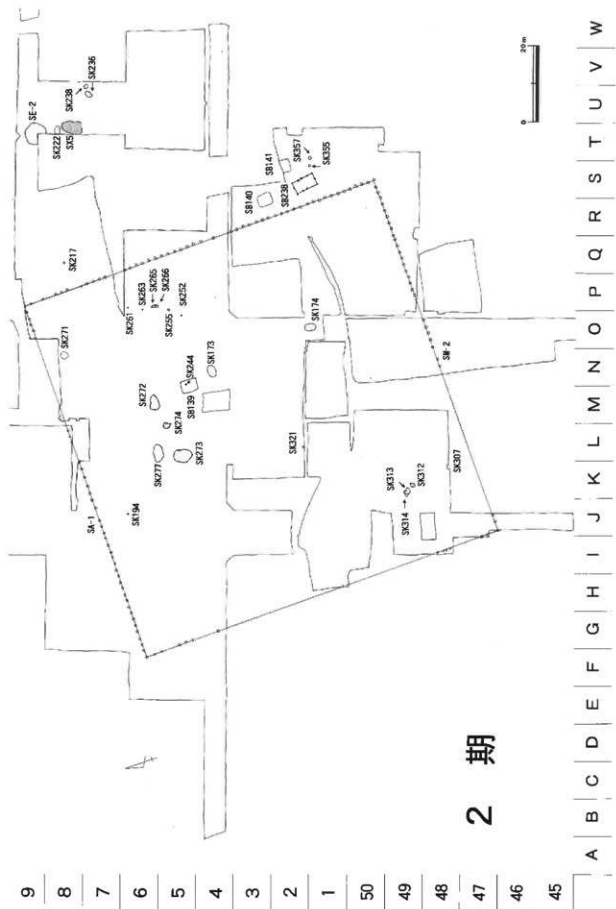


插图17 1期总图配置图 (1/1,000)



二期

挿図18 2期遺構配置図(1/1,000)

掘立柱建物（S B-238）は東辺南隅（S-2区付近）にあり、南北に長い4間×2間の側柱建物である。竪穴住居はS A-1区画内中央付近のN-5区あたりにあるS B-139、東辺南隅にあるS B-140・141の3棟がある。竪穴住居は竈あるいは焼土が集中する範囲があるが、主柱穴がはっきりしないものがほとんどであり、長期的な居住に用いられたものとは考えられない。

これらの建物群は2期の終末において、S A-1からS A-2へと造り替えられた時の工房あるいは作業場的なものであった可能性が高い。

C. 3期（挿図19、挿表14・15）

3期は掘立柱の堀が約52m×78mのS A-2に造り替えられ、遺構の全体構成が大きく変化している。S A-2は南辺の中央に3間×2間の門（S M-1）が造られ、内部には金堂（S B-171）、講堂（S B-167）、僧房（S B-165）が配置されている。金堂の構造は明かではないが、講堂は4間×7間の四面庇の掘立柱建物で金堂の北東側に接するように建てられている。講堂は他の講堂（S B-168・169）に比べ主軸が13°北に振れており、柱間の長さもやや短い。僧房は区画内の北東隅にあり、5間×2間の側柱建物である。S B-176は2間×5間以上の細長い南北棟で、S A-2の西辺に沿うように建てられている。

金堂南側の東には、大型の柱穴が2個並んでおり、輻竿支柱（S I-2）と考えられる。輻竿支柱は柱穴の掘方が大きいもので140cm、柱痕跡も40cmあり、他の建物と比較してかなり大型である。

輻竿支柱は金堂の東側前面にS I-2、西側前面にS I-1があり、金堂の両側でほぼ対応する位置にある。出土遺物からはこの両者が同時に存在していたかは確定できないが、柱穴の規模や主軸方向が異なっており、柱穴が大型のS I-2から小型のS I-1に建て替えられたものと推定できる。

3期のS A-2に伴うと考えられる溝はS D-4・7・10・11・13・14・15、1次・S D-15であり、南辺外側の門の両側、北辺東側寄りの内外、西辺北よりの外側である。これらの溝はS A-2に付随すると考えられる溝の一部である。溝全体は一体のものとして3～6期のすべてに渡って存在していた可能性も想定はできる。しかし、S D-5・6のように明瞭に掘り直されていたり、S D-6のようにS B-176・177と重なっているものも見られ、また、確実に途切れているところも確認できる。これはすべての溝が同時存在したのではない可能性を示している。そこで、溝に関しては今回は途切れているところを重視して、短い単位で分割して把握することとした。また、南辺の西外側には南辺に平行するように掘立柱の堀（S A-4）が見られる。S A-2に伴う溝の全体的な構成の中で特徴的なのは、東辺に溝が見られないことである。

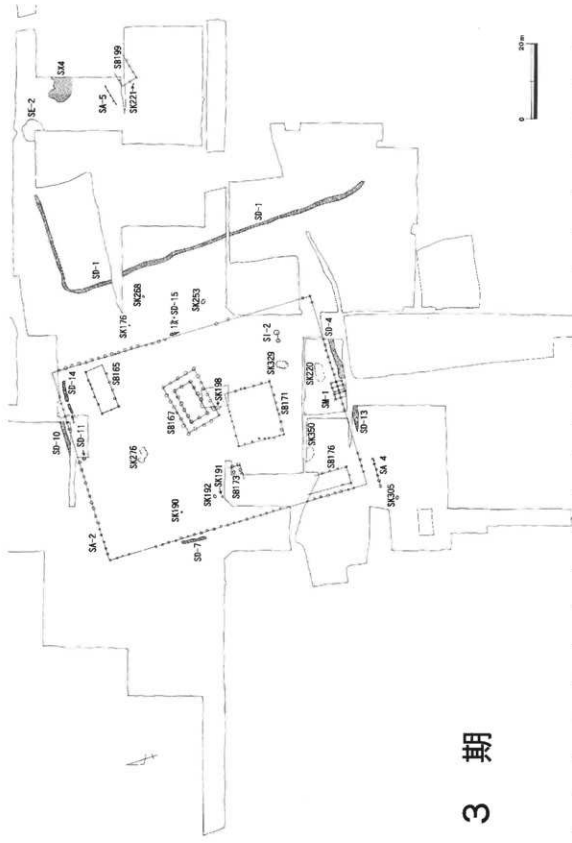
S A-2の東側にはS A-1の西側に沿うようにS D-1がある。S D-1は南北に長く、S-50区当たりで浅くなって切れており、P-8区当たりで直角に折れて東に延びて、R-9区で途切れている。R-9区で途切れた先にはS E-2があり、S D-1とS A-2の間には建物が見られず、広場あるいは通路的な空間を構成している。S D-1からは多量の須恵器が出土しているが灰釉陶器碗3（K-90型式）も出土しており、最終的に埋没したのは4期と推定できるが、3期には既に存在していたと考えられる。

廃棄土壌はS A-2内部では不整形で大型のもの（S K-220・276・350等）と円形あるいは楕円

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

3 期

A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W



挿図19 3期遺構配置図 (1/1,000)

形で小型のもの（SK-176・190等）がある。SA-2の区画外では東辺東側のU-8区あたりに不整形で大型のもの（SX-4）と円形で小型のもの（SK-226）がある。これらの廃棄土壌の北西に接するようにSE-2があり、両者の何らかの相関関係が考えられる。また、これらの廃棄土壌の南側には掘立柱建物のSB-199と塀SA-5があり、井戸と共にこれらの遺構は厨房施設に関係するものである可能性が考えられる。

D. 4期（挿図20、挿表14・15）

4期はSA-2内外の建物の構成に変化が見られる。SA-2内部では、講堂（SB-168）、僧房（SB-160・163）が建て替えられ、南西隅に細長い側柱建物（SB-177）が配置されている。金堂（SB-171）は当然存在したと考えられ、金堂東側の大型の土壌（SK-331・327）からは多量の瓦が出土しているところから、4期に建て直された可能性が高いと考えられる。講堂は4間×7間の四面庇の掘立柱建物で金堂の北側に平行して建てられている。主軸はSA-2や僧房とほぼ同じであり、柱間の長さはSB-167より長くなっている。僧房は講堂の北側に南側の軒を揃えるようにして2棟が並んでいる。この2棟は柱間の間隔は違うが軒を揃えているところから同時に存在していたと考えられる。SB-177は2間×5間以上の細長い南北棟で、SA-2の西辺に沿うように建てられている。SB-177はSB-176とほぼ同一規模で同じ場所に建て替えられており、同様な機能を持った建物と考えられる。この建物はSD-6と重なっており、SD-6は少なくとも4期まで遡らないことが確認できる。

4期が建物配置で3期と大きく異なる点は、SA-2の東辺中央と南西隅に新たに建物が集中することである。南西隅には2間×3間の総柱建物であるSB-178・179が南側の軒を揃えるようにして並び、これらの南約10mにはSB-206・207があり、計4棟が建てられている。SB-207は3間×3間の総柱建物であり、SB-206は現状では側柱しか確認できないが、新しい時期の溝によって著しく破壊されており、総柱の建物であった可能性もある。いずれにしても、南西隅には総柱建物が集中することが特徴である。東辺の中央外側ではSD-1との間に側柱建物を中心に4棟が建てられている。これらの建物の中で中心になるのは東側に庇を持ったSB-185であり、この東側と南側には他の建物が四角く並んでいる。SB-184・241は小規模な側柱建物であり、SB-185・187はやや大きな建物である。SB-184・187の東側の軒はほぼ揃う位置にあり、この両者は同時存在した可能性が高い。また、これと対応するようにSB-185・241があり、4棟が同時存在したのではなく、同じような構造と規模を持った建物が2棟づつ建て直された可能性も考えられる。SA-2とSD-1の間が通路的な機能を有しているとするれば、建て替えられたものである可能性は更に高くなると考えられる。

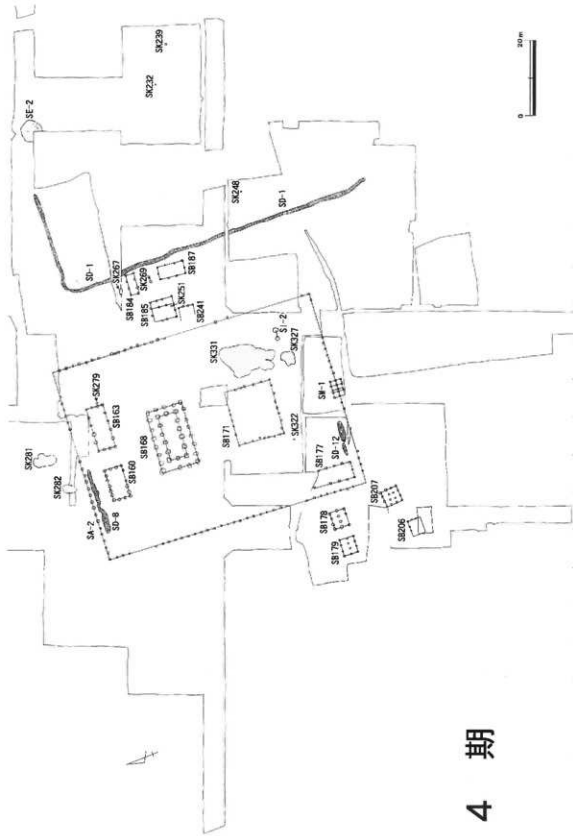
幢竿支柱（SI-2）に関しては、存続時期がはっきりしないが4期まで存続したと想定した。

また、4期のSA-2に伴うと考えられる溝はSD-8・12である。SD-12は南辺の塀の内側で、SB-177とSM-1の間にある。これ以外のSD-4・13も同様に南辺外側の門の両側にあり、4期まで存続していた可能性もある。また、北辺の塀の内側にあるSD-8も北辺東側寄りの塀の内側にあるSD-10・11との関連が考えられ、SD-10・11がこの時期まで存続していた可能性も考えられる。4期の溝は3期と同様にSA-2の南辺と北辺に集中している傾向がある。

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

4 期

A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W



挿図20 4期遺構配置図 (1/1,000)

SA-2の東側には3期と同様に出土遺物からSD-1が存続していたと考えられる。

廃棄土壌はSA-2内部では金堂の東側に接するようにして不整形で大型のSK-327・331がある。SK-331は瓦を多量に廃棄したいわゆる瓦溜まりで、平面形は不整形、底面は平坦ではなく、いくつかの穴の集合のようになっている。SA-2北辺の外側には楕円形で大型の廃棄土壌(SK-281・282)があり、これ以外には小型のもの(SK-251・267等)が少数見られるだけである。

SA-2の区画外では1～3期に東辺東側のU-8区あたりに集中した不整形で大型の廃棄土壌は見られなくなり、4期になってSE-2周辺の役割が変化したものと考えられる。

4期は北側掘立柱建物群において、建物数が激減し、構成が大きく変化した時期である。この変化に対応するように、SA-2では南西隅に総柱の倉庫群が、東辺中央には性格を異にする側柱建物群が集中して建てられており、北側掘立柱建物群が担っていた何らかの機能を移転させたものと考えられる。

E. 5期 (挿図21、挿表14・15)

5期は4期の建物配置を基本的には踏襲しながらも、いくつかの変化が指摘できる。SA-2は南側に拡張され南北の長さが約78mになっている。SA-2内部では、講堂(SB-169・170)、僧房(SB-159・161・164・166)が建て替えられ、南西隅にあった細長い側柱建物はなくなっている。金堂(SB-171)は当然存在していたと考えられる。講堂は4間×7間の四面庇の掘立柱建物(SB-169)で金堂の北側に平行して建てられている。主軸はSA-2や僧房とほぼ同じであり、柱間の長さはSB-167よりやや短くなっている。SB-169とほぼ重なるようにSB-170がある。SB-170は南側に庇が付いた5間×3間の建物で、SB-169と主軸方向が同じで、ほぼ同じ位置にあり、規模を縮小して建て替えられた講堂と考えられる。

僧房は講堂の北側に南側の軒を揃えるようにして3棟(SB-159・161・164)が並んでいる。この3棟は柱間の間隔は違うが軒を揃えているところから同時に存在していたと考えられる。また、区画内の北東隅にはSB-164と重なってSB-166があり、建て直されたものと考えられる。

SA-2北東隅の外側には竪穴住居のSB-138がある。SB-138は主柱穴がはっきりしないもので、他の竪穴住居と同じように、日常的な住居ではなく、作業小屋的なものと考えられる。

5期が建物配置で4期と大きく異なる点は、講堂と僧房に建て替えが見られ、2時期に細分できることである。これは4期と5期の時間幅の違いをそのまま示しているものと考えられる。また、区画内南西隅には細長い側柱建物が見られなくなり、金堂前の空間の役割が変化したことを示している。

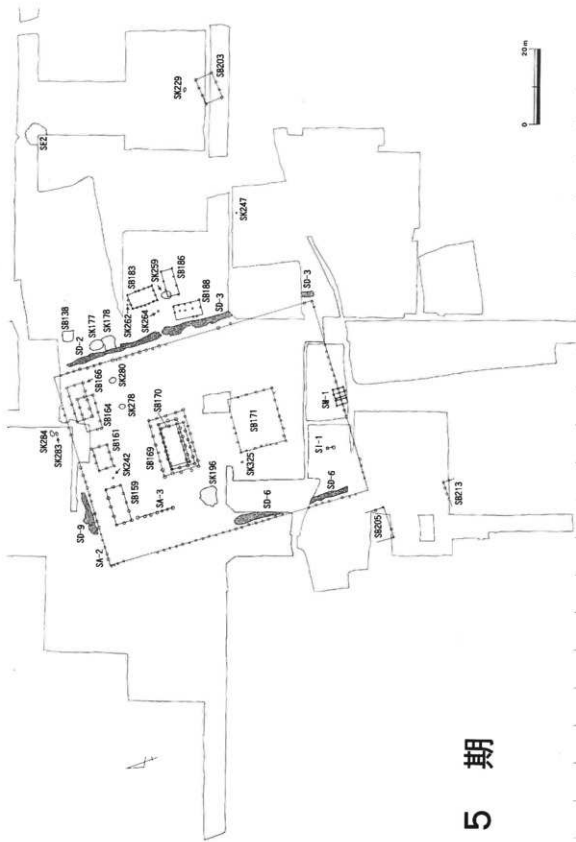
SA-2の東辺中央と南西隅の建物群も建て替えられている。南西隅には5間×2間以上のSB-205、3間以上×1間以上のSB-213の2棟があり、主軸方向が共通している。この2棟は4期にあった建物の建て直しと考えられ、現状では確認できないが、総柱建物の可能性もある。東辺の中央外側では側柱建物が3棟(SB-183・186・188)あり、いずれも4期の建物の建て替えと考えられる。SB-183・186は西側の軒がほぼ揃っており、同時に存在した可能性が高い。僧房や金堂の関係から推定すると、SB-183・186からSB-188に建て替えられた可能性が高い。

また、5期のSA-2に伴うと考えられる溝はSD-2・3・6・9である。SD-2・3・6は

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

5 期

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W



挿図21 5期遺構配置図 (1/1,000)

SA-2の東辺と西辺に平行するもので、これまで見られなかったものである。南辺が拡張して造り替えられたが、SM-1と同じような構造の門は確認できず、SM-2と同様に棟門造りの門であったと考えられる。また、南辺の塀には溝が伴っていない。

廃棄土壌はSA-2内部では講堂の西側に不整形で大型のSK-196があり、北東側には円形やや小型のSK-278・280がある。金堂の周りには4期に見られたような瓦を多量に含んだ廃棄土壌は見られない。SA-2外側では、北東隅のSD-2に接するようにSK-177・178がある。これらは隅丸方形をしており、SB-138と関連するものと考えられる。これ以外には小型のもの(SK-259・262等)が少数見られるだけである。

5期は基本的に4期の建物配置を踏襲しながら、後半には建物規模を縮小して、棟数も減少した時期である。

F. 6期 (挿図22、挿表14・15)

6期は5期とはかなり異なっており、大きな変化が指摘できる。SA-2内部では、講堂(SB-172)、僧房(SB-162)、金堂(SB-175)が建て替えられ、主たる建物がほとんど見られなくなる。講堂は4間×2間の間仕切りのある掘立柱建物(SB-172)で、これまで建てられていたところの前面に接するように建てられている。金堂は4間×1間の側柱建物(SB-175)が講堂の場合と同じように、前面に接するようにして建てられている。SB-175は金堂とするにはあまりにも小規模な建物であるが、位置関係や建物規模が講堂の場合と同じであるところから、金堂の可能性が高いと考えた。また、金堂の西側に柱穴がやや大きく、桁行が約7.2mとこれまでの建物には見られなかった程長い1間×1間の掘立柱建物がある。これはSK-333に切られており、6期の中でも古い時期のものと考えられるが、建物構造が特殊であり、どのような建物になるのかは不明である。

僧房は講堂の北側のほぼ中央に、これまでのものとは主軸をやや異にし、規模も縮小されて建てられている。

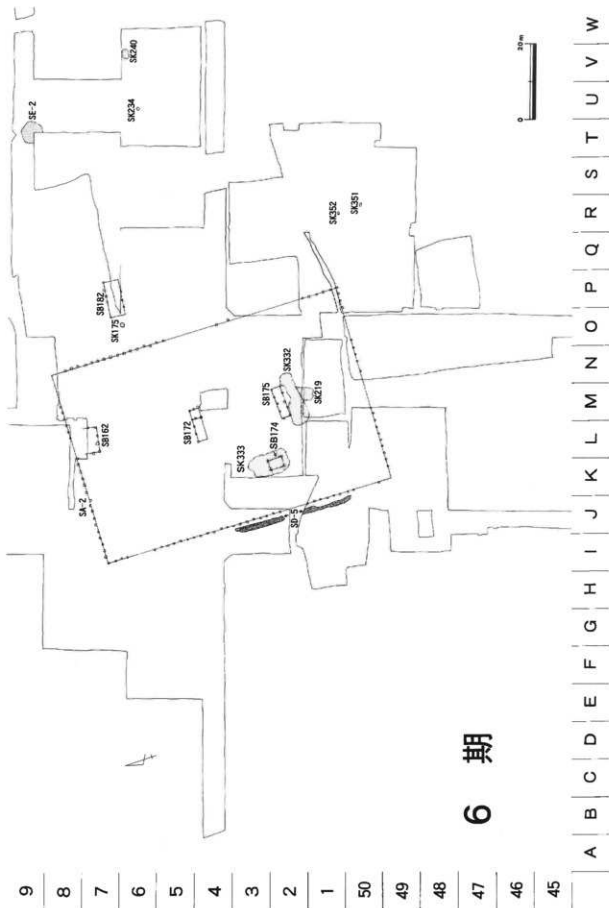
6期が建物配置で5期と大きく異なる点は、金堂と講堂が大規模に縮小され、終末的な様相を示していることである。

SA-2の東辺中央と南西隅の建物群にも大きな変化が見られ、南西隅には建物が無くなり、東辺の中央外側では側柱建物が1棟(SB-182)確認できるのみである。

6期のSA-2に伴うと考えられる溝はSD-5のみである。

廃棄土壌はSA-2内部では金堂の西側と南側に不整形で大型のSK-219・332・336があり、多量の瓦を含んだいわゆる瓦溜まりである。出土遺物はほとんど瓦のみであり、これまでの礎石建物の金堂が廃棄され、片づけられた時のものと考えられる。これ以外には小型のもの(SK-175・234等)が少数散在的に見られるだけである。

6期は北側掘立柱建物群においても、さらに建物数が減少し、遺跡が終末に向かう時期である。この変化に対応するように、区画内においても金堂、講堂がこれまでと全く異なった小規模な掘立柱建物に建て替えられ、やがて、これらの建物も廃絶したと考えられる。



6 期

挿図22 6期遺構配置圖 (1/1,000)

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W

G. 7期(挿図23、挿表14・15)

7期に至ると、古代寺院が存在した地区以外にも、散在的に建物が見られるようになる。北側掘立柱建物群においても、同様に周辺地に散在的に建物が見られるようになっており、同様な変化を示している。また、これらの掘立柱建物は均等に散在するのではなく、複数の集中箇所が指摘できる。北側掘立柱建物群では①～⑥の6群が指摘できたが、今回報告する地区においても7期～9期の間に⑦～⑫の6群を指摘できる。7期においては、掘立柱建物は⑦～⑫の6群に集中している。

⑦群にはS B-149・150・152・154の4棟があり、10～15mの間において東西に並んでいる。また、S K-183・193・335の廃棄土壌も同様に散在して見られる。⑦群の中央北側約15mにはS E-14がある。S E-14は出土遺物からは8期に埋まっているが、築造は7期に遡るものと考えられる。

⑧群にはS B-208・215の2棟があり、ほぼ10mの間において東西棟(S B-208)と南北棟(S B-215)が南北に並んでいる。また、S K-316・317の廃棄土壌もS B-215の西側に近接している。

⑨群にはS B-217・218・220・221・226・228・231・235の8棟があるが、15m程の間において、北と南の2ヶ所に集中している。この両者の間には、S K-285・286・289・291の廃棄土壌が集中している。⑨群の北東にはS E-11が、東側にはS E-13がある。S E-11・13は出土遺物からは8期に埋まったことを示しているが、築造は7期に遡るものと考えられる。

⑩群にはS B-180・181の2棟があり、ほぼ5m程の間において並んでいる。この両者の東約5mにはS K-218の廃棄土壌がある。

⑪群にはS B-189・194・196の3棟があるが、5～15m程の間において並んでいる。S B-194は堅穴状遺構(S K-249)を伴う建物であり、これらの建物の北側には、S K-204・209・210・215・216・254の廃棄土壌が近接して並んでいる。⑪群の西の外れにはS E-10があるが、井戸ではなく、7期以前に遡る可能性もある。

⑫群にはS B-198・201の2棟があるが、両者の間は25m程離れている。S B-201の南東約25mには、S K-223・224の廃棄土壌がある。これらの遺構は他と比較してやや離れており、あるいは調査区外に広がり、異なった集中区となる可能性もある。

これ以外の遺構としては、講堂のあったところに楕円形の溝(S D-15)、金堂のあったところに長方形の溝(S D-16)が掘られている。S D-16は金堂基壇に伴う溝の内法に沿って長方形に造られており、礎石や基壇等の金堂の基礎遺構が残存している段階で造られたものである可能性が高い。S D-15は講堂のあったところの北寄り中央に造られている。東西の長さはS D-16とほぼ同じで、南北の長さが約半分である。また、これら二つの溝内部からは柱穴は確認されておらず、残存していた礎石を再利用して礎石建物が再建された可能性が高いと考えられる。この場合、講堂と金堂の跡地の真上に、ほぼ1対2の規模で礎石建物が建てられていた可能性が高く、講堂と金堂に類する建物が再建されたものと考えられる。S D-15・16は、出土遺物からは8期に埋まったと考えられるが、S D-16では溝の掘り直しを確認されており、一定期間の存続を想定できるものであり、築造年代は7期と推定できる。

H. 8期 (挿図24、挿表14・15)

8期においては、掘立柱建物は⑦～⑨・⑪・⑫の5群に集中している。

⑦群にはSB-148・151・155・239の4棟があり、7期の建物配置を踏襲するかのよう約10～15mの間をおいて東西に並んでいる。また、⑦群の中央北側約15mにはSE-14があり、SE-14の南約5mにはSK-339・343・344のやや大きな廃棄土壌が集中している。この部分は廃棄土壌と井戸の南側に掘立柱建物が並んでおり、有機的な関係が推定できる。

⑧群にはSB-210・212・216の3棟があり、ほぼ20～25m間をおいてL字状に並んでいる。建物はやや散漫に並んでおり、廃棄土壌もはっきりしないが、南側の発掘調査区外に続くものと考えられる。

⑨群にはSB-219・222・224・225・227・230・232・236・237の9棟がある。これらの建物は東西棟が多く、一部に重なっている建物もあるが、ほぼ同じような間隔で散在している。SB-219はこの群の中では最も大きな建物で南側にはSA-6がある。また、SB-232は竪穴状遺構(SK-294)を伴う建物であり、この周辺にはSK-292・294～297・300・353の廃棄土壌が集中している。

⑩群の北東にはSE-11が、東側にはSE-13があり、これらの建物群に伴うものと考えられる。

⑪群にはSB-191～193の3棟があるが、ほぼ近接するように並んでいる。また、SB-193は竪穴状遺構(SK-249)を伴う建物であり、これらの建物の北側には、SK-200・202・216～208・211・212・214・250・257・260のやや小型の廃棄土壌が集中している。

⑫群にはSB-197・202・204の3棟があるが、3者の間は20m程離れている。SB-202は竪穴状遺構(SB-202・P-14)を伴う建物であり、この北側には、SK-225・230・231・233の小型の廃棄土壌が近接している。これら3棟はやや離れており、あるいは調査区外に広がり、別個の集中区となる可能性もある。

これ以外の遺構としては、7期と同様にSD-15・16があるが、内部に礎石建物が建てられていた可能性が高いと考えられる。

また、SD-16の南にはSK-172・323の大型の廃棄土壌(瓦溜まり)が見られ、他の廃棄土壌とは異なり、多量の瓦を出土している。この二つの廃棄土壌は8期の遺物を僅かに含んでいるが、大半は須恵器、灰軸陶器である。8期の遺物は何らかの混入であり、本来は近接した瓦溜まりと同じように6期に形成されたものである可能性が高いと考えられる。

I. 9期 (挿図25、挿表14・15)

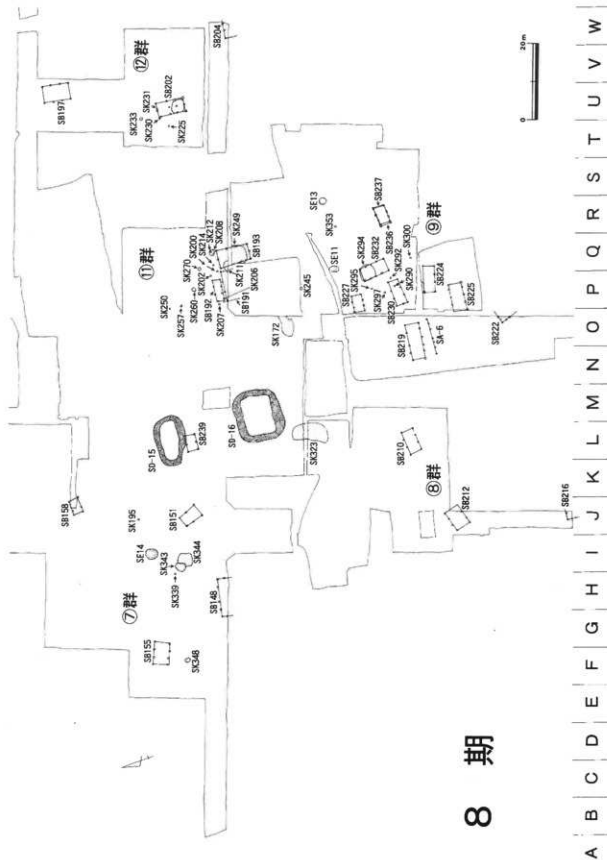
9期においては、掘立柱建物は⑦～⑨・⑪・⑫の5群に集中している。

⑦群には僅かにSB-150の1棟が確認できるのみである。SB-150東側にはSK-340～344の小型の廃棄土壌がある。

⑧群にはSB-214の1棟が確認できるのみである。廃棄土壌は小型のSK-320が確認できるが他ははっきりしない。これらの遺構は南側の発掘調査区外に続く可能性が高いと考えられる。

⑨群にはSB-223・229・233・234の4棟がある。SB-223は南側にやや離れているが、他は近接している。SB-233は竪穴状遺構(SK-287)を伴う建物であり、この周辺にはSK-287・

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45



8 期

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W

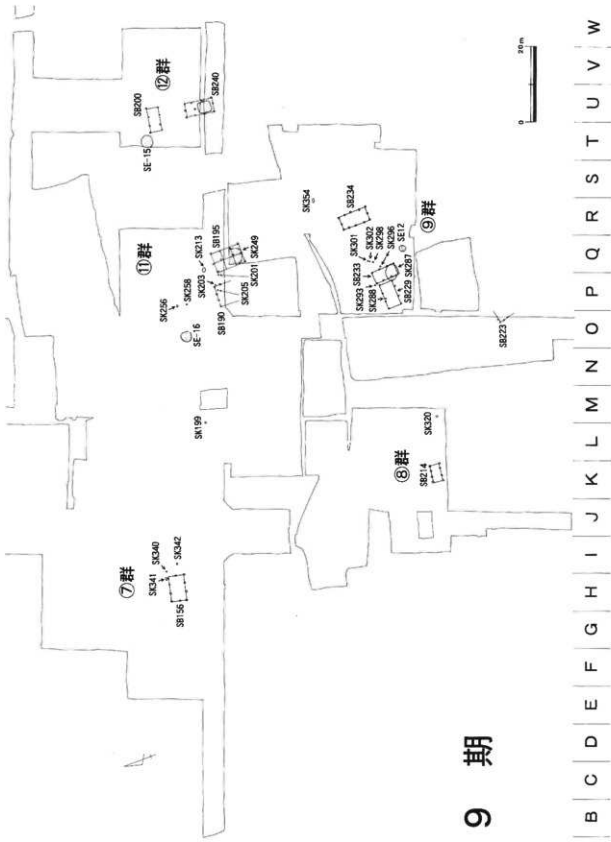


挿図24 8期遺構配置図 (1/1,000)

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W

9 期



棟図25 9期遺構配置図 (1/1,000)

288・293・296・298・301・302・354の小型の廃棄土壌が集中している。集中する建物群の南にはS E-12があり、これらの建物群に伴うものと考えられる。

①群にはS B-190・195の2棟があるが、ほぼ近接するように並んでいる。S B-195は竪穴状遺構(S K-249)を伴う建物であり、S B-193・194の建物と重複している。建物の北側には、S K-201・203・205・213・256・258のやや小型の廃棄土壌が集中している。また、これらの建物や廃棄土壌の北西にはS E-16が近接している。S E-16に接するように湾曲した溝(1次・S D-13)があり、井戸に関連したものと考えられる。溝が湾曲している例は他にも見られるが現状では溝全体の構成が明かではなく、溝と建物等の他の遺構との関係については今後の検討課題である。

②群にはS B-200・240の2棟があるが、両者の間は5 m程離れている。S B-240は竪穴状遺構(S B-240・P-12)を伴う建物であるが、周辺の廃棄土壌ははっきりしない。

7・8期に見られたS D-15・16は9期には廃絶しているようである。

J. 10期 (挿図26、挿表14・15)

10期においては、掘立柱建物⑦・⑧の2群に集中している。

⑦群にはS B-143-147・153・157の7棟がある。S B-157は9期のS B-156に重なっており、建て替えと考えられる。S B-157の西約10mにはS B-153があり、その他のS B-143-147はかなり重複している。S B-153とS B-143との間を中心に、S K-179-182・184-188・334・336・337・349の小型の廃棄土壌が集中している。これらの遺構は南側のE・F・G-3区に続く可能性が高いと考えられる。

⑧群にはS B-209・211の2棟が確認できるのみである。廃棄土壌はこれらの建物の周囲にS K-304・308・309・315・318・319が確認できるが、いずれも小型のものである。これらの遺構は南側の発掘調査区外に続く可能性が高いと考えられる。

10期にはこれらの建物群以外に大小の廃棄土壌が散在的に見られる。

K. 11期 (挿図27、挿表14・15)

11期については、時間幅が長く、遺構がほとんど特定できず、大まかに近世以降としている。建物はS B-142が想定できるが、これが本当に掘立柱建物であるのか、あるいは単なる囲いであるのかははっきりしない。

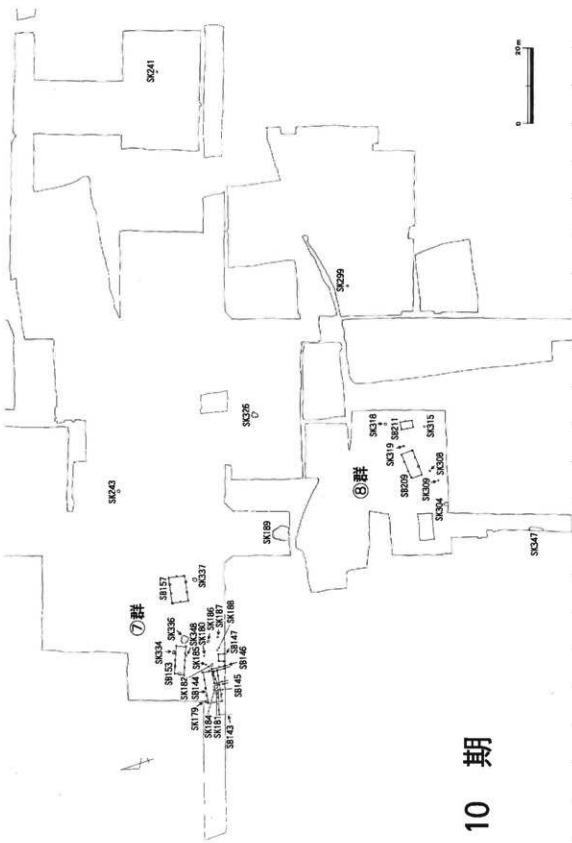
廃棄土壌もS K-306・344・349の大型のものがI・J-48・49区に集中しているが、この近辺では建物等の遺構は確認できていない。11期に至って、市道遺跡周辺は主たる居住地ではなかったことを示すものと考えられる。

3. まとめ

今回報告した市道遺跡の南側区画(寺院址)は、前回報告した北側掘立柱建物群と同様に大きくは、古代と中世の2時期に分類できる。また、近世以降(11期)については遺構が少なく、不明な点が多い。

A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W

挿図26 10期遺構配置図 (1/1,000)

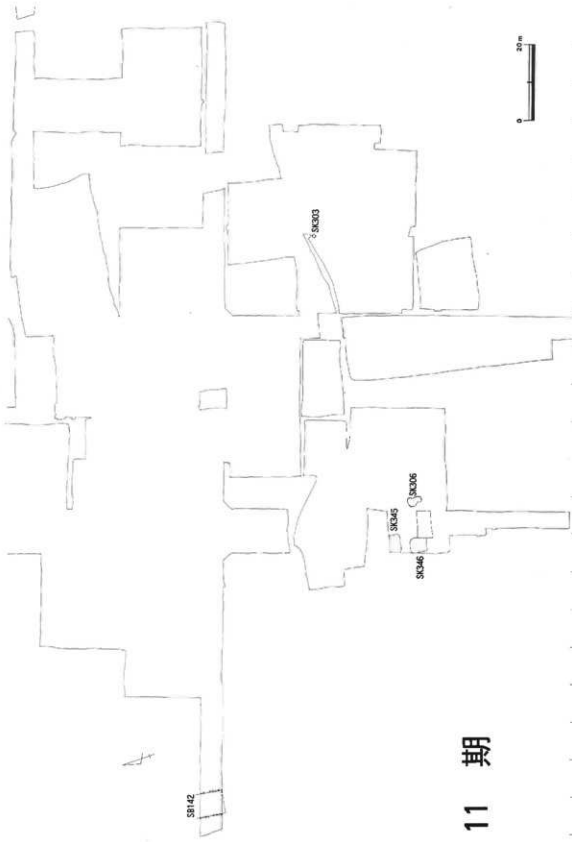


10 期

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

9
8
7
6
5
4
3
2
1
50
49
48
47
46
45

A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W



11 期

挿図27 11期遺構配置図 (1/1,000)

A. 古代（1～6期）

古代においては、寺院址の構造から前期（1・2期）と後期（3～6期）に細分できる。

（1）前期（1・2期）

前期ではSA-1に囲まれた区画が寺院址と考えられるが、内部の建物配置については全く不明である。しかし、SA-1の東辺から約40mほど東にSE-2とこれに付随する大型の廃棄土壌（SX-3・5・6）が1期から継続的に存在している。これらの遺構は3期にも同様に見られるので、前期（1・2期）においても区画内部に建物が配置され、寺院として機能していたことを示すものと考えられる。

区画内部では建物の痕跡は確認できないが、金堂・講堂等の主たる建物が礎石建物であったために、すべてが片付けられ確認できないものと考えられる。

（2）後期（3～6期）

後期は区画がSA-2に建て替えられ、規模が縮小されるとともに、金堂以外は掘立柱建物に建て替えられている。寺院の構造や規模は3～5期においては基本的に同じであるが、6期に大規模な縮小が行われ、最終的には断絶している。

3期には新たな伽藍が建立されるが、講堂は他の時期に比べて主軸が異なりやや東に片寄って造られている。このような建物配置は3期以後には見られないものであり、2期にあった礎石建物の位置に何らかの影響を受けていたものと考えられる。

4期には区画の東辺中央外側に掘立柱建物が、南西隅外側に総柱建物が集中して建てられている。これは、4期に北側掘立柱建物群（正倉・居館）が縮小することと関連しており、北側掘立柱建物群が担っていた機能を移転したものと考えられる。それは二つの建物群の構造の違いから推定すると、南西隅の総柱建物群が正倉、東側の建物群が執政機関的な機能を有していたものと考えられる。

5期は基本的に4期と同様であるが、5期後半には、講堂の規模が縮小されて南面庇の掘立柱建物になり、寺院は衰退に向かっていくようである。

6期に至ると南西隅外側の総柱建物はなくなり、東辺中央外側の掘立柱建物群も1棟が確認できるだけになる。また、金堂の南と西には瓦溜まりと考えられる大型の廃棄土壌（SK-219・332・333、8期のSK-323についても6期に含まれる可能性がある。）があり、金堂の最終的な片づけに伴うものと考えられる。そして、礎石建物の金堂、掘立柱建物の講堂は掘立柱の小規模な建物（SB-172・175）として再建され、やがてこの建物もなくなり、寺院自体が断絶するようである。

B. 中世（7～10期）

市道遺跡の建物群は、7～9期については同じような構造の複数群に変化するが、10期に至ると建物群が減少していることが確認できる。また、市道遺跡の南に接するようにしてある公文遺跡では大規模な溝に区画された館が確認でき、市道遺跡の主体的建物群が移動したかのように見える。しかし、6期と7期の間は現状での土器編年を基にする限り若干の断絶期間を想定する必要がある、公文遺跡

に居住していた豪族と市道遺跡に居住していた豪族を同じ系譜に連なると解釈できるかどうかははっきりしない。

7期には金堂と講堂の跡に溝が掘られ、この内部に礎石建物が建てられたことが想定できた。溝は8期にはほとんど埋まるようであるが、9期に至っても金堂・講堂周辺には建物が見られないところから、9期にも礎石建物が残っていた可能性も指摘できる。

7期の掘立柱建物群は6群がある。建物数は竪穴状遺構を伴う掘立柱建物のように特殊な構造の建物を有する⑨・⑩群については他の群より多い傾向が指摘できるが、公文遺跡の大規模な溝に囲まれた建物群に見られるような建物群の構造に際立った差はなく、ほぼ同じような状況であったと考えられる。

8期は⑩群が無くなるが、これ以外の建物群の状況は7期と同じである。

9期は建物群の構成に変化はないが、各建物群内の建物数が減少傾向にあることが指摘できる。

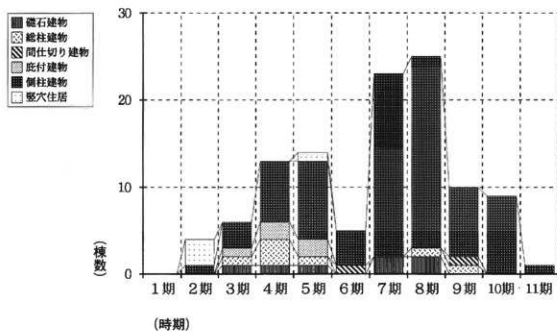
10期には、建物群は⑦・⑧群に集約され、1群当たりの建物数が増加する。しかし、出土遺物からは16世紀を中心とした一時期のものであり、これ以後には継続しない。

9期と10期の間は現状での土器編年を基にする限り100～150年程の断絶期間を想定する必要がある。10期の建物群が9期の系譜を引くものであるかははっきりしない。S B-156(9期)・157(10期)については、同じ建物の建て替えと考えられ、この両者の間に断絶期間を想定することは困難である。今回は柱穴の出土遺物から推定した時期を優先したが、S B-156については10期に降る可能性を否定できない。S B-156・157周辺には9期の遺物を出土した廃棄土壌があるが、これらも10期まで降る可能性を否定できない。

C. 近世以降(11期)

市道遺跡は近世以降になると、建物や土壌等の遺構がほとんど確認できなくなってしまう。これは、市道遺跡周辺が居住地ではなかったことを示している。実際、民家が密集している半呂地区において、市道地区は民家がほとんど見られない地区であり、現在まで伝わる言い伝えでは、市道地区は家を建ててはいけない所とされていた。明治23年測量の地図(挿図2)でも民家は全く見られず、調査開始時点ではほとんどは畑であった。道路についても畑に行く畦程度のものしかなく、調査時点で既にあった家については、昭和になって細い道を付けて新たに建てられたものである。近世以降は、地境の溝は推定できる可能性があるが、建物や土壌等の遺構はほとんど確認できず、基本的には居住地ではなかったと考えられる。

挿表16 建物時期別棟数一覧表



挿表17 建物時期別割合一覧表

